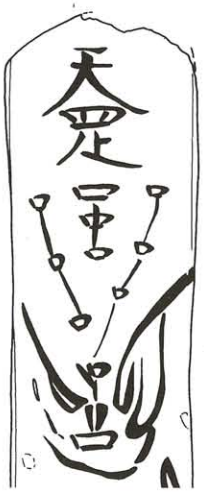
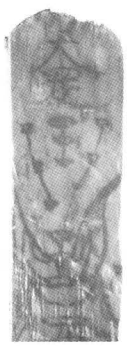
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

紀要 2003



2004年12月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター



（表紙）　鹿田遺跡第14次調査（病棟）
出土の木簡
（平安時代後半～末）
（裏表紙）鹿田遺跡第７次調査
（基礎医学棟）出土の猿形木製品
（鎌倉時代末～室町時代）

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要

2003

2004年12月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

序

2003（平成15）年度には、鹿田地区において医学部附属病院病棟新営工事にともなう発掘調査等を実施するとともに、室内整理作業を進めて創立五十周年記念館およびサテライト・ベンチャービジネス・ラボラトリーの新営にともなっておこなった発掘調査の成果を報告書として刊行することができました。

今回の鹿田地区附属病院病棟新営にかかわる発掘調査は1998（平成10）年・1999（平成11）年の第９次・第11次調査に続くもので、西側から３回に分けて実施した発掘により本学構内の遺跡発掘としてはかなり大きい5400平方メートルの調査を終えることとなりました。病棟建設地全域においては、まず弥生時代後期から古墳時代にかけての水田遺構が造成され、その上層では本遺跡の主体をなす中世・近世の遺構群がひろがっていました。調査区南端の大規模な東西溝を中心として、これに交差する南北溝やため池状遺構、あるいは調査区北寄りに集中する建物柱穴群や井戸・土坑等が見られました。広い面積の調査で鹿田地区南西部の遺跡内容が明らかとなったので、今後は、病棟建設地のすぐ南側で実施したエネルギーセンター建設地の発掘結果もあわせ、できるだけ早い機会に調査成果を報告書としてまとめたいと思っています。

なお、今回の病棟建設地の発掘調査期間中には、前２回の調査地に建設された建物の１階ロビーにおいて鹿田遺跡発掘20周年特別展示会を７日間にわたって開催しました。患者さんや病院職員・一般市民の方々多数が、通りすがりに、あるいはじっくりとパネル写真や出土遺物を観察して下さり、毎年津島地区でおこなっているキャンパス発掘成果展とはいくらか異なった雰囲気がありました。とりわけ入院患者の皆さんの熱心さは、説明にあたった職員一同への励ましともなりました。

こうした発掘調査の実施や展示会・成果展等の開催等にあたっては、本学内外の多くの方々からご協力をいただきました。関係部局・各位に厚くお礼申しあげます。

最後になりましたが、本学が2004（平成16）年４月１日から国立大学法人岡山大学へ移行したのにともない、本センターも法人理事がセンター長を兼務し、副センター長職を設けて新たな体制で運営にあたることとなりました。構内遺跡の保護・調査・研究、調査成果の公開・普及等の事業のいっそうの発展に努めたいと思いますので、今後ともご支援をお願いする次第です。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
センター長　（理事・事務局長）　阿　部　　健
副センター長（文化科学研究科教授）　稲　田　孝　司

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2003

目　次

第１章　津島岡大遺跡の調査研究
第１節　立会調査の概要 …… 1
１．調査の実施状況 …… （光本順） 1
２．公共下水桝接続工事に伴う立会調査 …… （野崎貴博・光本） 1
３．総合研究棟新営雨水排水敷設工事に伴う立会調査 …… （野崎） 6
４．その他の立会調査 …… （光本） 8
第２節　津島岡大遺跡の研究 …… 13
１．縄文時代後期の集落構造とその推移 …… （山本悦世） 13

第２章　鹿田遺跡の調査研究
第１節　発掘調査の概要 …… 21
１．鹿田遺跡第14次調査（医学部附属病院病棟） …… （岩﨑志保） 21
２．鹿田遺跡第15次調査（総合教育研究棟関連工事） …… （野崎） 25
第２節　立会調査の概要 …… （野崎） 28
１．総合教育研究棟新営屋外排水敷設工事に伴う調査 …… 28
２．総合教育研究棟外構工事に伴う調査 …… 29
第３節　鹿田遺跡の研究 …… 33
１．鹿田遺跡第14次調査出土木簡について …… （岩﨑） 33

第３章　その他地区の調査研究
第１節　東山地区の調査概要 …… （岩﨑） 36

第４章　調査資料の整理・研究および公開・活用
第１節　調査資料の整理・研究 …… 37
１．調査資料の整理 …… （山本） 37
２．調査資料の分析 …… （岩﨑） 37
３．調査資料の保存処理 …… （岩﨑） 46
第２節　調査成果の公開・活用 …… （山本） 46
１．公開・展示 …… 46
２．資料・施設等の利活用 …… 50
第３節　2003年度調査研究員の個別研究活動 …… 52
１．科学研究費採択状況 …… 52
２．論文・資料報告 …… 52
３．研究発表等 …… 53
４．資料収集・実態調査 …… 53

第５章　2003年度における調査・研究のまとめ …… （山本） 54

付　　編
岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項 …… 55
１．岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの規程
２．2003年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センター組織
３．岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項
４．2004年度の新規程およびセンター組織に関する事項
付表・付図 …… 63

挿図目次

第1章

図1　調査区と土層柱状図位置 …… 2
図2　土層柱状図 …… 2
図3　A地区　土層断面位置 …… 2
図4　A地区　土層断面 …… 2
図5　B地区　遺構断面位置 …… 3
図6　B地区　遺構平・断面 …… 3
図7　No.4区間　調査位置・土層断面位置 …… 4
図8　No.4区間　桝東壁土層断面 …… 5
図9　No.6区間　調査区・土層断面位置 …… 5
図10　No.6区間　土層断面 …… 5
図11　調査区位置 …… 6
図12　土層断面柱状図 …… 6
図13　A地点　溝群土層断面 …… 7
図14　B地点　遺構群土層断面 …… 7
図15　津島地区における立会調査地点　土層柱状図 … 8
図16　2003年度の調査地点【1】－津島地区－ …… 11～12
図17　津島岡大遺跡の位置と周辺環境 …… 13
図18　津島岡大遺跡における地形復元と調査地点 …… 14
図19　各調査地点の類型化と空間利用1
　　－縄文時代後期－ …… 17
図20　各調査地点の類型化と空間利用2
　　－弥生時代早期－ …… 18

第2章

図21　第14次調査地点位置 …… 22
図22　土層断面柱状図 …… 22
図23　検出遺構全体図 …… 24
図24　第15次調査地点位置 …… 25
図25　調査区南壁土層断面 …… 26
図26　検出遺構平面図 …… 27
図27　井戸　平・断面図 …… 27
図28　調査位置 …… 29
図29　土層柱状図の位置と土層断面 …… 29
図30　調査位置・土層柱状図位置 …… 30
図31　土層柱状図 …… 30
図32　5～7区間　土層断面 …… 30
図33　2003年度の調査地点【2】－鹿田地区－ …… 32
図34　鹿田遺跡第9・11・14次調査
　　木簡出土地点 …… 33
図35　木簡出土状況 …… 33
図36　鹿田遺跡出土木簡 …… 34
図37　木簡の類例 …… 35

第3章

図38　2003年度の調査地点【3】－東山地区－ …… 36

第4章

図39　出土鉄滓外観写真 …… 42
図40　出土鉄滓類の全鉄量と二酸化チタン量の分布図 … 42
図41　製錬滓と鍛冶滓の分類 …… 42
図42　砂鉄系鍛冶滓と鉱石系製錬滓の分類 …… 42
図43　粘土遺物の化学成分と耐火度との関係 …… 42
図44　ミクロ組織写真 …… 43
図45　鹿田遺跡第14次調査現地説明会風景 …… 46
図46　鹿田キャンパス特別展示会風景 …… 47
図47　展示会日別入場者数 …… 48
図48　展示会見学風景 …… 48
図49　津島キャンパス展示風景 …… 49

表目次

表1　2003年度津島地区調査一覧 …… 9
表2　津島岡大遺跡調査概要一覧 …… 15
表3　遺構分布状況からの類型基準 …… 15
表4　遺物(土器)出土状況からの類型基準 …… 15
表5　各調査地点の類型表 …… 15
表6　a．類型の相関関係－縄文時代後期－ …… 16
　　b．類型の相関関係－弥生時代早期－ …… 16
表7　低湿地型貯蔵穴一覧（岡山県） …… 20
表8　2003年度鹿田地区調査一覧 …… 31
表9　2003年度東山地区調査一覧 …… 36
表10　調査資料と調査項目
　　（津島岡大遺跡出土資料） …… 44
表11　津島岡大遺跡出土鉄滓の
　　化学成分分析結果 …… 44
表12　胎土の化学成分分析結果と
　　耐火度測定結果 …… 44
表13　鉄滓資料のX線回析鉱物・
　　顕微鏡組織と製造工程の分類 …… 44
表14　土壌サンプリング分析値 …… 45
表15　保存処理工程表 …… 46

付表・付図

付表１　1982年度以前の構内主要調査（1980～1982年度）…… 63
付表２　2002年度以前の構内主要調査（1983～2002年度）…… 63
付表３　埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要…… 69
付表４　埋蔵文化財調査室刊行物…… 71
付表５　埋蔵文化財調査研究センター刊行物…… 71
付図１　津島地区全体図…… 72
付図２　2002年度までの調査地点【１】－津島地区－…… 73～74
付図３　2002年度までの調査地点【２】－鹿田地区－…… 75
付図４　2002年度までの調査地点【３】－三朝地区－…… 76
付図５　2002年度までの調査地点【４】－東山地区－…… 76
付図６　2002年度までの調査地点【５】－倉敷地区－…… 76

例　言

１．本紀要は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが岡山大学構内において2003年４月１日から2004年３月31日までに実施した埋蔵文化財の調査研究成果及びセンターの活動についてまとめたものである。
２．本紀要において報告している津島岡大遺跡は岡山市津島中三丁目１－１、鹿田遺跡は岡山市鹿田町二丁目５－１にそれぞれ所在する。
３．資料分析にあたっては、岡山大学理学部地球科学科松田敏彦助教授ならびに岡山理科大学自然科学研究所の白石純氏にご協力・ご助言を頂いた。記して感謝申し上げる。
４．本文は、岩崎志保・野崎貴博・光本順・山本悦世が分担執筆し、執筆者名は目次および文末に記した。
５．編集は阿部健センター長・稲田孝司副センター長の指導の元に山本が担当した。

凡　例

１．大学構内の埋蔵文化財の調査にあたっては、平成14年度（2002年）４月１日より施行された「測量法及び水路業務法の一部を改正する法律」に基づき、世界測地系を採用し、構内座標を次のように定めている
　１）津島地区では、国土座標第Ⅴ座標系（X＝－144,156.4617m、Y＝－37,246.7496m）を起点とし、真北を基軸とした構内座標を設定する。一辺50mの方形区画である。また、同地区では調査の便宜上、大きく津島北地区と、同南地区に二分する（付図１）。
　２）鹿田地区では、国土座標第Ⅴ座標系（X＝－149,456.3718m、Y＝－37,646.7700m）を起点とし、座標軸をN－15°－Eに振ったものを基軸とした構内座標を設定する。地区割りは一辺５mの方形を基準としている。
　３）本文中で用いる方位は、津島地区・鹿田地区は国土座標系の座標北を、他は磁北を用いている。
２．岡山大学構内の遺跡名は、周知の遺跡の場合はそのまま踏襲する。三朝地区の発掘調査地点は小字名をとり「福呂遺跡」と呼称する。他地区は任意の名称で仮称する。
３．調査名称は「発掘調査」に分類したものについては、各遺跡ごとに調査順に従って次数番号で呼称し、「試掘・確認調査」「立会調査」に分類したものについては、任意の名称を用いる。発掘調査のうち、小規模で確認調査から連続して調査したものは「試掘・確認調査」に分類する。
４．「発掘調査」についての記述は、いずれも現段階での概要報告であり、詳細な正式報告ではない。
５．表に記載した所属部は、原則として各学部の頭文字を略号として用いている。
６．付表２に記載した調査一覧については、掘削深度が中世層以下に達した調査を対象とし、その他については除外した。未掲載分も含め、全てのデータは、当センターにおいて管理している。
７．本文などで使用の調査番号は表と一致する。
８．本紀要に掲載の地形図（付図１）は、平成10年岡山市発行の岡山市域図７－９・10・13・14を複写したものである。

第１章　津島岡大遺跡の調査研究

第１節　立会調査の概要

１．調査の実施状況

2003年度に津島岡大遺跡において実施された立会調査は、事業数で24件を数える（表１・図16）。全体として掘削深度が深く、規模の大きな工事が多くなされた結果、立会調査によって遺構の確認や旧地形の復元のためのデータ等、有益な知見を得ることができた。

長期的に実施された主な工事事業としては、旧事務局庁舎の移築に伴う工事や自然科学系総合研究棟新営関連の工事、農学部総合研究棟改修工事、公共下水桝接続工事があり、立会調査を随時行った。なかでも、公共下水桝接続工事と自然科学系総合研究棟新営にかかわる工事では、たびたび縄文時代の土層まで掘削がおよび、比較的多くの遺構を確認した。

以下では、はじめに、特に重要な知見が得られた公共下水桝接続工事（表１　調査番号21）と自然科学系総合研究棟新営（同８）に伴う立会調査について、調査成果の概要を述べる。次に、その他の立会調査地点について、中世段階以下の土層を確認した地点に関して概要を示す。　（光本　順）

２．公共下水桝接続工事に伴う立会調査

津島地区においては、９ヶ所で公共下水桝接続工事が行われた。近世層までの掘削がなされたNo.９区間（職員宿舎）を除く８ヶ所では、いずれも中世段階以下の土層を確認しており、No.１・２・４・６・８区間では縄文時代の土層まで掘削がなされた。ここでは、特に遺構が確認されたNo.２・４・６区間について取り上げ、他の区間については第１節４．「その他の立会調査」の項において土層の堆積状況を示すこととする。

(1)　No.２区間（津島南ＢＥ～ＢＧ10区）

ａ．調査の概要

本調査は、津島南地区の東半部、大学構内敷地南端に設置された下水桝と体育館脇の合併処理槽とを接続する汚水管敷設工事に伴って実施した立会調査である（図１）。本調査区周辺では、東に約50mの位置に1986年度に実施した第４次調査地点がある[1]。調査は2004年２月２日から24日までの期間で、工事の進行にあわせて随時実施した。

①　層序と地形（図２・３）

本調査区は南北約85m（管路長約95m）であるが、全体にほぼ同一の堆積状況を示しており、著しく異なる土層の堆積はみられなかった。各層の時期は、少量の出土遺物とこれまでの津島岡大遺跡の調査成果に依っている。

１層は1907年（明治40年）の陸軍屯営地造成以降の造成土である。２層は明灰色砂質土で、明治時代の耕作土である。３層は明橙灰色砂質土、４ａ層は明灰黄色砂質土、４ｂ層は明黄灰色砂質土、５層は灰黄褐色砂質土で、近世の耕作土である。６層は明灰褐色砂質土、７層は灰褐色砂質土で、古代から中世の耕作土、８層は灰褐色弱粘質土で、弥生時代から古代までの耕作土であると考えられる。９層は暗赤褐色砂質土、10層は暗褐色～黒

色砂質土、11層は暗灰色～灰褐色砂質土で、津島地区一帯に広がりをもつ「黒色土」と呼称している暗褐色土である。上面が弥生時代前期にあたる。12層は明黄褐色砂質土で、縄文時代後期の基盤層である。本調査地点は南北約85mの間に谷部や河道といった低地は確認されなかった。縄文時代後期の基盤層でみた地形の起伏は南北で約0.2m、最も起伏の大きい部分の比高も0.3m程度であり、幅の広い安定した微高地が形成されていたと想定できる。縄文時代後期の基盤層が最も低くなるＡ地区周辺は弥生時代前期の溝が多数掘削される範囲であり、弥生時代には最も低い部分に多数の溝を掘削していたことがうかがえる。ただし、本調査区の東約50mの地点に位置する第４次調査地点では、北東から南西方向に走行する中世段階の河道を確認しており、本調査区南

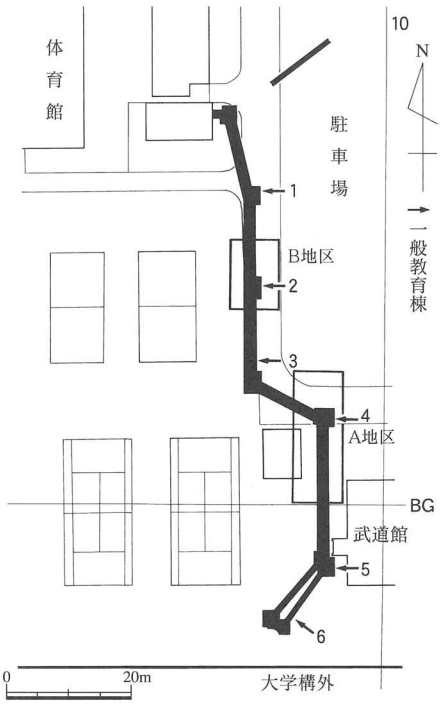
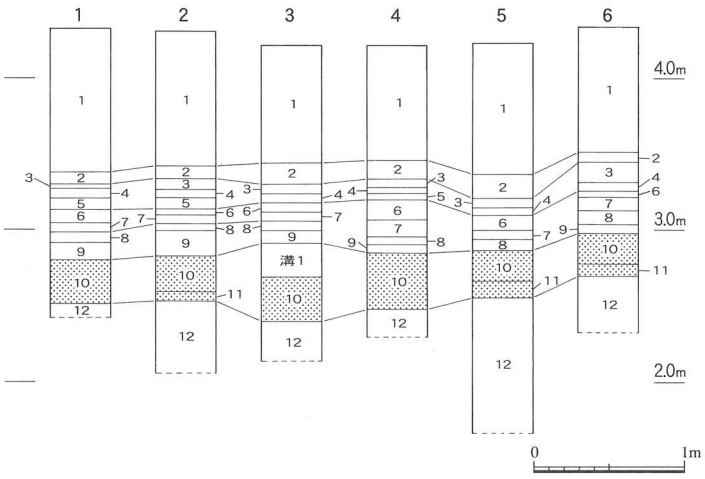


図１　調査区と土層柱状図位置
（縮尺１/1200）



1. 造成土
2. 明灰色砂質土
3. 明橙灰色砂質土
4. 明灰黄色砂質土
5. 灰黄褐色砂質土
6. 明灰褐色砂質土
7. 灰褐色砂質土
8. 灰褐色弱粘質土
9. 暗赤褐色砂質土
10. 暗褐色～黒色砂質土
11. 暗灰色～灰褐色砂質土
12. 明黄褐色砂質土

図２　土層柱状図（縮尺１/50）

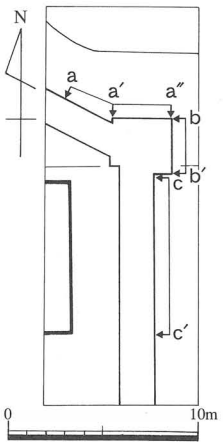
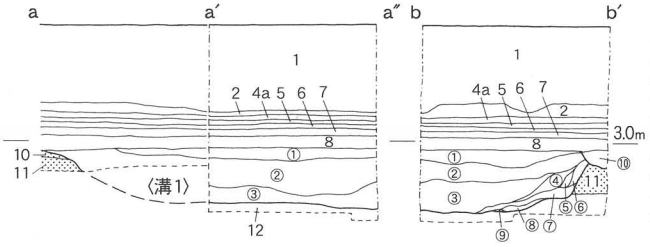
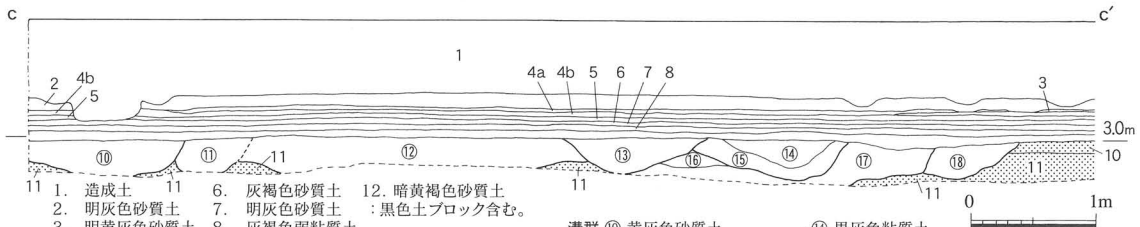


図３　Ａ地区土層断面位置（縮尺１/400）



〈溝1〉
① 明黄灰色砂質土
② 黄灰褐色砂質土
③ 灰褐色砂質土：下層は粗砂
④ 黒褐色砂質土
⑤ 黒褐色粘質土
：黒色土ブロック含む。
⑥ 褐色砂質土
⑦ 灰褐色粗砂層
⑧ 黒色砂質土：土器片含む。
⑨ 黄橙色砂質土



1. 造成土
2. 明灰色砂質土
3. 明黄灰色砂質土
4a. 明灰褐色砂質土
4b. 明黄灰色砂質土　：灰色粘質土ブロック含む
5. 灰黄褐色砂質土
6. 灰褐色砂質土
7. 明灰色砂質土　：黒色土ブロック含む。
8. 灰褐色弱粘質土
10. 黒色土
11. 黒灰褐色砂質土
12. 暗黄褐色砂質土

＊基本土層は図２の４断面に対応する。

溝群
⑩ 黄灰色砂質土
⑪ 黄灰色砂
⑫ 灰色～暗灰褐色砂質土
⑬ 暗灰褐色粘質土
⑭ 黒灰色粘質土
⑮ 黄灰色砂質土
⑯ 灰褐色砂質土
⑰ 明黄灰色砂質土
⑱ 黄灰褐色粘土

図４　Ａ地区土層断面（縮尺１/60）

端よりさらに南にこの河道が通ることが想定される。

②　遺構

遺構が密に確認されたのは、Ａ・Ｂ地区である。Ａ地区では弥生時代前期の溝群、Ｂ地区では縄文時代後期の土坑・弥生時代前期の溝を検出している。

Ａ地区（図３・４）：約10m の範囲に北東～南西方向の溝が多数切りあいながら掘削されている。溝１からは弥生前期の壺底部片が出土しており、溝１は弥生時代前期に属すると考えられる。また、そのほかの溝もいずれも溝１の掘削開始面である10層上面から掘削されており、同様に弥生時代前期の溝であると考えてよい。本調査地点から東へ約50m の第４次調査地点でも北東から南西方向に走行する弥生時代前期の溝が確認されており、この一帯では弥生時代前期に多数の溝が掘削されていたことがわかった。

Ｂ地区（図５・６）：ｃ－ｃ’以南の桝部分は縄文時代後期の基盤層である12層まで、それ以北の管路部分は10層（黒色土）上面まで慎重に掘削した。この時点で断面を精査したところ、12層から切り込む落ち込みのラインを認めた。そこで精査を続けたところ、大規模な土坑であることが推測された。しかし、管の埋設では、これ以上の掘削を必要としないため、数本のトレンチを入れて、断面で土坑の形状や規模、構造を確認することとし、大部分を残す方針で調査を進めた。

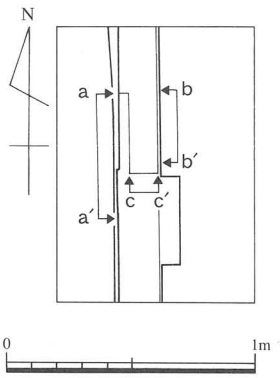


図５　Ｂ地区遺構断面位置
（縮尺１/300）

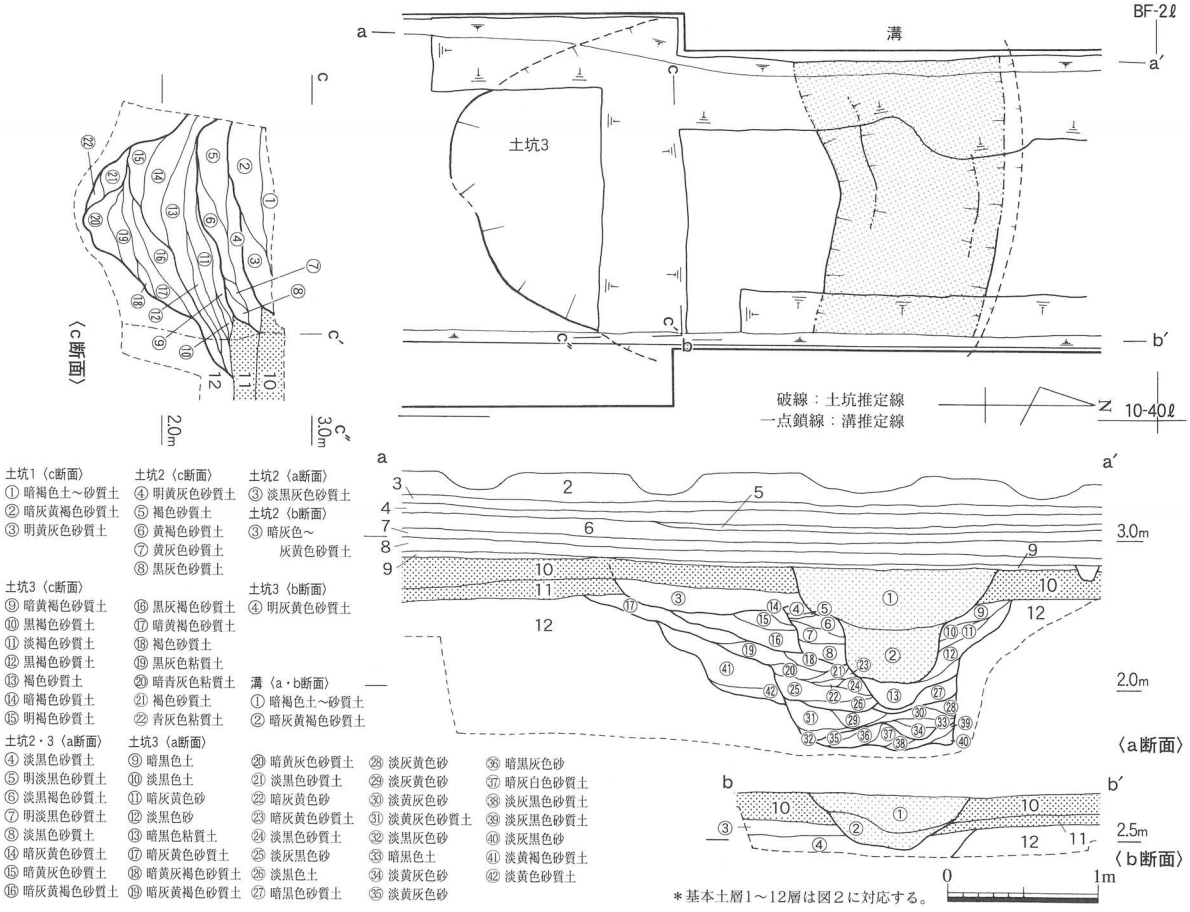


図６　Ｂ地区遺構平・断面（縮尺１/50）

土坑の平面形は、今回の調査区では幅が狭く、全体を明らかにすることはできなかったが、検出できた部分と断面を合わせて考えると、土坑３に関しては長軸長約3.8m の長楕円形を呈すると推測される。また、断面形は、ａ断面をみると、北側は垂直に立ち上がること、南側の立ち上がりは緩いことが指摘できる。埋土は北、東側では黄褐色砂質土と黒色土が互層状に堆積するが、南、西側では黄褐色砂質土が主体的である。本土坑から遺物の出土はなかったが、土坑の掘削開始面が縄文時代後期の基盤層である12層にあり、縄文時代後期の所産とみられる。

また、上下２層に細分される黒色土のうち、下位の11層上面からも掘削がなされている土坑２や、ｃ断面では10層から掘削が開始される可能性もある土坑１もあり、縄文時代後期以降、長期にわたって掘削が継続されてきたことが考えられよう。土坑３についてはａ断面でも数回の掘削が認められ、このことも長期の掘削を推測することと矛盾しない。

本土坑の埋没後、東西方向に走行する幅約1.1m の溝が10層上面から掘削されている。遺物は出土していないが、掘削面と黒色土が埋土の主体をなすことから、弥生時代前期の溝と考えられる。この溝についても、これ以上の掘削は行わずに保存措置をとっている。

ｂ．まとめ

本調査区は全体的に起伏が少なく、安定した微高地を呈していることが判明した。また、調査区全体で確認できた黒色土より上位の部分では、Ａ・Ｂ地区の遺構密度はやや密な状態であることが確認されたが、それ以外は総じて希薄であった。ただし、縄文時代後期の基盤層である12層まで掘削が達したのは桝部分と南側の管路の一部であり、縄文時代後期の遺構密度については確認できていない部分が多い。

縄文時代後期の土坑は、長期にわたって掘削が継続されたものであると考えられるが、その機能や性格については不明な点が多く、今後の検討が必要である。　（野崎貴博）

註（１）栄一郎1987「屋内運動場新営に伴う発掘調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報４』岡山大学埋蔵文化財調査室　pp.12 - 15

(2)　No. 4 区間（津島北ＡＺ16区）

調査地点は津島北地区の西南端に位置する（図７）。桝部分において、1.3m 四方の範囲で、地面から約２m、標高2.05m の深さまで重機による掘削がなされ、12層上面から掘り込まれた東西方向に伸びる溝を検出した。

①　層序（図８）

確認した各層の帰属時期は、津島地区の土層の堆積状況に照らし合わせると以下のようになる。１層は、明治時代の造成土、２層は暗青灰色砂質土で明治時代の耕作土である。３・４層は黄褐色砂質土、５・６層は淡黄褐色砂質土で、近世層と考えられる。７・８は灰黄白色粘質土、９は暗黄灰色粘質土で中世層と考えられる。10層は暗灰色粘質土で、古代～古墳時代頃の土層、11層は暗黄褐色粘質土、12層は暗黄灰色粘質土で、弥生時代中期～後期の土層と考えられる。13層は黒褐色砂質土で、津島地区の鍵層である「黒色土」（弥生時代早期～前期）に相当する。14層は黄褐色砂質土で、縄文時代後期の基

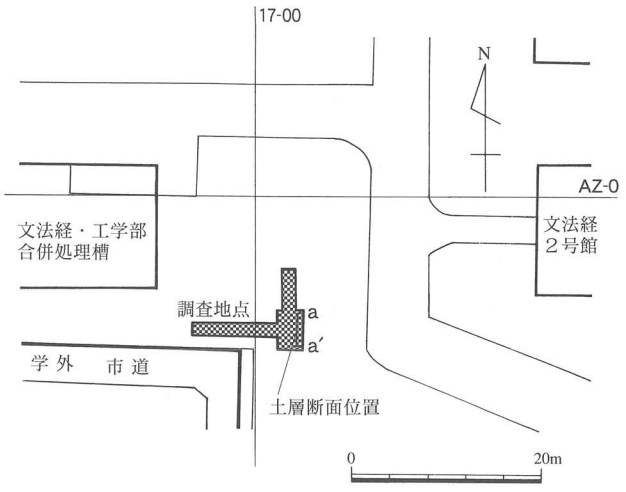
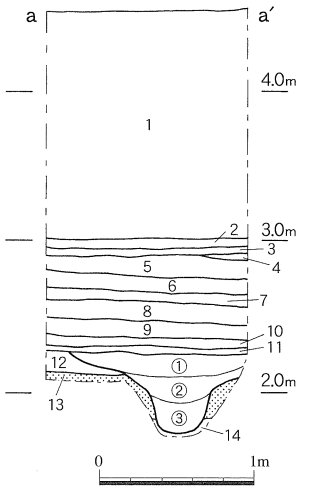


図７　No. 4 区間調査位置・土層断面位置（縮尺１/800）

盤層である。

②　遺構（図８）

12層上面で検出した溝は、上面で標高2.25m、底面で標高1.725m に位置し、東西方向にのびる。幅は上端が現状で1.2m、底面が0.25m を測る。溝の断面形は、中央部分がU字形にくぼんで深くなり、それより上は両側に緩やかに開く形となる。溝の埋土は、３つに分層される。そのうち、上２層の埋土は色調や含有するブロックの内容において比較的類似している。断面の形状と併せて考えると、埋土第１・２層と第３層とでは、掘削あるいは堆積の時期や要因が異なることが考えられる。溝から遺物は出土していないが、層位関係から弥生時代中期～後期頃の遺構であると考えられる。　（光本）



1. 造成土　12. 暗黄灰色粘質土
2. 暗青灰色砂質土　13. 黒褐色砂質土
3･4.黄褐色砂質土　14. 黄褐色砂質土
5･6.淡黄褐色砂質土
7･8.灰黄白色粘質土　〈溝〉
9. 暗黄灰色粘質土　① 暗黄褐色砂質土
10. 暗灰色粘質土　② 淡黄褐色砂質土
11. 暗黄褐色粘質土　③ 暗灰色砂質土

図８　No. 4 区間　桝東壁土層断面（縮尺１/50）

(3)　No. 6 区間（津島南ＢＧ22区）

本調査地点は、津島南地区の西端付近に位置する（図９）。

①　層序（図10）

桝部分で標高1.95m、管路において標高2.4m まで重機による掘削がなされた。深度の深かった桝部分では「黒色土」が認められず、縄文時代の基盤層に相当する黄褐色砂質土（６層）を標高2.15m 付近で確認した。したがって、旧地形としては微高地をなしていたものと考えられる。

２層は、津島地区における近代層に相当し、３つの層に細分される。桝部分の西壁においては図示した東壁よりも２層が20cm ほど高く堆積しており、東壁と西壁の間で段が形成されていたことが推定される。３・４層は近世～中世の土層と考えられる。５層は須恵器小片や鉄滓が出土し、古代から古墳時代後期に相当する層と考えられる。

②　遺構（図10）

桝周辺において遺構を確認することができた。近代の畦畔状遺構、弥生時代終末から古墳時代初頭のピット等を検出した。

畦畔状遺構は、２ａ層の堆積後に形成される。東西にのびると考えられ、現状で南北幅3.5m を測る。畦畔状遺構の北端は段状に掘削されている。一方、南端は、桝より南側の管路部分で矢板を使用した掘

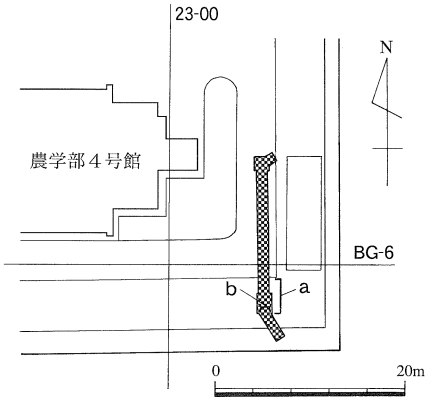
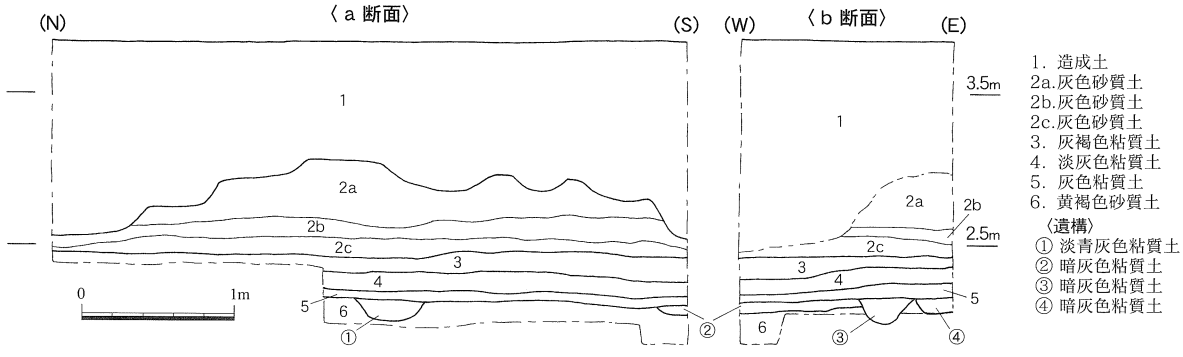


図９　No. 6 区間　調査区・土層断面位置（縮尺１/800）



1. 造成土
2a.灰色砂質土
2b.灰色砂質土
2c.灰色砂質土
3. 灰褐色粘質土
4. 淡灰色粘質土
5. 灰色粘質土
6. 黄褐色砂質土
〈遺構〉
① 淡青灰色粘質土
② 暗灰色粘質土
③ 暗灰色粘質土
④ 暗灰色粘質土

図10　No. 6 区間　土層断面（縮尺１/50）

削がなされたため明確でない。明治期の地図によると、「Ｌ」字状に東と北へのびる道が本調査地点に相当する場所に存在しているため、畦畔状遺構はこうした道と何らかのかかわりがあるものと推測される。

桝部分の東壁断面では、須恵器を含む遺構（土層番号①）を確認した。この遺構は、それと対応すると思われる遺構が反対の西壁に認められるため、溝である可能性が高い。遺構から出土した須恵器が小片であるため、詳細な時期は不明であるが、古墳時代後期～古代とみてよいであろう。

桝部分の東壁端から南壁にかけては、６層上面に遺構埋土と考えられる土器小片の混じる土層がみられる。この土層を切る形で、南壁に２基のピットが隣接して確認された。その内、北側のピットからは、弥生時代終末から古墳時代初頭ごろの高杯と甕片が出土した。

このように、津島岡大遺跡の西南端において旧地形の状況と弥生時代終末～古墳時代初頭をはじめとする遺構・遺物の存在が明らかとなった。（光本）

３．総合研究棟新営雨水排水敷設工事に伴う立会調査

（津島北ＡＸ～ＢＡ06区）

ａ．調査区の位置と調査の経過

本調査地点は2002年度に発掘調査を実施した津島岡大遺跡第28次調査地点（自然科学系総合研究棟）の南から東門に至る南北約120m の範囲である（図11）。周辺には西に近接して第５次調査地点（大学院自然科学研究科棟）がある。立会調査は2003年８月４日から９月２日までの期間で、工事の進行にあわせて随時実施した。

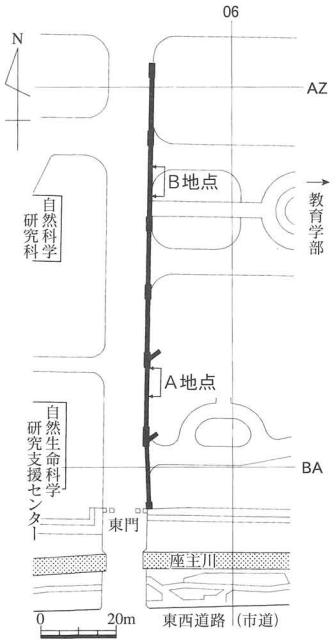


図11　調査区位置
（縮尺１/2000）

ｂ．調査の概要

①　層序（図12）

調査地点の雨水排水設備は北から南に排水するものであり、掘削深度は南から北に向かって減ずる。したがって調査地点の北半では、掘削は中世以前に遡る土層には至っていない。

各層の時期は、共伴遺物が少なく決めがたいが、周辺の調査成果を参考に推定しておきたい[(1)]。

１層は1907年（明治40年）の陸軍屯営地造成以降の造成土である。２層は青灰～灰色砂質土で、明治時代の耕作土である。３層は黄褐～明黄橙色砂質土で、近世の耕作土である。４層は明灰～

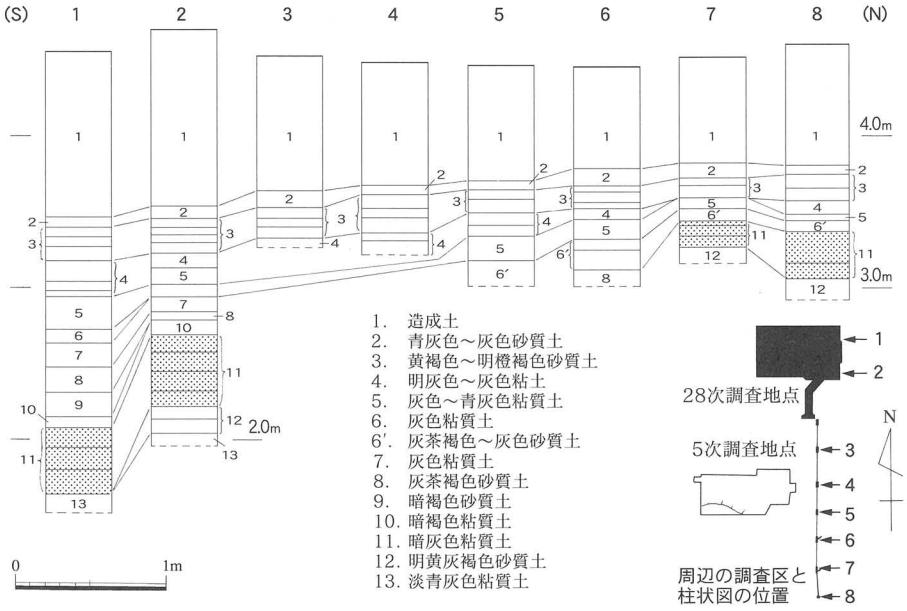


図12　土層断面柱状図（縮尺１/50）

灰色粘土で、中世の耕作土である。５層は灰～青灰色粘質土で、古代から中世までの耕作土と考えられる。６層は灰色粘質土、７層は灰色粘質土で、古墳時代の包含層と考えられる。８層は灰茶褐色砂質土で、弥生時代中期～後期の包含層と考えられる。９・10層は北に隣接する第28次調査地点で確認しているが、本調査範囲では確認できていない。第28次調査地点では、９層は暗褐色砂質土、10層は暗褐色粘質土で弥生時代前期に比定されている。11層は津島地区一帯に広がりをもつ、「黒色土」と呼称している暗褐色土である。上面が弥生時代前期にあたる。12層は明黄灰褐色砂質土で、縄文時代後期の基盤層である。第28次調査地点では12・13層に細分される。

②　地形

今回の調査地点と第28次調査地点の成果をあわせると、津島北地区の東半で南北約180mにわたってほぼ連続した土層の堆積状況を確認できたことになる。そこでこれまでの周辺の調査成果もあわせて地形復元をしたい。

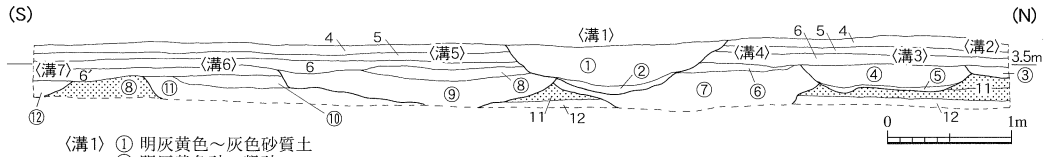
図12をみると、11、12層の標高が南北で大きく異なることに気づく。南側の柱状図７、８では、縄文時代後期の基盤層である12層上面の標高が約3.0～3.2m、上面が弥生時代前期に比定される11層では、上面の標高が約3.3～3.4mであるのに対し、北側の第28次調査地点において微高地と認識されている柱状図２の地点では12層上面の標高は約2.2m、11層上面の標高は約2.7mであり、0.7～１mの比高がある。これらの間にあたる範囲は、今回の調査範囲では掘削深度が小さく中世以前の状況については不明な点があるが、本調査地点の柱状図３～５間の西に近接する第５次発掘調査地点の調査成果[2]を参考にすると、この範囲には縄文時代後期～弥生時代前・中期までの東西方向の河道が通ると推測される。このことから、縄文時代後期～弥生時代前期までは河道を挟んで南北に標高差のある微高地が形成されていたことがうかがえる。弥生時代以降、この旧地形は反映されながらも、全体的には平坦化が進んでいく。

③　遺構

本調査地点ではＡ地点の範囲で弥生時代から古代・中世までの東西方向の多数の溝群、Ｂ地点範囲で近世～近代の溝と畦畔を確認した。

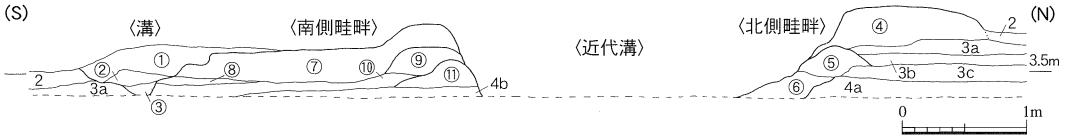
Ａ地点（図13）：弥生時代から古代・中世の東西方向の溝群である。多数の溝が約10mの範囲に切りあいながら掘削されている。本地点より西へ約150mの地点に位置する第19次発掘調査地点においても同時期の東西方向の溝が多数切り合って検出されており[3]、本調査地点の溝群と連接するものと考えられる。

Ｂ地点（図14）：近世～近代の東西方向の溝と畦畔を確認した。幅は畦畔が約1.2m、溝が約３mである。現在、大学構内を東西に貫流する座主川は条里の区画を反映していると考えられるが、この溝と座主川との心々間



〈溝1〉① 明灰黄色～灰色砂質土
② 明灰黄色砂～粗砂
〈溝2〉③ 灰色粘質土
：黒色土ブロック含む。
〈溝3〉④ 灰黄色～灰色砂質土
⑤ 灰黄色～灰色粗砂
〈溝4〉⑥ 明灰白色粘質土
⑦ 灰色砂～粗砂
〈溝5〉⑧ 明灰白色砂
⑨ 灰白色砂～粗砂
〈溝6〉⑩ 明灰茶褐色砂
⑪ 灰褐色～暗灰褐色砂
〈溝7〉⑫ 灰茶褐色砂
＊基本土層は図12の6・7断面の土層に対応する。

図13　Ａ地点　溝群土層断面（縮尺１/60）



〈溝〉① 灰橙色砂質土
：底面に鉄分沈着
② 暗青灰色粘質土
③ 淡緑灰色粘土
〈北側畦畔〉④ 緑色～明緑灰色砂質土
⑤ 明茶褐色砂質土
⑥ 灰～暗灰色砂
〈南側畦畔〉⑦ 暗灰色砂質土
⑧ 暗緑灰色砂質土
⑨ 暗緑灰色砂質土
⑩ 明緑灰色土
⑪ 黄橙褐色土
＊基本土層は図12の3・4断面の土層に対応する。

図14　Ｂ地点　遺構群土層断面（縮尺１/60）

の距離は約105mとなっており、今回検出した溝と畦畔は近世段階の条里の区画を反映した遺構の一部である可能性が高い。

c．まとめ

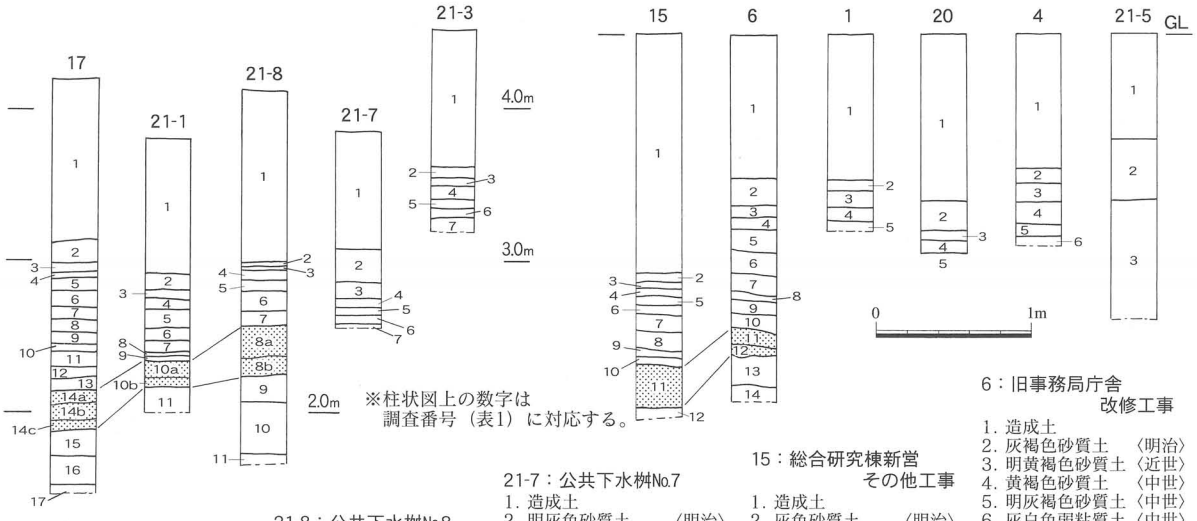
本調査地点では、南北約120mにわたって土層を観察できたことにより、地形復元のためのデータを得ることができた。また、近世段階の条里の区画を反映している遺構を確認できたが、このようなデータは立会調査でも得られるため、今後も丹念にデータを積み上げ、確度の高い条里地割を復元していく必要がある。　（野崎）

註（１）ここでは第28次調査地点の成果を参考にした。
忽那敬三2004「津島岡大遺跡第28次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2002』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　pp.4－6
（２）阿部芳郎編1994『津島岡大遺跡４』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第７冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
（３）野崎貴博編2003『津島岡大遺跡12』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第17冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

４．その他の立会調査

個別に取り上げなかった調査地点のうち、中世層以下の土層まで掘削が及んだ地点の土層堆積状況は図15となる。その中で、「黒色土」及び縄文時代の土層を確認した地点は、No.21－１、21－８、15、６地点である。

総合研究棟新営に伴う排水工事（No.15）では、地面から約2.5mの深さまで掘削がなされた。この地点で



17：旧事務局庁舎改修工事
1. 造成土
2. 青灰色砂質土　〈明治〉
3. 黄灰褐色砂質土　〈近世〉
4. 灰黄褐色砂質土　〈近世〉
5･6. 灰褐色砂　〈中世〉
7～11. 灰褐色粘質土〈古代～〉
12. 暗褐色粘質土　〈古墳後期〉
13. 暗黄褐色粘質土　〈弥生〉
14a･b. 黒褐色粘質土
〈弥生早～前期〉
14c. 淡黒褐色粘質土
15. 淡黄灰色砂質土
16･17. 暗青灰色砂質土

21-1：公共下水桝No.1
1. 造成土
2. 青灰色砂質土〈明治〉
3. 黄褐色砂質土〈近世〉
4～7. 暗灰褐色砂質土
〈中世～近世〉
8. 暗青灰色粘質土〈古代？〉
9. 黄褐色砂質土　〈弥生〉
10a. 黒褐色粘質土
10b. 暗黒褐色粘質土
11. 暗青灰色砂

21-8：公共下水桝No.8
1. 造成土
2. 明灰色砂質土　〈明治〉
3. 灰黄褐色砂質土〈近世〉
4. 淡灰黄色砂質土〈近世〉
5. 明灰白色粘土　〈中世〉
6. 灰白色粘土　〈中世？〉
7. 暗灰褐色粘土
〈古代～古墳〉
8a. 暗褐色砂質土
8b. 淡灰褐色砂質土
9. 淡灰白色砂質土
10. 明黄褐色砂質土
11. 灰茶褐色砂質土

21-7：公共下水桝No.7
1. 造成土
2. 明灰色砂質土　〈明治〉
3. 灰黄褐色砂質土　〈近世〉
4. 明灰褐色砂質土　〈近世〉
5. 明灰黄褐色砂質土〈近世〉
6. 明灰色弱粘質土　〈中世〉
7. 灰茶褐色砂質土〈中世？〉

21-3：公共下水桝No.3
1. 造成土
2. 灰色砂質土　〈明治〉
3. 明黄灰色砂質土　〈近世〉
4. 灰黄茶褐色砂質土　〈近世〉
5. 灰黄褐色弱粘質土〈中世？〉
6. 明灰褐色弱粘質土〈中世？〉
7. 灰褐色粘質土　〈中世〉

21-5：公共下水桝No.5
1. 造成土
2. 灰黄色砂質土　〈明治〉
3. 砂・砂利混青灰色粘土
〈溝埋土〉

15：総合研究棟新営
その他工事
1. 造成土
2. 灰色砂質土　〈明治〉
3. 灰黄褐色砂質土〈近世〉
4. 灰黄褐色砂質土〈近世〉
5. 明灰褐色砂質土〈近世〉
6. 灰褐色弱粘質土〈中世〉
7. 灰色粘土　〈中世〉
8. 暗灰色粘土　〈古代？〉
9. 暗灰褐色粘土
〈古墳～弥生？〉
10. 暗黄褐色砂質土〈弥生〉
11. 暗褐色粘質土
〈弥生早～前期〉
12. 淡茶褐色砂質土

4：総合研究棟新営機械
設備工事
1. 造成土
2. 青灰色粘質土　〈明治〉
3. 黄灰色粘質土　〈近世〉
4. 黄灰褐色粘質土〈近世〉
5. 灰色粘質土　〈中世〉
6. 灰色粘土　〈古代？〉

6：旧事務局庁舎
改修工事
1. 造成土
2. 灰褐色砂質土　〈明治〉
3. 明黄褐色砂質土〈近世〉
4. 黄褐色砂質土　〈中世〉
5. 明灰褐色砂質土〈中世〉
6. 灰白色弱粘質土〈中世〉
7･8. 灰色粘質土　〈中世〉
9. 暗灰色粘質土〈中世？〉
10. 暗灰色粘土　〈弥生？〉
11. 黒褐色土
12. 暗灰色弱粘質土
13. 明黄褐色砂質土
14. 明淡黄色砂質土

11：創立50周年記念館
新築に伴う掘削
1. 造成土
2・3. 明褐色砂質土〈近世〉
4. 明褐色粗砂　〈近世〉
5. 明褐色粘質土　〈中世〉

20：旧事務局棟周辺工事
1. 造成土
2. 灰色砂質土　〈明治〉
3･4. 黄褐色砂質土〈近世〉
5. 黄褐色粘質土　〈中世〉

図15　津島地区における立会調査地点土層柱状図（縮尺１/50）

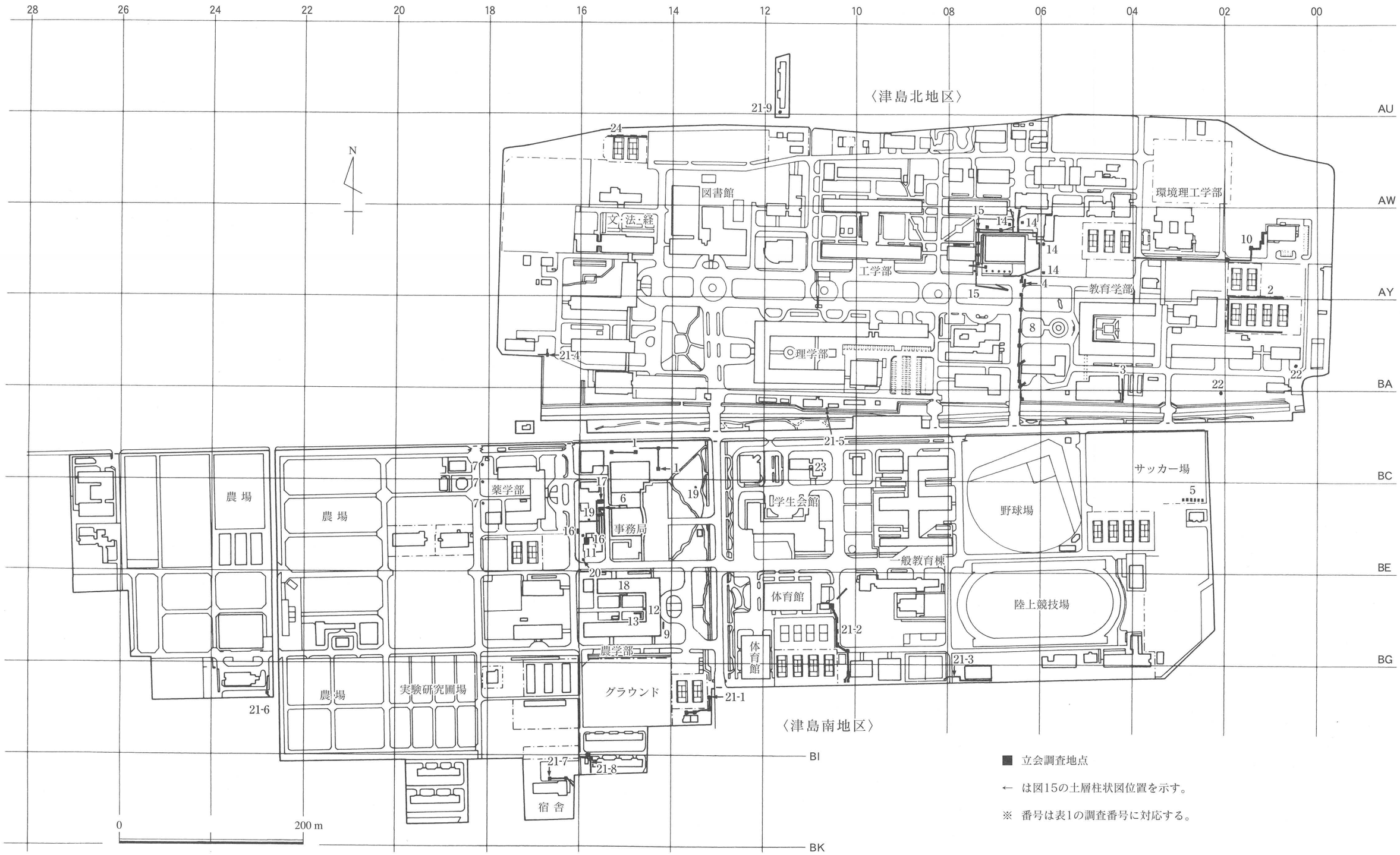
は、弥生時代中期～後期頃に相当する土層から掘り込まれた溝（北東～南西方向）の一部が検出された。

公共下水桝接続工事No.５区間（No.21－５）では、近代層である２層の下に、砂・砂利混じりの粘質土である３層が、現状で80cmにわたって掘り底まで堆積していた。この土層は、東西方向にのびる近世段階の溝の埋土であると考えられる。本調査地点は現在の座主川の北に隣接しているが、座主川と同様の位置関係であった津島岡大遺跡第25次調査では、中世から近世に至る東西方向の溝が確認されている(1)。したがってこの溝は、近世段階の座主川の埋土である可能性が高いものと考えられる。（光本）

註（１）野崎貴博2001「津島岡大遺跡第23・24・25次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報18』pp.８－18　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

表１　2003年度津島地区調査一覧

番号	種類	調査地区	構内座標	所属	調査名称	調査期間	掘削深度（GL-m）	備考
1	立会	津島北	BB13～15	事	創立五十周年記念館新築に伴う掘削（雨水排水桝・管埋設工事）	4.7・10・17 5.9	1.3	中世層まで掘削
2	立会	津島北	AY01	事	学務部テニスコート側溝設置工事	4.1	0.25	造成土内
3	立会	津島北	AZ04	教育	教育学部講義棟身障者便所取設工事（排水管埋設）	4.23	1.1	近世層まで
4	立会	津島北	AX06	工	総合研究棟新営機械設備工事（ガス配管埋設工事）	5.2・９・16	1.4	古代層？まで掘削
5	立会	津島南	BC02	事	サッカー場練習板設置に伴う掘削	5.13	0.85	造成土内
6	立会	津島南	BC15	事	旧事務局庁舎改修電気設備工事	6.25～27 7.9・10	2.43	GL－1.9m黒色土、GL－2.1mで縄文基盤層確認
7	立会	津島南	BB・BC18	農	農学部総合研究棟改修電気設備工事（仮設電力・電話引き込み建柱工事）	7.28	1.7	径0.5m、GL－1.2m前後で黒色土層、GL－1.5～1.6m前後で縄文後期基盤層確認
8	立会	津島北	AX06～BA06	工	総合研究棟新営その他工事（雨水排水）	8.4～9.2	1.7	標高3.3～3.4mで黒色土、弥生～古代の東西溝多数、近世・近代の東西溝・畦畔確認
9	立会	津島南	BF14	農	農学部鉄骨補強架構工事	8.20	0.3	造成土内
10	立会	津島北	AW01、AX01～03	工	総合研究棟新営機械設備工事　給水（井戸水）配管埋設	8.21・22・28・29	1.2	近世層確認
11	立会	津島南	BD15	事	旧事務局庁舎改修その他工事（EVピットほか）	8.21	0.8	造成土内
12	立会	津島南	BE14	農	農学部総合研究棟改修機械設備工事（既設配水管撤去・新設配水管埋設）	9.22	0.5	造成土内
13	立会	津島南	BC・BD15	農	農学部総合研究棟改修機械設備工事（ガス配管埋設）	9.24	0.9	造成土内
14	立会	津島北	AW・AX06・07	工	総合研究棟新営電気設備工事（外灯）	9.30 11.14・18・27	1.4	中世層まで掘削
15	立会	津島北	AW・AX06・07	工	総合研究棟新営その他工事（排水）	10.1～11.6	0.5～2.5	桝で縄文基盤層まで掘削した箇所あり、弥生溝確認
16	立会	津島南	BE14	事	旧事務局庁舎改修その他工事（雨水排水埋設）	10.7・８	1.4	明治層まで掘削
17	立会	津島南	BC・BD15	事	旧事務局庁舎改修機械設備工事（外部給水・消火配管）	10.14・17・19 11.7	0.8～2.75	管路は造成土内、桝で縄文基盤層確認
18	立会	津島南	BE14・15	農	農学部総合研究棟改修機械設備工事（ガス配管埋設工事）	10.29	1.17	造成土内
19	立会	津島南	BC・BD15・16	事	旧事務局庁舎改修電気設備工事（ハンドホール埋設、ボックスカルバート、外灯設置）	10.31	1.4	ボックスカルバート、外灯地点は近世層まで掘削
20	立会	津島南	BD15	事	旧事務局棟周辺外灯設置工事	11.12	1.45	中世層まで掘削
21－1	立会	津島南	BG・BH13	事	公共下水桝接続工事No.１区間　農学部合併処理槽	12.22～04.2.27	1.8	縄文基盤層まで掘削
21－2	立会	津島南	BE～BG10		No.２区間　体育館東～武道場西		1.95～2.25	桝で縄文基盤層、管路で弥生早・前期まで掘削、弥生溝・縄文土坑確認
21－3	立会	津島南	BG07・08		No.３区間　学生BOX西		1.4	中世層まで掘削
21－4	立会	津島北	AZ16		No.４区間　文・法・経２号館西		2.45	縄文基盤層まで掘削、弥生溝確認
21－5	立会	津島北	BA10		No.５区間　理学部		1.9	中世頃の座主川を確認
21－6	立会	津島南	BG22		No.６区間　農学部４号館東		1.5～1.9	縄文基盤層まで掘削、弥生～古墳初頭ピット、近代畦畔状遺構確認
21－7	立会	津島南	BI16		No.７区間　津島宿泊所		1.15～1.3	中世層まで掘削
21－8	立会	津島南	BI15		No.８区間　南宿舎		2.0～2.45	縄文基盤層まで掘削
21－9	立会	津島北	AT11		No.９区間　職員宿舎		1.2	近世層まで掘削
22	立会	津島北	AZ00 BA02	教育	教育学部美術工芸及養護教諭棟四阿設置工事	04.1.13	0.5	造成土内
23	立会	津島南	BB10	保	保健管理センター増築その他工事	04.2.18	0.6	既説埋土
24	立会	津島北	AU14・15	文法経	文・法・経テニスコートフェンス新設工事	04.2.27	0.9	造成土内



■ 立会調査地点

← は図15の土層柱状図位置を示す。

※ 番号は表1の調査番号に対応する。

図16　2003年度の調査地点【１】ー津島地区（縮尺１/4000）

第２節　津島岡大遺跡の研究

１．縄文時代後期の集落構造とその推移

山本　悦世

津島岡大遺跡は、東西1.4km、南北0.8kmに広がる岡山大学津島キャンパスの敷地のなかに、これまでに大小あわせて29ヶ所におよぶ発掘調査が実施され、確認調査あるいは工事に際した立会調査の成果も含めると、遺跡全体の状況をある程度理解できる段階に至っている。また、同遺跡の南側では約1.5kmの距離に位置する津島遺跡や周辺遺跡、北側に隣接する朝寝鼻貝塚などの調査成果も報告されており、津島岡大遺跡の範囲内にとどまらず、岡山平野西岸域の状況を広く読み取ることができる。

ここでは、同遺跡の全体像を整理することによって、縄文時代後期における集落構造の一端を明らかにしたい。

(1)　津島岡大遺跡における集落の実態

津島岡大遺跡の内容は、これまでに計14冊の発掘調査報告書あるいは年報・紀要において報告されている(1)。報告にあたっては、縄文時代後期の集落構造と生業との関係を念頭においた論考(2)のほか、居住域での石器出土状況(3)や炉の問題(4)から具体的な利用内容の解明が試みられてきた。

ここでは、遺構・遺物のあり方から各調査地点を類型化し、地形と空間利用の関係を模式的に捉えることで、最も資料が豊富な後期前葉における集落構造の特徴を描き出し、その後の推移も合わせて考えることとする。

ａ．縄文時代後期における地形復元

津島岡大遺跡は、岡山平野中央部を南流する旭川西岸に位置する。遺跡の北側には半田山丘陵が迫り、南側に張り出す尾根から北側に大きく入り込む谷部の前面に、丘陵裾から平野部にかけての立地が認められる（図17）

遺跡内には、東側に位置する旭川からの水流が半田山丘陵下端を巡って遺跡内に流れ込み、中心的な河道を形成するほか、背後の谷部からの流路が遺跡の北側周辺における谷地形形成に影響していることは、現状の地形や水路からも容易に理解できる（図17・18）。特に注目されるのは、遺跡の中央部を走る河道Ａである（図18）。同河道は、第３・15次調査、第５次調査、第23次調査の３地点における調査から、微高地との比高差や規模、あるいは急峻な斜面形成や埋土から予想される水量の多さなどの点で、他の低地部とは明らかに異なる状況が共通しており、遺跡のほぼ中央を北東から南西に向けて蛇行しながら走る中心的な河道と評価される。その他に、北東から南西方向に並ぶ各地点（第19次調査、第10次調査、第14次調査、第26次調査）において、砂礫などの基盤層の高まりが連続的に認められることから、河道Ａの南側に第26次調査地点に続く河道Ｂの存在が予想される。一方、遺跡の北側部分には、比高差が小

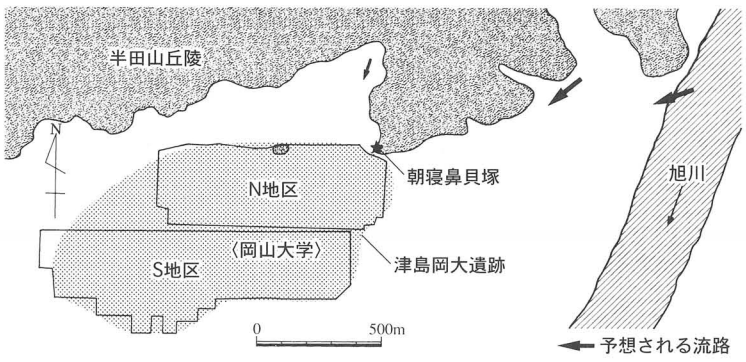


図17　津島岡大遺跡の位置と周辺環境

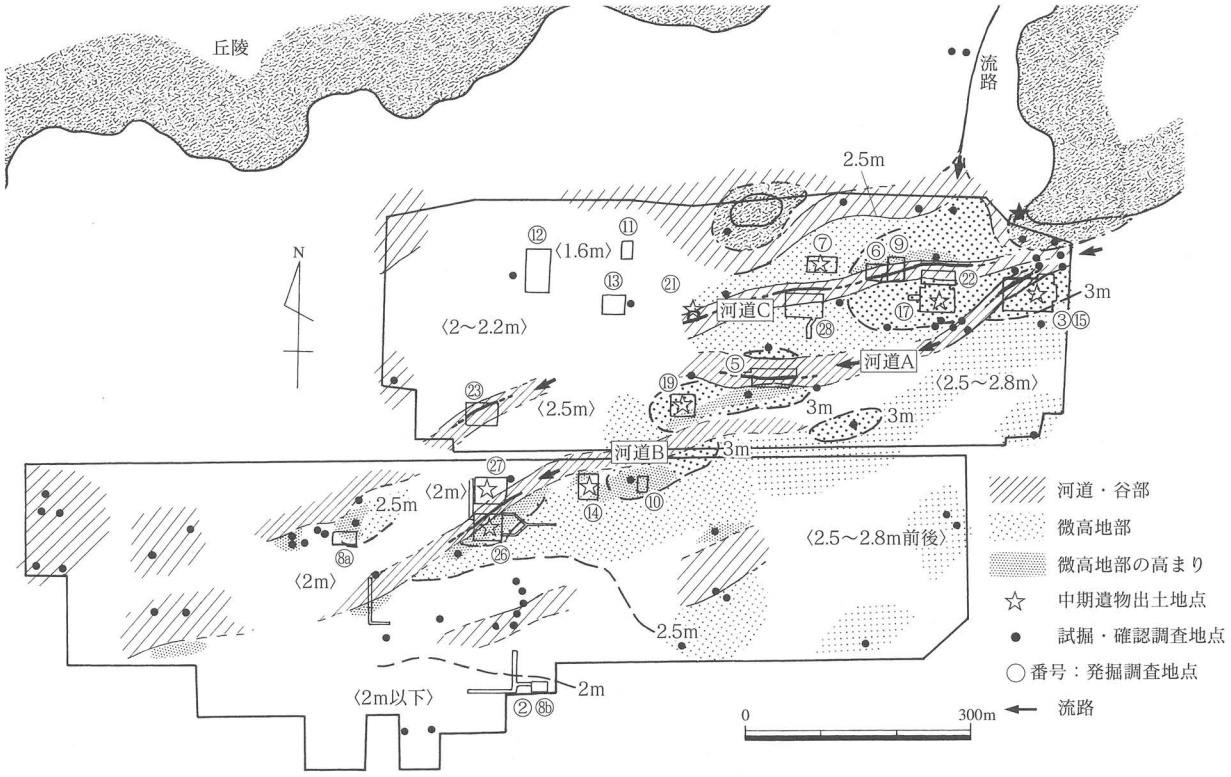


図18　津島岡大遺跡における地形復元と調査地点

さく緩やかな起伏に富み、流路部があまり明確ではない谷地形状の河道Ｃ（図18）が広がり、蛇行しつつ第13次・12次調査区を経て遺跡の背後にあたる北西部に続く可能性を有する。

縄文時代に対応する土層面の標高値を確認すると、遺跡北東端に位置する尾根付近が最も高く、標高３ｍ以上を示す。同数値を示す地点は、河道Ａあるいは河道Ｂの縁辺に限定される傾向が強い。各調査地点の位置関係からまとまりを考えると、第３・15・17・22・６・９次調査地点、第５・19次調査地点、第10次調査地点の３カ所に高位部があげられる。それぞれの周縁には標高2.8～2.5m（第７次調査）、さらにその外側には同２ｍ前後の範囲が確認される。このレベルまで下がるのは遺跡の北西域あるいは南西域である。全体としては北東から南西への傾斜を示すが、細部にわたる地形形成に北東端の尾根の存在や河道Ａ・Ｂの影響が関わっていることが予想される。

大小の河川が網の目状に走り、その中に微高地が点在する状況というよりは、中心的な河道とその周辺に形成された自然堤防状の高まりを核とした微高地の存在が特徴的である。また、微高地は、北側の丘陵に近い部分では、その範囲は広く安定的であり、南側に向けて、その広がりは狭小で点在的となる様子が見え隠れする。

こうした地形は、縄文時代中期後半には、ある程度出現していたことが、僅少ではあるが各地点で出土する中期土器の存在から予想される。その後、谷部は後期段階に埋没し比高差を減少するが、弥生時代前期まで大きな変化を認めることはできない。

ｂ．集落構造の復元

津島岡大遺跡における発掘調査地点の内容（表２）をもとに、各地点の類型化を行って全体像を考えよう。

ｉ）類型化の基準

類型化するにあたっては、遺構の分布と遺物の出土状況に注目して基準を設定した（表３～５）。

表２　津島岡大遺跡調査概要一覧

＊：発掘調査報告書未刊

調査次	面積(㎡)	時期 後期 前葉	時期 後期 中葉	時期 弥生早期	地形 微高地	地形 微高地－谷部	地形 ◎河道部 ○谷部	微高地部 住居状遺構	微高地部 土坑・ピット	微高地部 溝	微高地部 その他	微高地部 炉	微高地部 火処	微高地部 焼土・炭集中土坑・ピット	谷部・河道部 貯蔵穴	谷部・河道部 土坑・ピット	谷部・河道部 焼土土坑	谷部・河道部 その他	遺物
3・15	2600	○	△		○	△	◎	1	1・557		サヌカイト集石1		5	1・6	17	0・1			◎
				○	○	○	◎								11	0・10			◎
17＊	1451	○	△		○			1	7(大)・約900	数条				7・0					◎
22＊	774	○			○	○			1・10数基										○
				△	○	○										1			△
6・9	1250	○			◎～○	○	○		0・7	1				1・0	23	3・8	1		◎
28＊	1798	○			○	○			3・140										△
21	30	○				?												溝?	○
11	640	○			○				4・26			1	1						V
13	816	○			○				0・88				2						V
12	1472	○?			○				20・8				4						V
23＊	1339	○			◎～○	○	◎											杭列	△
				△	◎～○	○	◎								数基				△
27		○			○	○			3・13			3	2						△
26＊	1550	○			◎～○	○	○～◎		7・0	1?		3	2						△
				△	◎～○	○	○		9(大)・0						4				V
8a	650	○							4・8					6・0					V
14	856	○			◎～○				1・0										V
5	1537		○		◎～○		◎								7				◎
				△	◎～○		◎								3				V
19	1019	◎	◎		◎～○				4・155	2?		2		2・2					△
7	800		○		○				0・642			2		0・13					V
2･8b	681			○	○														○

表３　遺構分布状況からの類型基準

類型	基準
A	微高地上に多数の遺構（ピットでは数100基）がある。 遺構の種類が複数である（加熱遺構が含まれる場合もあり）。
	①明確な住居あるいは大形遺構が含まれる。 ②大形遺構は明確ではなく数は少ない。
B	低湿地型の貯蔵穴が存在する。
	①群集する（10基前後以上） ②数基（５基以下）のみ。
C	加熱遺構が主体で、特徴をなす。
	①炉が確認される。 ②焼土・炭化物などの集中があり、加熱痕跡を残す。
D	加熱遺構は無いが、微高地上にピット・土坑が多少認められる。
E	明確な遺構は認められない。
F	特殊な遺構が認められる。

表４　遺物(土器)出土状況からの類型基準

類型	遺物量（１箱＝約28ℓ） 表２－記号	基準
Ⅰ	◎	10箱以上。集中的出土。
Ⅱ	○	２～９箱。比較的集中的に出土。
Ⅲ	△	0.5～１箱程度。分散的に出土。
Ⅳ	V	0.4箱以下。分散的に出土。

遺物の集中的な出土域	
a	微高地部
b	河道・谷部

表５　各調査地点の類型表

調査次	縄文時代後期 後期前葉	縄文時代後期 後期中葉	弥生時代早期	縄文後期面標高(m)
3・15	B①Ⅰb・A②Ⅲa	－	B①Ⅰb	3m前後～1.3m
17＊	A①Ⅰa	－	－	3m＋
22＊	EⅡb	－	EⅢb	3～2.8m
6・9	B①Ⅰb・A②Ⅳa	－	－	3m前後～1.4m
21	EⅢb	－	－	2m前後
28＊	DⅢa－b	－	－	2.5～2.2m
11	C①Ⅳa	－	－	2～1.8m
13	C②Ⅳa	－	－	2.2m前後～1.7m
12	C②Ⅳa	－	－	2.2～1.6m
23＊	FⅢb	－	B②Ⅲb	2.5m前後～0.8m
27	C①Ⅲa	－	－	2.2～1.5m
26＊	C①Ⅲb	－	DⅣa・B②Ⅳb	2.6～1.6m
8a	C②Ⅳa	－	－	2.8～2.5m
14	DⅣa	－	－	2.5～2.4m
5	－	B①Ⅰb	B②Ⅲb	3～1m
19	（C①Ⅲa）	C①Ⅲa	－	3～2.3m
7	（C①Ⅳa）	C①Ⅳa	－	2.8～2.4m
2･8b	－	－	EⅡa	2m前後

〈遺構〉

A類：大形遺構を含み、遺構数も多く複合的な構成を示す。居住域の要素の強い類型である。

B類：低湿地型の貯蔵穴が検出される場合であり、貯蔵域としての評価が可能である。

C類：遺構の中で加熱関連遺構が特徴となる類型である。加熱活動域と評価される。

D類：小形の土坑やピットが多少検出されるが、活動の内容を積極的に示す遺構に乏しい類型である。

E類：明確な遺構は認められず、空間利用が極めて低調な状態を示す。

F類：他の地点には例がなく、利用状況を特徴付ける特殊な遺構が認められる場合を示す。

D・E類は利用頻度が低い地域を示し、両者の差は大きくはない。また、E類に関しては、各調査地点において、縄文土器あるいは突帯文土器の細～小片が数点出土

する状況にあるため、その空間利用を考える上では遺物が一定量出土している場合、つまり、Ⅰ～Ⅲ類に当てはまるもののみを対象とした。

〈遺物〉

出土量からⅠ類～Ⅳ類、出土位置によってａ・ｂ類にそれぞれ分類した。遺物量が多いと評価されるのはⅠ・Ⅱ類である。量の多さから考えて、利用場所との強い関係が予想される。Ⅲ・Ⅳ類は非常に少ない状態と言える。こうした遺物量に関しては、調査面積との関係が問題となることは当然であるが、ここでは、曖昧ではあるが、出土状況を加味することで各地点の傾向として示した。

ii）類型の相関関係からみた集落の特徴

前項で想定した類型の相関関係をみると、時期によってその状況に違いが認められる（表６）。

後期では、類型間の相関関係の強さと類型数の多さが特徴である。相関関係では、多量の遺物量を示すⅠ類はA①類・B①類と関係が強く、その他の類型は遺物量が少量～僅少のⅢ類あるいはⅣ類となり、遺構密度が高いほど遺物量は多いという明快な関係を示す。その中で、Ｅ類でありながら遺物量の多いⅡ類を示す第22次調査地点は、第17次調査地点に接する位置にあることが、遺物量の多さを生んでいる要因であると予想され、第17次調査地点の端部として同一の空間域に含まれると判断される。Ｂ類については、B①Ⅰｂ類に集約される点が注目される。また、全体に類型数の多い傾向の中で、Ⅰ類の数の少なさは際だつ。そこには居住域あるいは土器使用の作業空間の存在が明確な形で他と区分されていることが読みとれる。

以上の状況から、縄文時代後期では、遺構・遺物は広範囲に広がるのではなく、活動内容によってポイント的に集中するというシンプルで明確な空間利用形態の存在が指摘される。

弥生時代早期では、類型の減少と遺構・遺物の希薄化が特徴である。類型は、Ａ類・Ｃ類・Ｆ類が姿を消し、明確な遺構としてはＢ類のみと言っても過言ではない状況を呈する。さらに、Ｂ類は細分化を示し、B②Ⅲ・Ⅳ類の出現と地点の増加が注目される。ここにも、遺構・遺物の減少化傾向が強く表出されている。こうした状況から浮かび上がる集落には、居住域や加熱活動域の姿はなく、貯蔵域のみが点在することとなる。貯蔵域は、従来型のもの（第３・15次調査地点）に加え、遺物をほとんど共伴しない数基の貯蔵穴が分散的に点在する（第５次調査他３地点）という新たな動きを見せる。その他にはＥⅡ類の出現があげられる。遺構は確認できないで遺物のみが出土する状況で、具体的な利用上の評価は困難であるが、注意しなければならない。

iii）類型分布と空間利用の推移

各類型が遺跡内において、どのような位置に分布するかを平面的に確認し（図19・20）、集落内での空間利用状況から時期的な特徴を抽出した上で、時間的流れを見てみよう。

縄文時代後期前葉（図19）

居住域を表すＡ類・Ｂ類は遺跡の北東部に限定される（第３・15次調査、第17・22次調査、第６・９次調

表６　類型の相関関係

ａ．縄文時代後期

類	A①	A②	B①	B②	C①	C②	D	E	F
Ⅰ	１地点（17次）		３地点（3/15次、6/9次、5次）						
Ⅱ								１地点（22次）	
Ⅲ		１地点(3/15次)			1地点（27/26次）		１地点（28次）	１地点（21次）	１地点（23次）
Ⅳ		１地点？（６/９次）			２地点（11次、７次）	３地点（13次、12次、8ａ次）	１地点（14次）	○	

ｂ．弥生時代早期

類	A①	A②	B①	B②	C①	C②	D	E	F
Ⅰ			１地点（３/15次）						
Ⅱ								１地点（２/８ｂ次）	
Ⅲ				２地点（５次、23次）				１地点（22次）	
Ⅳ				１地点（26次）			１地点（26次）	○	

査)。そして、北東部に位置する丘陵裾部には朝寝鼻貝塚が広がる[5]（図19)。同地域は標高３ｍを超える最も安定した広がりが確保される場所であり（図18)、さらに、水量の豊富な河道Ａの北側に位置することから、比較的洪水等の被害も被り難い地域と判断される。そこには、居住域の選択基準を窺うことができる。

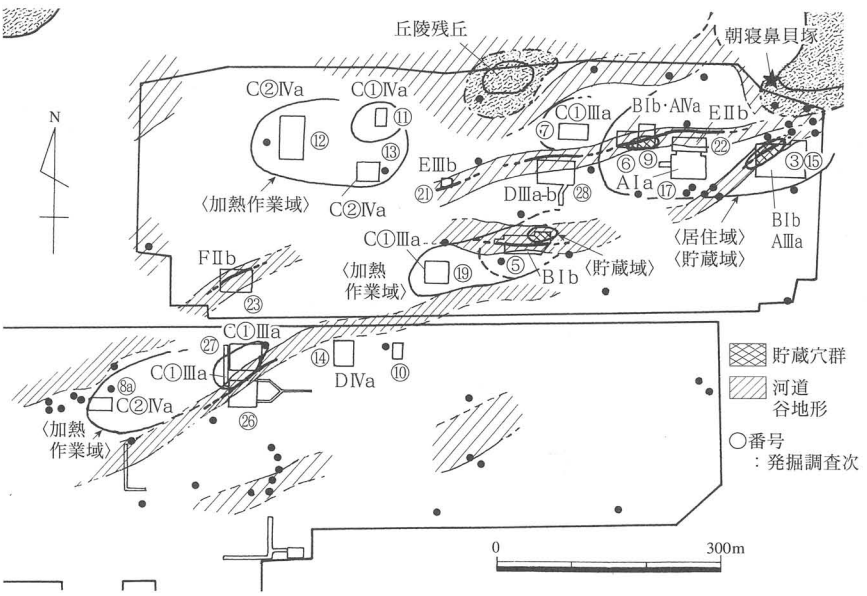


図19　各調査地点の類型化と空間利用１－縄文時代後期－

居住域（Ａ類）を詳しく分析すると、中心をなすＡ①Ⅰａ類は第17次調査地点というさらに狭い範囲に限定される。貯蔵域はＡ①Ⅰａ類を中心としＡ②Ⅲ・Ⅳ類が周囲を取り巻く居住域内の河道部（第３・15次、第６・９次調査）に形成されている。貯蔵穴は群集し多数の遺物を伴うことから、日常的に管理され盛んに利用される重要な遺構であったことが予想される。貯蔵穴の機能を考える上でも、居住域との位置関係や貯蔵穴数の問題、遺物との関連性などは注目されるところである。集落内で、まとまった量の遺物が出土する地点は極めて限定的であり、Ａ①類とＢ①類との結びつきが非常に強い傾向を示すことは前述したが、そうした状況から、遺物の利用あるいは廃棄が、それぞれの遺構と密接に関わった行為に伴って近辺で行われていたことは容易に想定できる。とすると、Ｂ①類の遺物は貯蔵穴の機能、つまり、堅果類の加工作業に伴った遺物である可能性は非常に高いと判断される。居住域周辺での管理、貯蔵域内での加工作業の実施が、本時期における貯蔵域にみる特徴である。

加熱活動域を示すＣ類の位置は、標高1.6～2.2m を測る。集落の北西部あるいは南西部に認められる。いずれも居住域よりはかなり低く、面積もさほど広くはない微高地が選地されている。炉を有する①類は３地点で確認されているが、確実に前葉とされるのは、集落端部に位置する第11次調査地点と第27次調査地点周辺である。この２地点では①類周辺に②類が認められており、少なくとも、北西部と南西側部の集落端部には、炉を中心とし一定の広がりを有する加熱活動域の存在が想定される。ここで問題となる活動内容である[4]が、遺物の出土状態から貯蔵穴とは全く異なる行為であることは言えても、残念ながらそれ以上の決め手には乏しい。現状では集落域の端部に位置する傾向が一つの手がかりになるかもしれないが、今後の検討課題である。

Ｄ類に関しては点在的な分布が認められる（第22次・28次・14次調査地点)。Ａ類域に近い位置ほど遺物量が多くなる傾向があることや遺構の希薄性から考えて、同類型地点で出土する遺物は周辺からの流れ込みであり、利用頻度は極めて低い地点であると判断される。このように、居住域近辺においても積極的に遺構を構築するような利用がなされない空間が、集落内の随所に点在する要因の一つには、安定しない地形があげられるかもしれない。

遺跡の南東域では、一定の面積が確保される調査が非常に少ない点は問題であるが、地形や確認調査に関する現状のデータからは全体に内容は希薄であった可能性が考えられる。

縄文時代後期中葉（図19）

B①Ⅰｂ類が第５次調査地点に、C①Ⅲａ類が第19調査地点に、C①Ⅳａ類が第７次調査地点に認められるが、前段階に比べると、同時期の遺構数は少なく分布範囲も狭い傾向が示される。ところで、C類とした第19次調査地点は第５次調査地点にごく近い位置にある。標高は同じく３ｍを測り、遺構数は他のC類と比較すると際だって数が多い。こうした状況は、第３・15次調査地点の状態に近いことから、河道部にあたる第５次調査地点および第19次調査地点を含めた範囲には居住域の可能性を考えることもできよう。こうした点から、後期前葉から中葉にかけて居住域の若干の移動は起きたかもしれないが、類型の相関関係にも変化はなく、基本的には同様の状態が継続していたと判断される。

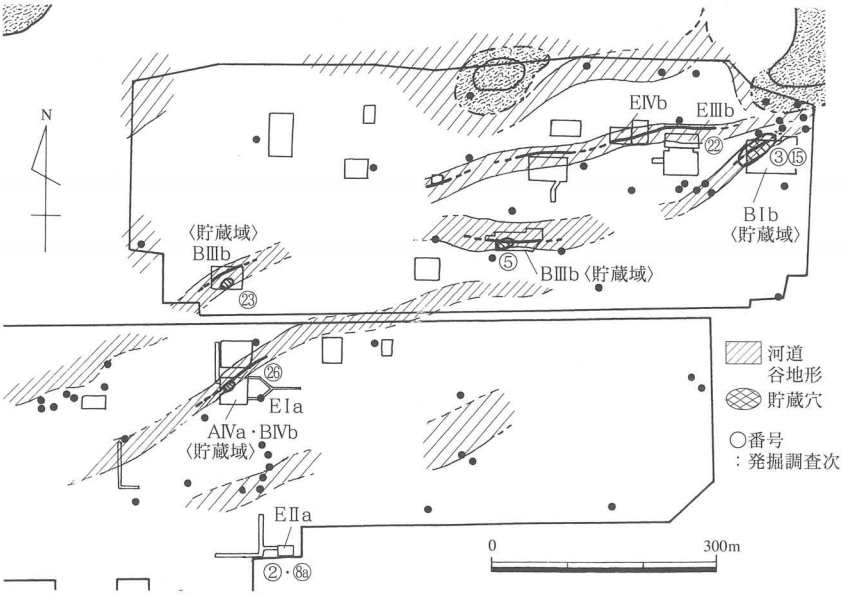


図20　各調査地点の類型化と空間利用２－弥生時代早期－

弥生時代早期

空間利用を示すのは貯蔵域Ｂ類のみである。それ以外は姿を消しており、複数の類型によって構成される縄文時代後期とは大きな違いを示す（図20）。利用場所についても、縄文時代後期における中心的居住域（第17次調査）は利用されていないのに対して、前段階まではほとんど痕跡を残していない遺跡南部にあたる第26次・２次・８ｂ次調査地点では出土遺物が多い（Ⅱ類）ことも大きく異なっている。さらに、貯蔵域に関しても、従来の地点に加えて、遺跡の南よりに新たな分布域を見せる点が注目される。それらは、貯蔵穴数が少ない②類あるいは遺物を伴わないⅢ・Ⅳ類であり、縄文時代後期のB①Ⅰｂ類とは明らかな違いを示す。

このように、貯蔵域が点在するのみで、土地利用の中心がやや南に移動するという本時期の集落構造には、縄文時代後期とは大きな変化を見ることができる。

ｃ．各時期の特徴とその背景

前項で整理した類型分布あるいは推移を念頭に置いて、各時期の特徴をまとめたい。

縄文時代後期

集落の立地は、丘陵下端部から遺跡中央部を流れる河道の自然堤防状の高まりを中心とした範囲が選ばれ、集落は限定された居住域と周辺に広がる加熱活動域で構成される。居住域内には貯蔵域が取り込まれている。

居住域は、標高が高く面積が確保された安定的な微高地が選択され、２～３棟の竪穴住居と大形土坑、ピット群、溝などの遺構群に加え、大量の遺物を包含している。近辺には貝塚も形成される。貯蔵域は、その機能が保たれる地形や居住域との位置を考慮しつつ、効果的な利用を意識した河道あるいは谷部の選地が窺われる。炉を中心とした加熱活動域は、やや低くて面積はさほど広くない微高地が利用されており、集落の端に広がる傾向が認められが、遺物は非常に希薄であり、加熱関連遺構以外の遺構はほとんど認められない場合が多い。

中葉段階には、遺構・遺物の出土量がやや少なくなり、集落の中心は若干移動する。不明確な点もあるが、集

落構造などには変化を示さない可能性が高い。

弥生時代早期

縄文時代後期の集落とは構造面に大きな変化を見せる。最も特徴的な変化は、居住域・加熱活動域の消失である。貯蔵域に関しても、居住域と分離して分散的に置かれる点やその立地が、従来希薄であった南側に中心が移動し、遺物をほとんど伴わず数基で構成される点などにも新たな傾向が現れる。こうした居住域との分離は管理面での低下を考えさせる。さらに、遺物をほとんど共伴しない点からは、加工作業についても、後期に認められた集中的で定期的な加工作業の想定は困難であり、そこには堅果類に対する生業面での重要性の低下を感じざるを得ない。貯蔵穴や遺物出土地点に窺われる集落の南側への移動は、活動域が平野部へ進出する傾向の現れと理解されるが、縄文時代に利用されていた微高地部には、なぜ遺構が残されていないのか。続く弥生時代前期では微高地上には水田畦畔が形成される。こうした変化の中にその理由が求められるであろう。

(2)　周辺遺跡の状況

①　百間川沢田遺跡[6]

岡山県南部の岡山平野に位置する。津島岡大遺跡とは旭川を挟んで対峙する位置に当たる。四元調査区において、縄文時代後期中葉の遺構・遺物がまとまって出土した。丘陵下端の微高地から斜面部に、貯蔵穴３基を含む土坑８基・炉７基・貝塚、そして多量の出土遺物が報告されている。土坑の形態や立地からその大半は貯蔵穴の可能性が高いと考えると、B①類の地点と評価される。また、多量の遺物と炉の存在あるいは貝塚などからは、ＡＩ類とも結びつくこととなり、居住域と貯蔵域との密接な位置関係が想定される。

弥生時代早期（報告書では縄文時代晩期後葉）では、同遺跡の高縄手調査区あるいは百間川原尾島遺跡において遺構・遺物が確認されている。遺構は土坑程度で貯蔵穴は検出されておらず全体に希薄である。いずれの地点も平野部にあたり、丘陵裾部の四元調査区とはやや異なる立地を認めることができる。

縄文時代後期集落の状況や弥生時代早期における貯蔵穴の減少や平野部への移動・出土地点の増加などに、津島岡大遺跡と共通した動きを見ることができる。

②　久田原遺跡[7]

岡山県北部の山間部に位置する。山塊の裾部、谷口の比較的平坦な地形に立地する。山塊の反対側にあたる西側には、隣接して河川が流れる。遺跡は縄文時代後期中葉、晩期中葉、弥生時代早期（報告書では晩期後葉）の３段階の時期が確認されている。

縄文時代後期は機能が明らかな遺構が少ないため、晩期に注目しよう。晩期中葉では、竪穴住居３棟と河道内に袋状土坑（貯蔵穴）14基が確認されている。その他に晩期として焼成土坑５基、ピット多数、火処が報告され、出土遺物も多い。類型化すると、A①Ｉ類・B①Ｉ類、そしてC①類で構成されることとなり、居住域・貯蔵域・加熱活動域を有する集落となる。弥生時代早期（晩期後葉）では、竪穴住居１棟とピット群が報告され、貯蔵穴は確認されていない。河道部は埋没し平坦化が進んでおり、地形や集落構造に変化が認められる。

このように、晩期中葉の集落構造や弥生時代早期（晩期後葉）での変化は、津島岡大遺跡などと共通する状況であることを指摘しておこう。

(3)　縄文時代後期以降の集落動向と生業

津島岡大遺跡に認められる縄文時代後期集落の動向は、岡山県南部あるいは北部地域の後・晩期集落においても確認することができる。縄文時代後期は遺跡の立地変化や遺跡数の増加などに、大きな変化が認められる時期

表７　低湿地型貯蔵穴一覧（岡山県）

遺跡名	所在地	後期前葉	後期中葉	晩期中葉	弥生早期
津島岡大遺跡	岡山市（県南部）	40基（２地点）	７基（１地点）		15基＋α（４地点）
百間川沢田遺跡	岡山市（県南部）		３基（他に土坑４基）		
南方前池遺跡	山陽町（県南部）			８基	
菅生小学校裏山遺跡	倉敷市（県南部）			12基	
舟津原遺跡	倉敷市（県南部）			３基	
久田原遺跡	奥津町（県北部）			14基	
宮の前遺跡	落合町（県北部）			41基	

である。同時期に平野部や扇状地を中心に展開する集落には、津島岡大遺跡に代表されるような、貯蔵域を形成し明確な空間利用形態を示す場合があり（表７）、新たな集落構造が生み出されていく様子を窺うことができる。こうした動向の背景の一つに生業の問題があることは、前期・中期における海産資源への傾斜が、後期以降、植物資源へと転換していく様子の一端を示す貯蔵穴の急増などからも読み取ることができる(8)。岡山県下では、貯蔵穴Ｂ①類を示す遺跡は、縄文時代後期前葉に始まり、その多くが晩期中葉に属する。こうして成立する生業形態は、石器組成など様々な点から堅果類の他、狩猟・漁労・農耕などがバランスのとれた形で構成することが予想される。

しかし、その貯蔵穴群も、最終段階まで残る津島岡大遺跡においても、水田遺構の形成時期前にはＢ②類として生業内での比重を低下させ、弥生時代前期(9)にはほとんど姿を消していく。その弥生時代早期段階には、生業面で貯蔵穴への傾斜が影を潜めるなかで、集落構造にも大きな変化が認められる。津島岡大遺跡では次の段階には水田畦畔が広範囲に覆うことを考慮すると、弥生時代早期段階に、生業の転換が起きていた可能性を指摘しておきたい。

註（１）津島岡大遺跡に関する文献は付表４・５にあげている。以下に述べる各調査地点の内容は、各報告書および年報・紀要を参考としている。

（２）富樫孝志1995「縄文時代後期～晩期における津島岡大遺跡の構造」『津島岡大遺跡５』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第８冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

（３）忽那敬三2004「石器組成からみた縄文時代後期集落の空間利用」『津島岡大遺跡14』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第８冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

（４）高田浩司2003「津島岡大遺跡における縄文時代後期の炉」『津島岡大遺跡13』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第18冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

（５）富岡直人1998『朝寝鼻貝塚発掘調査概報』加計学園埋蔵文化財調査室発掘調査報告書２

（６）平井勝1993『百間川沢田遺跡３』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84　岡山県古代吉備文化財センター

（７）弘田和司2004『久田原遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告184　岡山県教育委員会

（８）註（１）（６）（７）
岡山県教育委員会1976「宮の前遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査７』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(12)
下澤公明1988『本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査Ⅱ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告71　岡山県教育委員会
中野雅美1993「菅生小学校裏山遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査５』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告81　岡山県教育委員会
近藤義郎1995『南方前池遺跡』岡山県山陽町教育委員会

（９）第19次調査において、弥生時代前期に属する貯蔵穴が報告されている。
岩崎志保他2003『津島岡大遺跡12』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第17冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

第２章　鹿田遺跡の調査研究

本年度は２件の発掘調査と12件の立会調査を行った（図33・表８）。発掘調査は、医学部附属病院病棟建設に伴う第14次調査と医学部総合教育研究棟建設（2002年度第13次調査実施地点）にあたっての外構工事に伴う第15次調査である。病棟建設に関連した調査は、1998年（平成10年）度以降、第９～12次調査として進めており、今回は５回目となる。立会調査は、こうした両棟建設に関しての周辺整備工事が主体を占めている。　（山本）

第１節　発掘調査の概要

１．鹿田遺跡第14次調査（医学部附属病院病棟２期、鹿田ＣＤ～ＣＫ12区、ＣＤ～ＣＬ13区、ＣＤ～ＣＭ14～20区）

ａ．調査の成果

本調査では附属病院病棟新営予定地の1330㎡余を調査した。その結果、弥生時代後期以降、近世に至るまでの各時期において、耕作地あるいは集落に関連する遺構・遺物を検出した。これまでの周辺調査地点での成果も併せ、鹿田遺跡の南部における時期別の概観を以下に述べる。

近世には、この一帯は耕作地として利用されたものと考えられる。主要な水路となる東西方向の溝を中心に、規格的な用水路が東西・南北につくられ、その一方でため池状遺構のような特異な遺構が営まれている。

鎌倉時代末から室町時代には、大型の溝で区画された屋敷地の存在が窺える。第９・11次調査の成果もあわせると、おおよそ35～70m毎に南北方向の溝がつくられ、東西方向の溝と併せて、大溝で区画された中に井戸・柱穴等が確認される状況である。その区画内でも、大まかには北側に建物、南側に耕作地といった土地利用形態に違いが認められる。

平安時代末から鎌倉時代にかけても、井戸の存在などから調査区の北西部に集落が存在することは確実である。

古墳時代以前となると、遺構・遺物ともに希薄な様相を示すようになり、この点は隣接する第９・11次調査地点とも共通する。溝・畦畔等の状況から弥生時代後期～古墳時代には本調査地点付近は主に耕作地として利用されていたことが窺え、同時期の集落は既調査地点の状況からは現在の外来診療棟付近に求めることができる。

調査期間：2003（平成15）年７月31日～12月17日
調査面積：1331㎡
調査担当：岩崎志保（主任）、高田浩司、横田美香、野崎貴博
主な遺構・遺物：近世～近代の畦畔・溝４条・土坑10基・ため池状遺構１・陶磁器・瓦・漆椀、平安時代後半～室町時代の井戸10基・土坑５基・柱穴群・溝・土師質土器・白磁・青磁・木簡・櫛、弥生時代後期～古墳時代の畦畔・溝・土器集中箇所４箇所

ｂ．調査の経過

2003年７月17日より造成土取りを開始し、同７月31日より発掘調査を開始した。調査では近世から弥生時代までの遺構を確認し、12月17日に発掘調査を終了した。また10月18日には現地説明会を開催し、同日より10月24日

までの一週間、病棟内の一部を使用してパネル展示会を実施した。現地説明会当日には約200名、パネル展示会期間を合計すると約370名の見学者を得た。

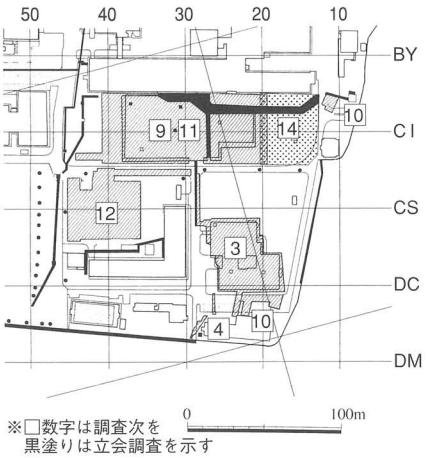


図21　第14次調査地点位置
（縮尺１/5000）

ｃ．調査の概要

①　調査地点の位置（図21）

本調査地点は、附属病院南病棟の東隣接地であり、調査以前は駐車場として利用されていた。

②　層序（図22）

１層：造成土である。現地表面の標高は2.5～2.7m である。

２層：灰色砂質土で近代の耕作土である。３区では堆積が認められず、部分的に削平されている。上面の標高1.3～1.5m である。

３層：淡灰色～灰白色砂質土であり、上下２層に細分できるところもある。近世の耕作土と考えられる。調査区北側では堆積が見られない。上面の標高は1.3～1.5m である。

４層：淡灰褐色～緑灰色の砂質土である。中世の包含層である。上面の標高1.2～1.4m である。上下２層に細分できるところもあり、それぞれが遺構面である。上層の４ａ層は削平を受けているため、調査区の大半では残っておらず、部分的に確認されるのみである。４ｂ層はほぼ全域に堆積しており、上面で井戸・溝等の中世の遺構を多数確認した。

５層：暗緑灰色～灰褐色粘質土で、中世の包含層である。調査区北側では２層に細分できる。上面標高1.05～1.15ｍである。５層でも中世の遺構を確認した。また３区では６層上面に洪水砂と考えられる黄褐色砂質土（５’層）が部分的に認められる。

６層：灰褐色～茶褐色の粘質土である。上面では中世のピット等を確認しているが、６層自体は古墳時代の包含層と考えられる。上面の標高0.9～1.05m である。

７層：黄褐色砂質土である。弥生時代後期～古墳時代の包含層である。上面の標高は0.7～0.9m である。部分的には２層に細分できるところがあり、上層の７ａ層は比較的砂質が強く、下層の７ｂ層は粘質が強く、耕作土の可能性が考えられる。

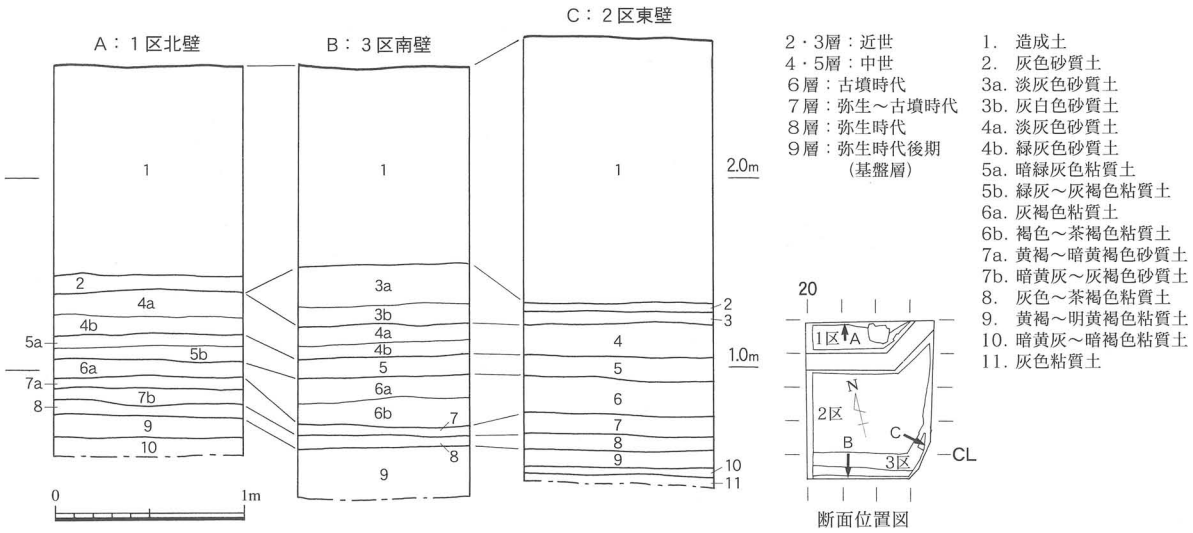


図22　土層断面柱状図（縮尺１/40）

８層：灰色～茶褐色粘質土で、弥生時代後期相当の耕作土と考えられる。上面の標高0.6～0.8mである。８層上面では、畦畔と考えられる高まりや溝数条を確認している。

９層：黄褐色～明黄褐色粘質土である。基盤層であり、上面で弥生時代後期の土器片を含む土器集中遺構を確認しているほか、隣接する第11次調査地点からつながる弥生時代の大畦畔を確認している。上面の標高は0.55～0.75mである。

10層：暗黄灰色～暗褐色粘質土で、無遺物層である。

11層：灰色粘質土であり、下層に行くにつれ灰色砂をラミナ状に含む部分がある。無遺物層である。

②　遺構・遺物の概要

〈近　世〉（図23）

３層上面で、土坑11基・溝４条・ため池状遺構１を検出した。これらの近世遺構は、主に調査区の南側２・３区で確認した。北側の１区では削平によって中世遺構面上まで破壊が及んでいることもあるが、井戸・土坑等の深い遺構も近世段階のものは認められなかった。

土坑は３区西端と２区東側に偏在して構築されている。土坑１～４・６の５基は、３区の西端に切り合い関係を持って集中的につくられている。そのうち数基には木枠の痕跡がみられ、野壺としての機能が窺われる。第12次調査地点Ｂ・Ｃ地点においても近世の土坑が20基確認されているが、これらのうち１基は墓、他はゴミ穴と推定され(1)、本調査地点とは様相を異にしている。

３区では近世の東西方向の畦畔１条を検出している。この畦畔は近世～近代にかけて継続して営まれたものと考えている。ＣＬ～ＣＭライン間には中世～現代まで掘り返しを繰り返しながら利用された東西方向の溝があり、この溝より南側には、畦畔や野壺等の存在から水田域が広がっていたことが窺える。

この東西溝の北側では、溝にとりつく形で、ため池状遺構（Ｄ13）を検出した。ため池状遺構は東西14m、南北７m、深さ1.6mの隅丸方形で、西側には幅２m、深さ1.4mの溝がとりつき、第11次調査地点内で終わっている。また南西角と南東角の２カ所から、幅1.5m、深さ0.8mの溝が検出され、南を流れる東西溝にとりついている。ため池状遺構の中からは陶器片・瓦片のほか、漆塗り椀・キセルなどが出土している。こうした状況から水を調整する機能を持つ水ためであったことが予想されるが、具体的な機能・用途については現在のところ不明である。

〈中　世〉（図23）

４層～６層上面で、井戸10基、土坑３基、溝25条、ピット多数を確認した。柱穴群や井戸・土坑は調査区の北西部を中心に検出された。これらの遺構は南北方向の大きな溝（幅４～５m、深さ1.5m）や、東西方向のやや浅い溝（幅１～２m、深さ0.3m）によって区画されており、屋敷地を構成しているものと考えられる。

井戸は調査区北西部を中心に検出した。いずれも木枠等は認められなかった。井戸は平安時代後半頃につくられたものが最も古く、以後、室町時代にかけて次々に構築されたものと考えているが、詳細な時期については検討が必要である。井戸からの出土遺物のあり方は様々であり、調査区西端部で検出された井戸１からは土師質の椀・杯・皿のほか、瓦器椀や白磁碗など豊富な遺物が出土した。これらは多くの炭や焼土とともに出土している。井戸１の所属時期は平安時代後半～末頃と考えられる。ほぼ近接した時期と考えている１区で検出した井戸（土坑18）からは、土師質土器椀・瓦器椀と櫛・呪符木簡それぞれ１点が出土している（木簡については第３節参照）。そのほか２区で検出した井戸（土坑20）には、土師質鍋がすっぽりと入れられていた。

南北方向の溝３条（Ｄ５・６・15）からは椀・鍋などの土師質土器の破片のほか、輸入陶磁器・瓦が出土した。これらの溝の時期は中世後半（室町時代）の範疇で考えている。南北方向の溝のうち、最も東に位置する溝15は幅2.5～３mで、南端部は東西溝の北側で収束し、東西溝との間には幅20cm程の浅い導水路がとりついていた。収束部では底にウマ下顎骨を１点検出した。溝15底面より導水路部の底面は40cmほど浅く、近世のため

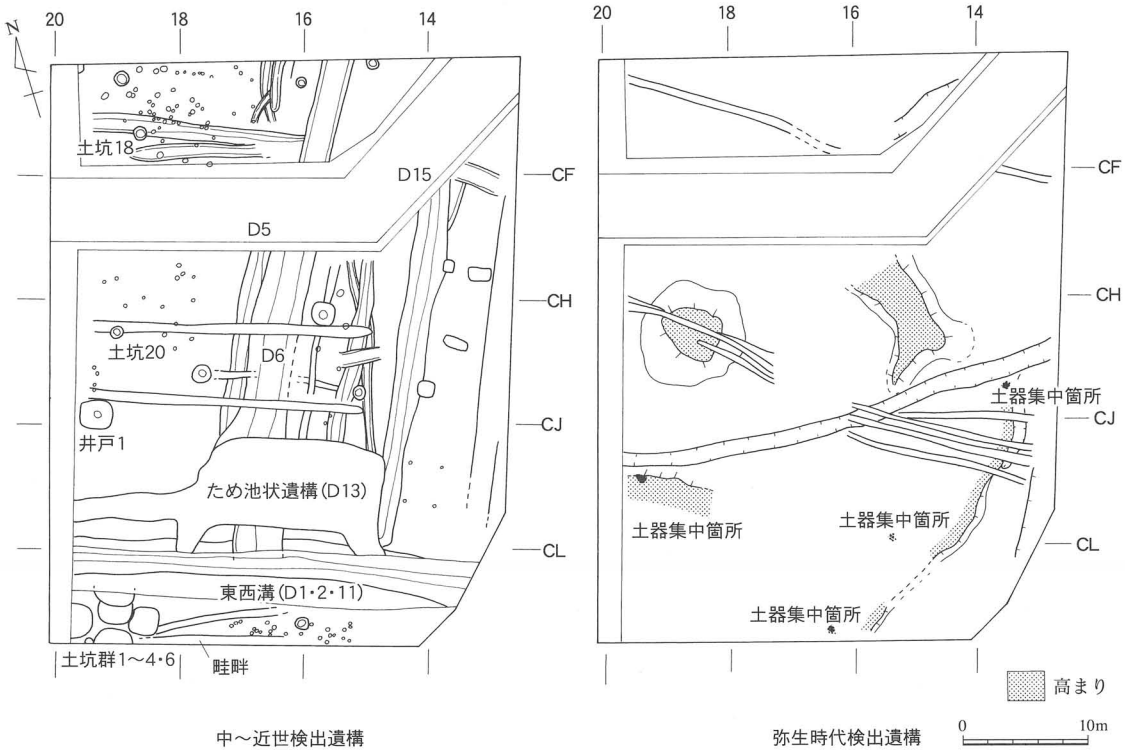


図23　検出遺構全体図（縮尺１/600）

池状遺構と同様に、水を調整する機能があったことが窺われる。詳細な時期については今後の整理作業を経て慎重に検討していくが、南北方向の溝は、次第に東へと位置を変えている可能性があり、集落あるいは屋敷地が拡大している状況が推定される。

柱穴は調査区北西に偏在して確認された。１区西半に最も集中しており、２区の北西部と、３区中央部分にややまとまっている。建物を復元するには至らなかったが、１区南端寄りで東西方向、２区の北側で南北方向に並ぶラインを、それぞれ１条確認した。また２区南東部に、方形に並ぶ４基の柱穴を検出している。

〈弥生時代後期～古墳時代〉（図23）

７～９層上面で、弥生時代～古墳時代にかけての遺構を確認した。溝９条、土器集中箇所４箇所である。当該時期は、本調査地点周辺は耕作地として利用されたことが窺える。

７層上面では２区で北西から南東に走行する小規模な溝を数条検出した。

８層上面では１区で北西－南東方向の溝を１条、また２区の南側で、南西から北東へ走行する溝１条を検出した。本溝は第11次調査地点で検出していた大畦畔に伴う溝に連なるものである。この溝の南側は基盤層である９層が高い部分にあたり、畦畔の可能性が考えられる。この高まりの部分で２箇所、土器集中箇所を確認した。特に掘り込みは設けず、複数個体分の土器片がひとかたまりに置かれている状況であった。同様の土器集中箇所は２・３区で他に２箇所確認している。第９次調査地点では畦畔の交差部分に同様の土器集中箇所を確認している。いずれも時期は弥生時代後期と考えられる。

９層上面では２区の北側部分で、高まり部分２箇所を確認した。同様の地形は第９次調査地点でも確認されており、機能としては水田耕作等の耕作活動による削平を受けずに取り残された部分と考えられる(2)。

７～９層検出中の遺物出土量はきわめて少なく、本調査地点の古墳時代以前については遺構・遺物ともに希薄な様相と言える。

以上、本報告の内容は暫定的であり、詳細な報告は今後の整理・検討を経て正式に行う。　（岩崎志保）

註（１）高田浩司2003「近世の櫛について」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2001』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
（２）百間川原尾島遺跡等でみられる「島状高まり」に類するものと考えられる。
平井勝ほか1995『百間川原尾島遺跡４』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97　岡山県教育委員会

２．鹿田遺跡第15次調査（総合教育研究棟ポンプ槽・検水槽設置、鹿田ＢＱ～ＢＳ45・46区）

ａ．調査の成果

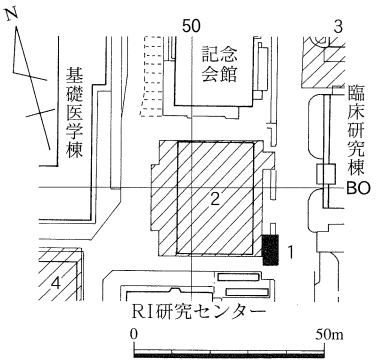
本調査地点は鹿田遺跡第13次調査地点（総合教育研究棟建設地）の南東隅に隣接する。今回の調査では、近世の土坑、中世の溝群と土坑、古墳時代初頭の井戸と溝を検出した。このうち、近世土坑、中世溝は第13次調査東半でも検出されており、東側に遺構が広がることを確認できた。古墳時代初頭の井戸では、上・中・下位の３群に分かれた遺物群を検出した。井戸での活動を考えるうえの良好な資料となろう。第13次調査で検出された大規模な土器だまりが連続して検出されることも予想されたが、本調査地点では確認されず、本調査区の北側に広がるか、収束するものと考えられる。

調査期間：2003（平成15）年10月16日～29日
調査面積：30.4m²　　調査担当：野崎貴博
主な遺構・遺物：近世土坑１基、中世の溝５条・土坑１基、古墳時代初頭の井戸１基・溝１条、古墳時代初頭の土器・木器

ｂ．調査の経過

鹿田地区では、2002年度から総合教育研究棟の建設工事が行われており、建設に先立って2002年４～10月に第13次発掘調査を実施している(1)。2003年度になり、建物周辺の外構工事が施工され、順次立会調査を行ってきたが、総合教育研究棟の南東に隣接する本地点において、雨水・実験排水を排出するためのポンプ槽・検水槽の建設計画が具体化するに至った。第13次調査では古墳時代の大規模な土器だまりをはじめ、井戸や溝などの遺構や、中世の集落跡が確認されており、これらの遺構が連続することも予想されたため、対象となる面積は小さいものの、本地点についても発掘調査を実施することとした。

調査の実施に先立ち、2003年10月14、15日の両日で造成土・支障配管等の攪乱を除去した。発掘調査は10月16日から開始し、近世・中世・古墳時代の遺構面を調査したうえで、10月29日に終了した。



1. 第15次調査地点
2. 第13次調査地点（総合教育研究棟）
3. 第５次調査地点（管理棟）
4. 第７次調査地点（基礎研究棟）

図24　第15次調査地点位置
（縮尺１/2000）

ｃ．調査の概要

①　位置（図24）

本調査区は鹿田地区のほぼ中央にあたり、総合教育研究棟（第13次調査地点）の東南隅に接する。北に記念会館、東に臨床研究棟、北東に管理棟（第５次調査地点）、南西に基礎研究棟（第７次調査地点）が建つ。

②　層序（図25）

本調査地点は、調査区の北側約１/５が攪乱によって失われ、西側も第13次調査範囲に重複しており、残存状態は不良であった。そのため土層の観察

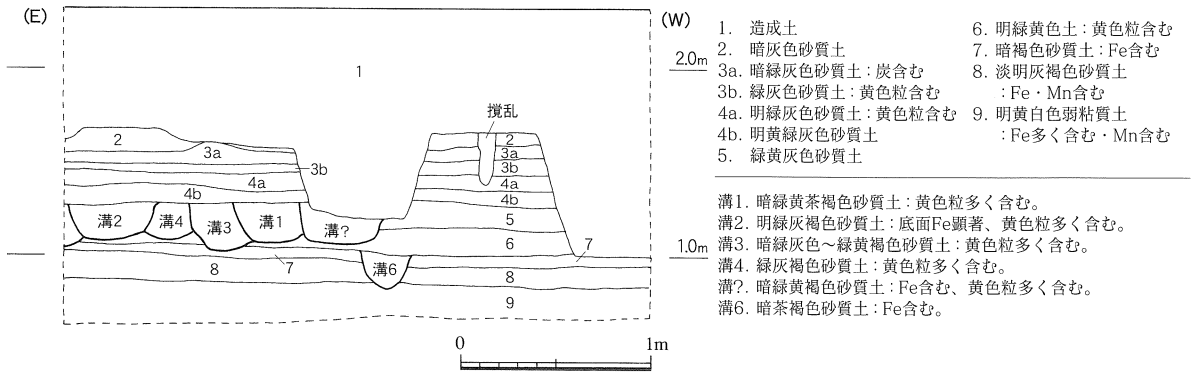


図25　調査区南壁土層断面（縮尺１/40）

は調査区南壁・東壁で行っている。以下、各層の特徴を記しておく。

１層：大正時代以降の造成土で、現地表面から約１m 下位まで堆積している。現地表の標高は約2.5m である。

２層：暗灰色砂質土で、近代の耕作土である。上面の標高は約1.6m である。

３層：緑灰色砂質土で、色調から上下に２分している。３ａ層は暗緑灰色砂質土で炭・土器片を含む。３ｂ層は緑灰色砂質土で黄色粒を含む。近世に属する。３ａ層上面で土坑１基を検出した。上面の標高は約1.6m である。

４層：明緑灰色砂質土で、色調から上下２層に細分している。４ａ層は明緑灰色砂質土で、中世の包含層である。

５層：緑黄灰色砂質土で、中世の包含層である。調査区を南北方向に並行して走る溝群、東西方向に走る溝はこの層に帰属する。

６層：明緑黄色土で、黄色粒を含む。中世の包含層である。

７層：暗褐色砂質土で、鉄分を含む。この層の上面は古墳時代前期の面であり、井戸と溝を検出している。

８層：淡明灰褐色砂質土で、鉄分、マンガンを含む。遺物はほとんど出土していない。隣接する第13次調査地点の成果から、弥生時代後期の堆積層と考えられる。

９層：明黄白色弱粘質土で、鉄分、マンガンを含む。遺物は出土していない。

③　**遺構・遺物**

本調査区においては、近世・中世・古墳時代初頭の遺構面を確認した（図26）。

近世：３層上面で土坑１基を確認した。南半は攪乱によって失われているが、北半の平面形は半円形を呈しており、円形の土坑が復元される。隣接する第13次調査地点の調査区東半では多数の近世土坑が検出されている。本調査地点でも近世土坑を検出したことにより、これらの土坑群の範囲がさらに東に広がることを確認できた。

中世：５層上面から掘削された南北方向、東西方向に走る溝群・土坑１基・ピット１基を確認した。また南壁で溝と思われる２ヶ所の落ち込みを確認したが、平面的に確認することはできなかった。

南北方向の溝（溝１～４）は並行して掘削されているが、いずれも切りあい関係を有しており、先行する溝が埋没した後、新たな溝を再掘削したものと思われる。東西方向の溝（溝５）は南北方向の溝群を切って掘削されており、今回検出した溝の中では最も新しい段階に掘削されたものである。土坑は、溝群の西で検出した。大半は攪乱によって失われており、本来の規模は不明である。

古墳時代初頭：古墳時代初頭の遺構は、７層上面で井戸１基と溝１条（溝６）を検出した。

南北方向に走行する溝６の規模は、幅約30cm、深さ約15cm と小規模なものである。溝の走行方向を中世の溝群と比較すると、北東から南西に向かってやや斜行している。第13次調査地点で確認された弥生時代後期の溝も北東から南西に向かってやや斜行しており、地形の影響をうけている可能性もある。

井戸は調査区西側で検出した（図27）。井戸の西側は攪乱により失われていたが、現状で南北約150cm、東西約130cm で、やや歪んだ長楕円形を呈している。井戸の断面形は、上方の約１/４は擂鉢状に大きく開き、屈曲

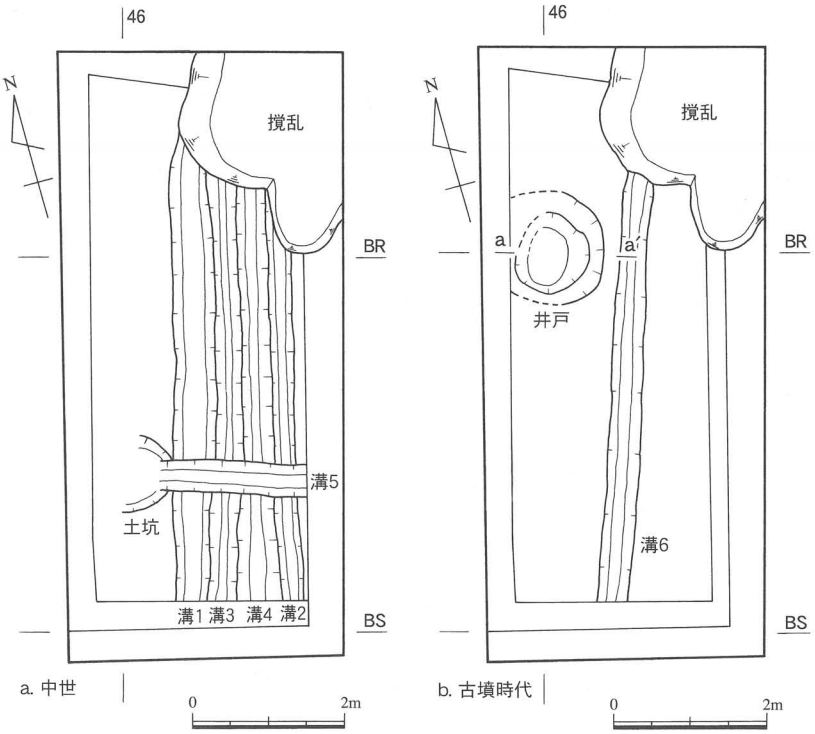


図26　検出遺構平面図（縮尺１/100）

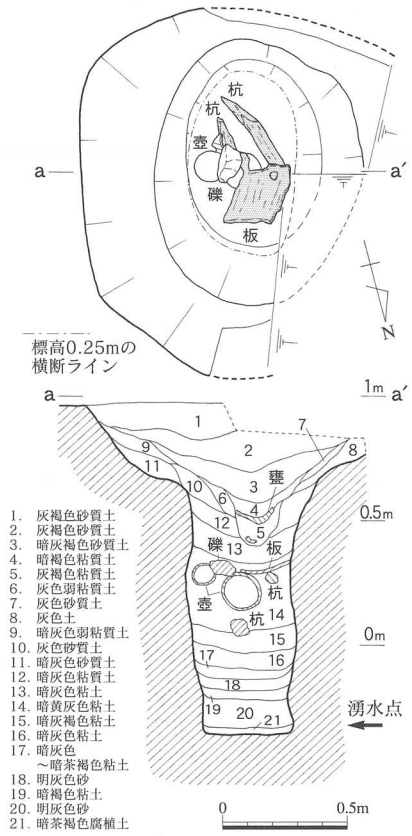


図27　井戸　平・断面図
（縮尺１/30）

部から底面までは径約40cm 程度の筒状の掘り方となる。

埋土は１～３層が砂質土、４・５層は炭化物を多量に含み、ピット状に落ち込む粘質土層である。６～11層は大きく皿状に開く開口部を埋める砂質土～粘質土層、12～17層は厚く堆積する粘土層、粗砂と植物遺体を多く含む粘土層が交互に堆積する18～21層に大別できる。

井戸の内部に認められた遺物群は、上位・中位・下位の３群に分かれる。上位の遺物群は井戸筒部の埋没後、径約30cm、深さ約20cm の規模で掘り込まれたピットの内部（４、５層）で、甕がつぶれた状態で検出されたうえ、埋土には炭化物を多く含んでいる。中位の遺物群は、上位の遺物群から約10cm の無遺物層を挟んだ14層で検出された。ほぼ完形の壺２個体、杭２本、板材１枚が出土している。壺は直口壺、小形丸底壺が出土しているが、直口壺は井戸のほぼ中央に、小形丸底壺は東側に寄せて収められていた。２個の壺の上には、礫がのせられた状態で入れられている。２本の杭はいずれも横倒しの状態であった。この遺物群の最上位には板材が置かれている。下位の遺物群は、20層の最下部から出土した。土器の量は少なく、小形の台付鉢１点、甕の破片数点が出土したのみである。小形の台付鉢は逆さに伏せた状態で出土した。

これらの遺物の出土状況と堆積の状況をあわせて考えると、下位の遺物群は湧水点より下位にあたり、井戸の使用段階における行為を示すと考えられる。中位の遺物群は湧水点より約50cm 程度堆積が進んだ段階であり、井戸廃絶後、埋没途中の段階における行為を示す。また、上位の遺物群は擂鉢状に開く開口部付近まで筒部が埋没した後、ピット状の掘り込みを掘削し、その掘り込みの中で甕を用いて煮炊きを行っていると考えられる。

以上のように、この井戸では使用から廃棄までの間に、土器を用いた行為が３回行われていたことが判明した。井戸における土器を用いた行為を考えるうえで重要な事例といえよう。

④　第13次調査地点との関係

隣接する第13次調査の東半部では、中世段階の遺構として、北側・南側に東西方向の溝、本調査地点と接する

東側に南北方向の溝が掘削されている。これらの溝で区画された内側では、多数のピット群、建物や井戸が確認されているが、建物の主軸と溝の方向はほぼ合致しており、溝で囲まれた屋敷地と考えられる空間が形成されていることがわかる。本調査区で確認した溝は、第13次調査地点東辺を南北に走行する溝と並行しており、一連の区画溝と考えられる。

次に、弥生～古墳時代の遺構についてみておきたい。第13次調査地点の地形は、南北が比較的高く、中央には東西に窪地が通るが、調査区中央からは南東に折れて本調査地点に至るように延びる。今回の調査区は狭小な範囲であったため、明確な落ち込みは確認できなかったが、調査区全体が窪地の中に含まれる可能性もある。

さて、第13次調査地点で確認された東側の土器だまりは窪地の中に形成されており、今回の調査区にも延びる可能性があったが、北半が攪乱を受けていたためか、検出されなかった。しかしこれ以上南に延びる可能性はなく、東に伸展するか、あるいは収束するかのいずれかであると推定される。

今回の調査地点で検出した井戸は、この土器だまりの南に隣接して位置する。ところで、第13次調査地点でも、ＢＯ46付近では土器だまりの東に方形の井戸が確認されている。この井戸の底には完形の甕が２個体入っていた。第13・15次調査地点で確認したこれらの井戸はともに、①土器だまりに近接して井戸が掘削されること、②いずれも土器を用いた行為が確認されること、という共通点があり、井戸と土器だまりとの関係が注目される。

なお、本調査の成果は現在整理途上にあるため、本報告の内容は現時点での理解を示す暫定的なものであり、今後、修正・変更の可能性があるものであることを断っておきたい。（野崎）

註（１）光本順2003「鹿田遺跡第13次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2002』pp.26－29　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

第２節　立会調査の概要

鹿田地区では前節で報告した第14次調査・第15次調査以外に、小規模工事に伴う立会調査を12件実施している。このうち、包含層が確認されたものは９件である。ここでは、遺構が確認されたもの、地形復元に有用なデータが得られたもののうち、総合教育研究棟新営屋外排水敷設工事に伴う調査（表８、調査番号５）、総合教育研究棟外構工事（雨水・汚水・実験排水路敷設）に伴う調査（表８、調査番号９）について報告する。

１．総合教育研究棟新営屋外排水敷設工事に伴う調査（鹿田ＢＳ～ＢＺ45区、ＣＡ～ＣＯ46区、ＣＯ45区）

ａ．調査の経過

本調査地点は、鹿田地区のほぼ中央、総合教育研究棟からエネルギーセンター西側の駐車場入り口までを南北に接続するもので、管路長約90m をはかる。周辺には、北西に第13次調査地点（総合教育研究棟）、東に第９・11次調査地点（病棟）、南東に第12次調査地点（エネルギーセンター）がある。調査は2003年８月21日から９月12日までの期間で、工事の進行にあわせて随時実施した。

ｂ．調査の概要

１層は造成土である。２層は近代の暗灰色粘土、３層は近世の明緑灰色粘土である。桝４－５間で近世土坑を確認した。４層は明灰茶褐色砂質土で、中世の包含層であり、最も南端の桝１では柱穴と考えられるピット数基を確認した。５層は茶褐色砂質土で古代、６層は灰茶褐色砂質土で弥生時代後期～古墳時代の包含層と考えられ

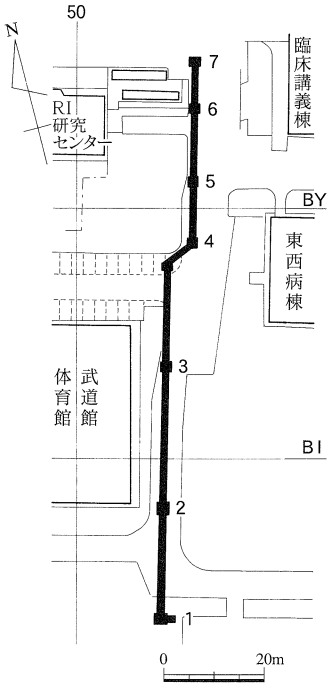


図28　調査位置（縮尺１/1500）

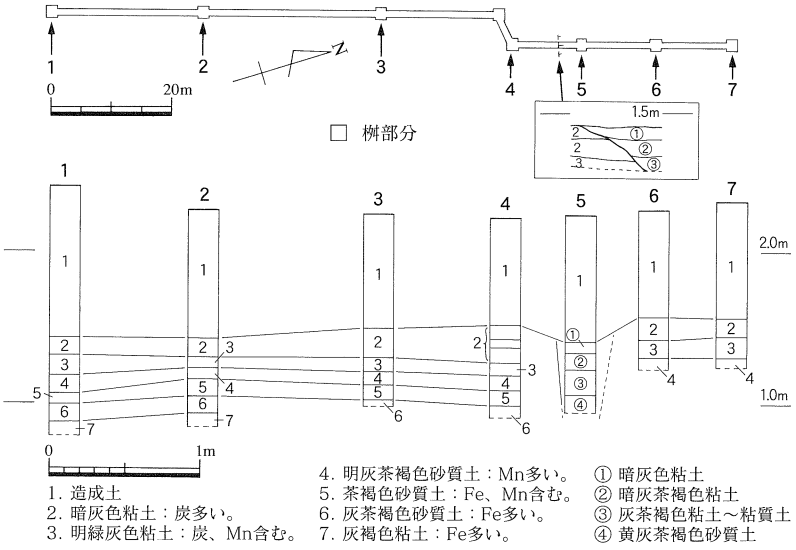


図29　土層柱状図の位置と土層断面（縮尺１/1250、１/50）

る。７層は灰褐色粘土で、弥生時代中期の包含層の可能性がある。また、桝４－６間で確認した①～④層では、粒子が細かく粘性の強い湿地性の堆積物と考えられる粘質土層が確認された。

土層観察から、同地域は、桝１～４間では大きな地形の起伏は認められず、おおむね平坦な地形であるといえる。桝４－５間で２層から切り込むかたちで粘性の強い粘土が堆積しており、この部分には谷状の落ちがあったものと推定される。ただし、桝６ではこの堆積が認められず、谷状の落ちは桝４－６間の幅で収まると考えられる。

ｃ．まとめ

今回調査した汚水管が南端部で接続する汚水配管は1999年度に立会調査を実施した調査46の区間(1)にあたる。鹿田地区の南半部を南北に約170m にわたって掘削したことになる。その成果もあわせると、鹿田地区では南辺付近に中世段階の幅広の溝が多数掘削される。それ以北では、第９・11次調査地点で検出した溝が通る部分もあるが、今回の調査の桝５付近で確認した谷状の落ち込みまで、中世以降は比較的安定した微高地が広がることが予想される。（野崎）

註（１）横田美香2000「鹿田地区」『岡山大学構内遺跡調査研究年報17』pp.23 - 25　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

２．総合教育研究棟外構工事に伴う調査（鹿田ＢＬ～ＢＳ45～53区）

ａ．調査の経過

本調査は2002年度に発掘調査を実施した鹿田遺跡第13次調査地点の周囲に埋設される雨水・汚水・実験排水設備敷設に伴う立会調査である。本調査地点の周辺には、北東に第５次調査地点（管理棟）、南西に第７次調査地点（基礎研究棟）がある。また、第13次調査地点では近世・中世・古墳・弥生の各時期で遺構が密に検出されており、今回の工事においても掘削深度の大きい部分では遺構にかかることが予想された。調査は2003年10月８日から11月19日までの期間で、工事の進行にあわせて随時実施した。

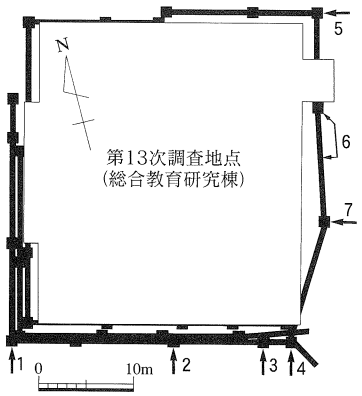
ｂ．調査の概要

１層は近代以降の造成土である。２層は明灰褐色粘土で近代の堆積である。３層は暗灰色粘土で近世の堆積である。４層は暗緑灰色粘質土、５層は暗緑灰褐色砂質土で、中世の堆積層である。６層は暗灰黄褐色砂質土で、古墳時代初頭の遺構が上面から掘削されている。７層は灰黄褐色砂質土で、弥生時代後期の包含層である。８層は南辺で確認された淡青灰色粘質土、９層は明黄褐色砂質土でいずれも弥生時代後期以前の堆積層と考えられる。

遺構は第13次調査範囲の東側管路（断面６）で密に検出された。検出された遺構は５層、６・７層上面から掘削されている。５層では井戸、土坑を確認した。土坑からは擂鉢、椀等の中世の遺物が出土しており、５層から掘削される遺構は中世に属すると考えられる。６・７層では溝、ピットを確認した。溝からは高杯等が出土しており、６・７層の遺構は弥生～古墳時代前期に属すると考えられる。

ｃ．まとめ

本調査区は第13次調査範囲を取り囲むように設定された排水路であるが、北辺・西辺では掘削深度が小さく、遺構の広がりを確認し得なかった。東辺・南辺では周辺へ遺構が広がることを確認できたが、第13次調査地点で確認された３ヶ所の大規模な土器だまりの延びについては明確にはできなかった。　（野崎）



※矢印は柱状図
・断面図の位置

図30　調査位置・土層柱状図位置
（縮尺１/800）

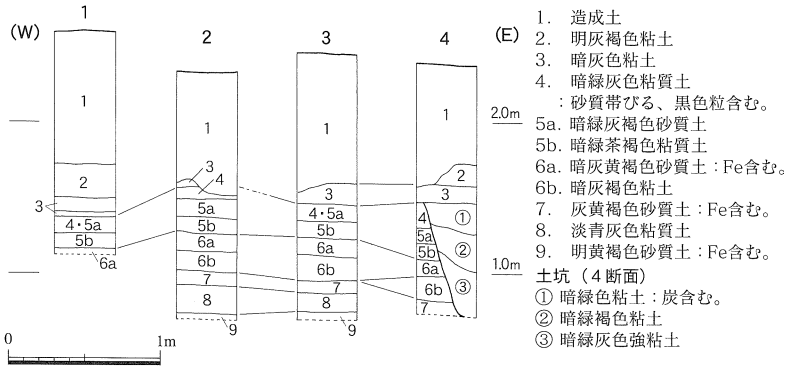
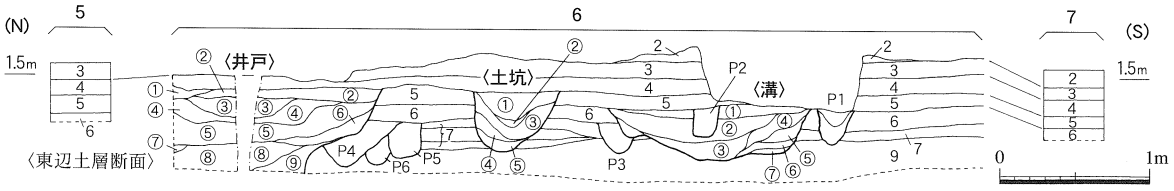


図31　土層柱状図（縮尺１/40）



井戸
① 暗灰褐色粘土
② 灰褐色粘土
③ 明灰褐色粘土
④ 緑灰褐色砂質土：炭多く含む。
⑤ 明緑灰褐色砂質土：黄色ブロック含む。
⑥ 緑灰褐色砂質土
⑦ 明緑色弱粘質土
⑧ 淡緑灰色砂質土：Fe多く含む
⑨ 緑灰色土

土坑 ① 暗緑黄灰褐色砂質土：炭多く、黄色ブロック含む。
② 明緑灰黄褐色砂質土：炭
③ 明灰黄白色砂質土
④ 暗緑茶褐色土
⑤ 明緑茶褐色砂質土：Fe多く、Mn含む。

溝 ① 緑灰色土
② 緑灰色砂質土
③ 明緑灰色砂質土
④ 暗黄緑灰色砂質土
⑤ 明緑灰色砂質土
⑥ 淡緑灰色砂質土
⑦ 淡緑灰白色砂質土

ピット P1 ① 暗黄緑灰色砂質土
② 暗緑灰色砂質土
P2 暗緑灰色砂質土
P3 暗黄灰褐色砂質土
P4 暗灰褐色～暗緑灰褐色砂質土
P5 明緑灰黄褐色砂質土
P6 明灰黄褐色砂質土

図32　５～７区間　土層断面（縮尺１/40）

表8　2003年度鹿田地区調査一覧

番号	種類	構内座標	所属	調査名称	調査期間	掘削深度(GL-m)	備考
1	発掘	CD～CM12～20	医病	病棟新営2期工事	7.31～12.17	1.7	調査面積1331m²、弥生～古墳時代の畦畔・溝、中世の井戸・土坑・溝、近世のため池・土坑〈鹿田遺跡第14次調査〉
2	発掘	BQ～BS45・46	医	総合教育研究棟外構工事（ポンプ槽・検水槽）	10.16～29	1.9	調査面積30.4m²、中世溝群、古墳初頭井戸・溝〈鹿田遺跡第15次調査〉
3	立会	CN12 CM・CN21、CR27	医病	基幹・環境整備工事（外灯・樹木・自転車置場撤去・移設、排水配管掘削）	7.14・23	0.8	外灯移設地点では近世層？まで掘削、その他造成土内
4	立会	BS45、BL43～45	医	総合教育研究棟新営機械設備工事（ガス配管埋設）	8.21～22	0.85	近世層確認
5	立会	BS～BZ45 CA～CO46、CO45	医	総合教育研究棟新営その他工事（屋外排水）	8.21～9.12	1.7	弥生中期？包含層まで掘削、近世土坑・中世ピット多数確認、低地部確認
6	立会	BJ43～45	医	総合教育研究棟新営電気設備工事	9.16～17	1.0	GL－0.65mで近世層確認
7	立会	AK61	医	医学部外灯建柱工事	10.2	1.0	造成土内
8	立会	BQ～BS45	医	総合教育研究棟新営機械設備工事（給水・消火配管埋設）	10.6	0.8	近世層確認
9	立会	BL～BS45～53	医	総合教育研究棟外構工事（雨水・汚水・実験排水）	10.8～11.19	0.8～1.75	弥生中期包含層まで掘削した箇所あり、古墳時代溝、中世井戸、近世土坑等を確認
10	立会	BR～BS50～54	医	総合教育研究棟給水配管埋設工事	11.11～13	0.85～1.33	多くは既設、一部で中世層確認
11	立会	BK47～53 BS50・53	医	総合教育研究棟外構工事（樹木移植）	11.17･18、12.2	0.65～0.9	多くは造成土内、一部で近代層確認
12	立会	BK・BR46	医	総合教育研究棟外構工事（車止め設置）	11.19	0.6～0.8	造成土内・既掘工事内
13	立会	BR53、BL54	医	総合教育研究棟外構工事（外灯）	11.2	1.4	中世層まで掘削
14	立会	AS～AY65・68	医	安全衛生管理対策（床・換気等改修）工事（解剖実習棟改修工事）	04.1.16	0.5～0.9	既設工事内

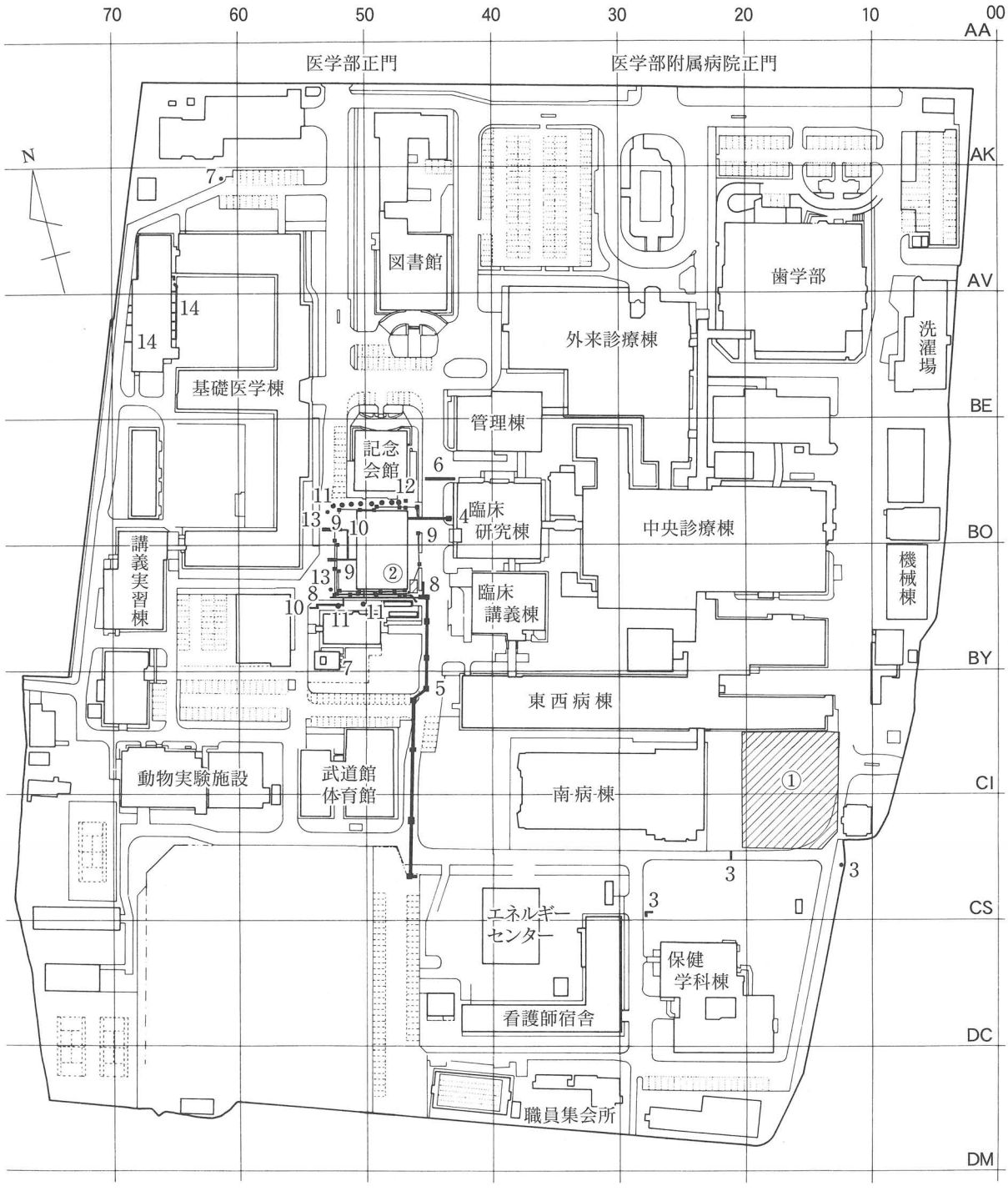


図33　2003年度の調査地点【２】－鹿田地区－（縮尺１/2500）

第３節　鹿田遺跡の研究

１．鹿田遺跡第14次調査出土木簡について

岩崎　志保

ａ．はじめに

2003年度に実施した鹿田遺跡第14次調査では、中世の井戸より木簡１点が出土した。鹿田遺跡での木簡の出土は今回で４例目であり、貴重な事例が増加したことになる。調査の概要については「第１節」を参照されたい。本稿では今回出土した木簡の概要を紹介し、これまでの事例も加え、その意義について考えてみることとする。なお、遺構・遺物に関する詳細については、まだ整理途上であることを断っておきたい。

ｂ．第14次調査出土木簡

①　出土遺構

木簡が出土した遺構は、調査区の北側、鹿田地区構内座標ではＣＥ18区に位置する土坑（井戸）である。上面が径１ｍ程のほぼ円形を呈する素堀りのもので、検出面からの深さは1.6ｍである。上面から深さ0.5ｍまではややすり鉢状に傾斜し、それより下位はほぼ垂直に近い傾斜である。

埋土は９層に分けられる。木簡は、使用中の流入土と考えられる９層〈灰色粘土〉の上に堆積する８層〈灰色粘土〉中より出土している。８層には有機物を多く包含している。木簡と一緒に出土した遺物には木製櫛１点・土師質椀１点・瓦器椀２点等があり、これらの遺物から推定される本遺構の年代は平安時代後半～末である。

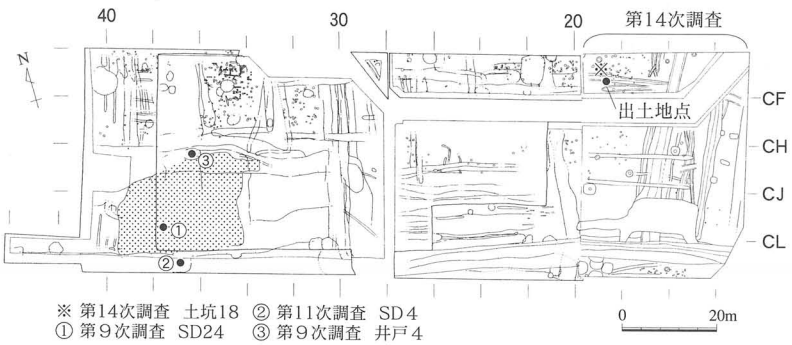


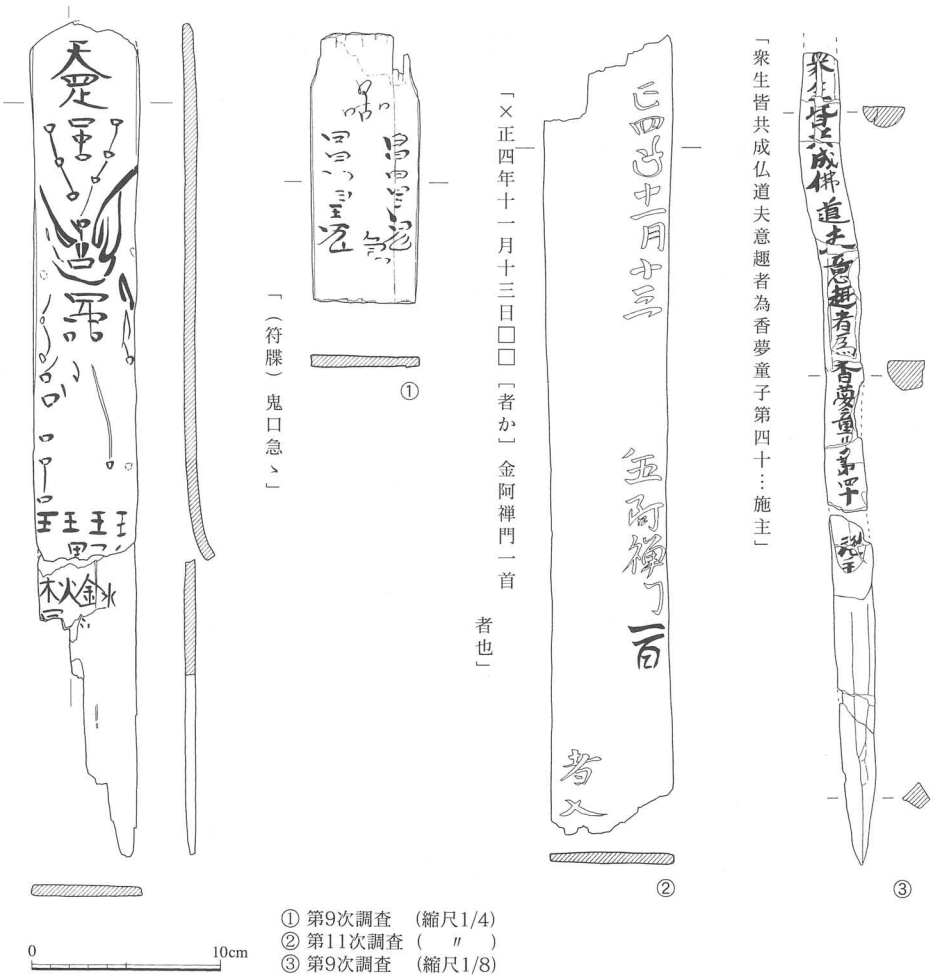
図34　鹿田遺跡第９・11・14次調査木簡出土地点（縮尺１/1600）

②　木簡の形状と釈文

出土した木簡は大きく３片に割れているが、接合する破片であり、最大長43.3cm、最大幅5.5cm、最大厚0.6cmである。上端は角を落として円みをつけている。下端は欠損しているため、全長や、全体の形状は不明である。保存状況は比較的良く、上部１/４の墨書は肉眼でも判読が可能であった。中央部分はおそらく外気にさらされていた影響と考えられる面の荒れや、反りが認められる。この部分については赤外線カメラ撮影装置による撮影での判読を行った。

図35　木簡出土状況

本資料は「呪符」木簡である。表面には上から「天岡星」の文字が認められる。天岡星は道教の神で北斗



① 第9次調査　（縮尺1/4）
② 第11次調査（　〃　）
③ 第9次調査　（縮尺1/8）

図36　鹿田遺跡出土木簡

七星の別名ということである。天岡星の効能には治病・消災・延命が主たるものとして挙げられる。続いて星座を示した図柄と、「辟邪」とも見られる顔面、「星」と見られる字が描かれている。星座を示すと見られる図柄は中央部より下位にも認められる。また下の破片には、ちょうど断裂部分に集中して文字が書かれている。四文字ずつ、少なくとも三段、おそらく四段にわたって書かれていることがわかる。最上列には「王王王王」、二段目「□田□□」三段目「木火金水」、四段目「□□□□」、その他にも墨痕は認められるものの、判読することはかなわなかった。「木火金水」とは陰陽五行説に関連する文言である。中国に起源する思想で、日本では古代において特に重んじられたものであり、古代人の生活に必要な五つの素材（木火土金水）を示している。木火金水の順となるのは「五行相生説」が基礎となるものである。

裏面にははっきり文字と認められるものはないが、下方に墨痕かと思われるものは見られる。

このような「天岡星」呪符木簡の出土例は、草戸千軒遺跡（13次ＳＸ落ち込み・27次ＳＫ1825）・尾道市街地遺跡等、他にも数例が知られている（図37）。

ｃ．その他の鹿田遺跡出土木簡

鹿田遺跡からは、以前にも木簡３点が出土している（図36）。これらのうち、③の詳細については既に報文があるため、ここでは①②の２点について述べることとする。

①は今回の出土木簡と近似した時期の、同じく「呪符木簡」である。一辺25m程の方形を呈する池状遺構の底面から出土した。墨書の内容については残存状況が悪く、赤外線カメラ撮影装置によってようやく判読できる程度であった。

②は墨痕がほとんど見えず、墨で書いた部分の木質がわずかに浮き上がっていることから判読できた内容である。かなり風化が進んでいることから、野外でさらされていたことが窺える。「×正四年」の年号から推定される元号は「寛正四年（1463）」・「永正四年（1507）」・「天正四年（1576）」のいずれかである。内容は何らかの仏事に関するもので、菩提か逆修のため供養法楽をおこなった記録であることが窺える。

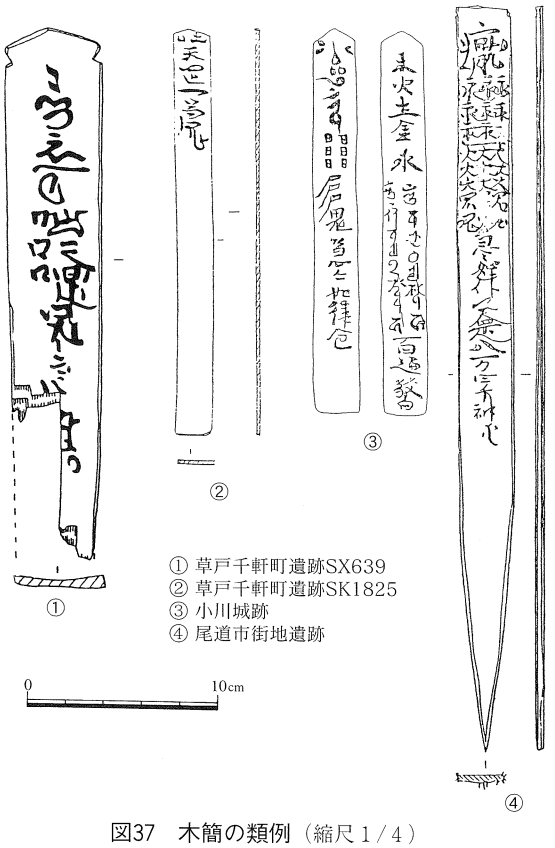


図37　木簡の類例（縮尺１/４）

ｄ．まとめ

これまでに鹿田遺跡から出土した木簡は、大きく分けると呪符木簡と供養木簡とに大別できそうである。また時期的にみると呪符木簡は平安時代のもの、供養に関するものはそれよりも新しく室町時代以降のものと分けることも可能である。

呪符木簡は、全国的に見てもその多くが集落跡からの出土であり、鹿田遺跡の例も同様である。その使用目的としては①物忌み、②地鎮、③疫病除け、④悪霊除けの４つに大別される。このうち「天岡星」符は疫病除けに使用されることとが多いようである。また９次調査の呪符木簡については判読できる文言から、「急々如律令」という呪句が続いていたものとみられ、物忌みに使用された可能性が高い。

このような中世におけるまじない・信仰の証左は、日本各地で見つかってきており、当時の生活の一端を示す貴重な資料である。鹿田遺跡が特異な場所であったのでは決してなく、たとえば近隣では、岡山市百間川米田遺跡や福山市草戸千軒町遺跡でも呪符木簡の出土が認められるように、中世の集落には普通に見られる習慣・風習であったといえる。その一方で、平安時代後期の星宿信仰は主として貴族の間に流行していたということや、祈祷にはそれなりの財力が必要といったことから、呪符木簡を出土する集落の性格や位置づけといった点も興味深いところである。

今回は資料紹介にとどまったが、今後遺構・遺物の詳細な検討を行っていく中で、鹿田の集落での空間的・時期的変遷を整理して、改めて木簡資料についても考えていくこととしたい。

鹿田遺跡の木簡釈文に関しては、岡山大学文学部久野修義・今津勝紀先生より御教示を得た。なお、木簡資料については、暫定的な内容であり、今後の整理・検討を経た後に正式報告を行うこととする。

引用・参考文献

山本悦世・久野修義2000「岡山・鹿田遺跡」『木簡研究』第22号　pp.203－205　木簡研究会
喜田敏・岩崎志保2000「鹿田遺跡第９次調査・鹿田遺跡第11次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』17　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
広島県立歴史博物館1990『中世の民衆とまじない（春の企画展図録）』
巽淳一郎1996「まじないの世界Ⅱ」『日本の美術』No.361

第３章　その他地区の調査研究

第１節　東山地区の調査概要

2003年度は東山地区で１件の立会調査を実施した。調査１は附属教育実践総合センター環境整備工事に伴う外灯移設である（表９）。移設元・移設先の２カ所で、いずれも0.8×0.8mの範囲をGL－１mまで掘削し、近代層と思われる青灰色粘質土まで達した。（岩崎）

表９　2003年度東山地区調査一覧

番号	種類	構内座標	所属	調査名称	調査期間	掘削深度(GL-m)	備考
1	立会	－	教育	教育学部附属教育実践総合センター環境整備工事	04.2.25	1.0	青灰色粘質土(近代？)まで掘削

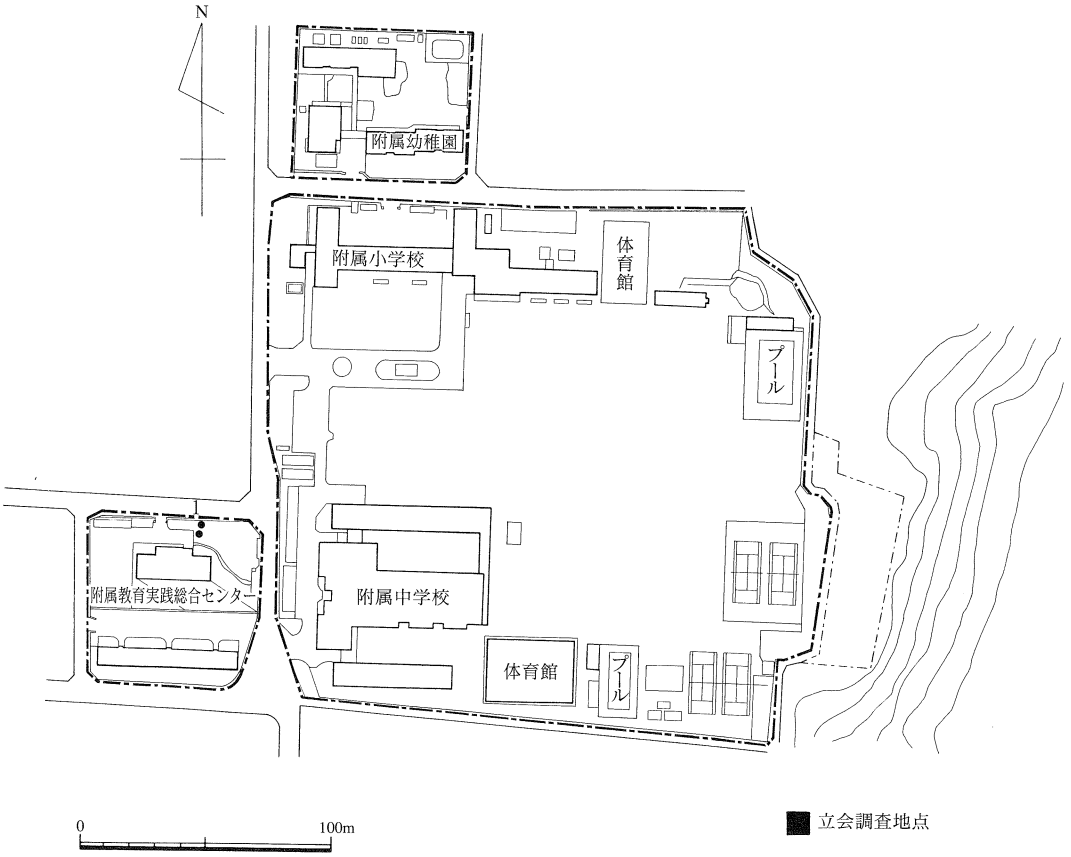


図38　2003年度の調査地点【３】－東山地区－（縮尺１/3000）

第４章　調査資料の整理・研究および公開・活用

第１節　調査資料の整理・研究

１．調査資料の整理

2003年度において調査資料の整理で中心となったのは、津島岡大遺跡第15次調査と第17・22次調査、そして第27次調査の資料である。いずれも、特に縄文時代後期の遺構・遺物が注目された調査地点である。

津島岡大遺跡第15次調査では、生業に関する遺構として貯蔵穴から水田への推移を、縄文時代後期から弥生時代前期に向けて捉えることができた。その中で河道部と微高地上の土地利用状況や変化を分析できた点は大きな成果である。第27次調査では、縄文時代後期における微高地上の利用状況を確認し、その中で、炉の存在に注目した分析を行った。

遺物面では、こうした４地点の調査からは縄文時代後期前半を中心とした遺物が豊富に出土しており、中期末～中津式、あるいは福田Ｋ２式などの土器編年を考える上で、貴重な資料を提供することとなった。

以上の分析・整理作業の結果を受けて、2003年度に刊行した発掘調査報告書は、『津島岡大遺跡13』と『津島岡大遺跡14』である。年度前半期に刊行した前者は、2001～2002年度に発掘調査を実施した津島岡大遺跡第27次調査の報告書であり、縄文時代後期の炉の形態と機能についての考察を行った。年度末に刊行した後者は、1995～1996年度に調査した津島岡大第15次調査の報告書であり、縄文時代の貯蔵穴と弥生時代の水田に注目した考察と出土地点別の石器組成から土地利用を考えた考察を掲載した。いずれも、縄文時代の集落遺跡をして、遺構・遺物ともに良好な資料を報告することができた。

自然科学的分析では、鉄滓類（津島岡大遺跡第10次調査・第19次調査出土）の成分分析と棒火矢（同遺跡第12次調査出土）に使用された火薬の成分分析を行った。鉄滓に関しては川鉄テクノリサーチ株式会社に依頼し、棒火矢の火薬に関しては、岡山大学理学部地球科学科松田敏彦助教授にご助力頂いた。その他に、津島岡大遺跡において弥生時代早期～前期の鍵層となっている「黒色土」の形成原因を解明する試みとして、土壌分析を行い、岡山理科大学の白石純氏にご協力頂いた。それぞれの分析結果については、次項で報告している。　　（山本）

２．調査資料の分析

(1)　津島岡大遺跡（第10次・第19次調査）出土鉄滓類の分析

津島岡大遺跡第10次調査（保健管理センター新営予定地）および第19次調査（コラボレーションセンター新営予定地）から出土していた鉄滓について、自然科学的分析を川鉄テクノリサーチ株式会社に依頼して実施した結果、「古墳時代後期においては、津島10次・19次調査地点周辺で、鍛冶等に関連する作業が行われた」という想定を補強するデータを得た。分析結果は、以下に報告する。なお、両調査に関する発掘調査報告書は、『津島岡大遺跡11』[(1)]・『津島岡大遺跡12』[(2)]として2002年度に発刊されている。

註（１）山本悦世・岩崎志保2003『津島岡大遺跡11』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第16冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
（２）野崎貴博2003『津島岡大遺跡12』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第17冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

津島岡大遺跡から出土した製鉄関連遺物の自然科学的分析

川鉄テクノリサーチ株式会社

はじめに

調査の観点として、鉄滓の製鉄原料の推定、製鉄工程上の位置づけ、観察上の特記事項などを中心に調査した。その結果について報告する。

調査項目および試験・観察方法

（１）調査項目

調査資料の記号、出土遺構・注記および調査項目を表10に示す。

（２）調査方法

ｉ）重量計測、外観観察および金属探知調査

資料重量の計量は電子天秤を使用して行い、少数点２位以下で四捨五入した。各種試験用試料を採取する前に、資料の外観をmm単位まであるスケールを同時に写し込みで撮影した。資料の出土位置や資料の種別等は提供された資料に準拠した。

着磁力調査については、直径30mmのリング状フェライト磁石を使用し、感応検査により「強・稍強・中・稍弱・弱」の５ランクで、個別調査結果を表示した。遺物内の残存金属の有無を金属探知機（MC：metal checker）を用いて調査した。

ii）化学成分分析

化学成分分析は鉄鋼に関するJIS分析法に準じて行っている。

- 全鉄（T.Fe）：三塩化チタン還元－二クロム酸カリウム滴定法。
- 金属鉄（M.Fe）：臭素メタノール分解－EDTA滴定法。
- 酸化第一鉄（FeO）：二クロム酸カリウム滴定法。
- 酸化第二鉄（Fe_2O_3）：計算。　• 化合水（C.W.）：カールフィッシャー法。
- 炭素（C）：燃焼－赤外線吸収法。
- ライム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化マンガン（MnO）、酸化ナトリウム（Na_2O）、イオウ（S）、珪素（Si）、マンガン（Mn）、リン（P）、銅（Cu）、ニッケル（Ni）、クロム（Cr）、アルミニウム（Al）、バナジウム（V）、チタン（Ti）：ICP発光分光分析法。
- シリカ（SiO_2）、アルミナ（Al_2O_3）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化チタン（TiO_2）、酸化リン（P_2O_5）、酸化カリウム（K_2O）：ガラスビード蛍光X線分析法。

但しCaO、MgO、MnOは含有量に応じてICP分析法またはガラスビード蛍光X線分析法を選択。

- カルシウム（Ca）、マグネシウム（Mg）、酸化ナトリウム（Na_2O）：原子吸光法。

なお、鉄滓中成分は、18成分（全鉄T.Fe、金属鉄M.Fe、酸化第一鉄FeO、酸化第二鉄Fe_2O_3、シリカSiO_2、アルミナAl_2O_3、ライムCaO、マグネシアMgO、酸化ナトリウムNa_2O、酸化カリウムK_2O、酸化チタンTiO_2、酸化マンガンMnO、酸化リンP_2O_5、化合水C.W.、炭素C、ヴァナジウムV、銅Cu、コバルトCo）を化学分析している。

鉄器中成分の化学分析は、13成分（炭素C、シリコンSi、マンガンMn、リンP、イオウS、銅Cu、ニッケルNi、コバルトCo、アルミニウムAl、ヴァナジウムV、チタンTi、カルシウムCa、マグネシウムMg）を化学分析している。

iii）顕微鏡組織写真

資料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨（鏡面仕上げ）する。金属鉄はナイタール（５％硝酸アルコール液）で腐食後、顕微鏡で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し、顕微鏡組織および介在物（不純物、非金属鉱物）の存在状態等から製鉄・鍛冶工程の加工状況や材質を判断する。原則として100倍および400倍で撮影を行う。必要に応じて実体顕微鏡（５倍～20倍）による観察もする。

iv）Ｘ線回析測定

試料を粉砕して板状に成形し、X線を照射すると、試料に含まれている化合物の結晶の種類に応じて、それぞれに固有な反射（回析）された特性X線が検出されることを利用して、試料中の未知の化合物を観察・同定することができる。多くの種類の結晶についての標準データが整備されており、ほとんどの化合物が同定される。

測定装置　理学電気株式会社製　ロータフレックス（RU－300型）

測定条件

①　使用X線　　Cu-Kα（波長＝1.54178Å）

②	Kβ線の除去	グラファイト単結晶モノクロメーター
③	管電圧・管電流	55kV・250Ma
④	スキャニング・スピード	4.0°/min
⑤	サンプリング・インターバル	0.020°
⑥	D.S.スリット	1°
⑦	R.S.スリット	0.15mm
⑧	S.S.スリット	1°
⑨	検出器	シンチレーション・カウンター

ｖ）胎土・耐火材遺物の耐火度試験および耐火度推定

耐火物及び耐火物原料の耐火度試験は、JIS R 2204（耐火物及び耐火物原料の耐火度試験方法）及びJIS R 8101（耐火度試験用標準コーン）に準拠して測定する。

遺物資料を粉砕（180μmの篩通過）し、規定（量的に少量であるから寸法は第２種の小型：幅７mm、高さ27mm）のゼーゲルコーンを成型する。このゼーゲルコーンを傾斜80°で受台に装着し、毎分５℃で加熱する。コーンの先端が曲がり始め、受台に接触したときの温度を溶倒温度とする。

これまでの耐火度の測定結果と胎土の化学成分の分析結果を146資料について整理した。

耐火度ｙ（ゼーゲルコーン溶倒温度、℃）と胎土の化学組成因子fxとの関係について、次を得ている。すなわち、$y=110.98\ \ fx+927.82$

ここで、$fx=(25.8Al_2O_3+5.2SiO_2)/(146MgO+448MnO+78.6CaO+12.5T.Fe+10.4TiO_2)$

調査結果および考察

分析調査結果を図表にまとめて42～44頁に示す。表10に調査資料と調査項目をまとめた。表中の○印が調査実施項目を示す。表11は鉄滓の化学成分分析結果、表12は胎土の化学成分分析結果と耐火度の計算値ならびに表13は鉄滓資料のＸ線回析鉱物・顕微鏡組織をそれぞれ示す。

化学成分分析、顕微鏡観察およびＸ線回析の結果等を考慮し、考察する。各資料について、タイトル：資料番号、資料種別（括弧内は推定された製造工程）、着磁力、MC（金属探知機判別）を一行で示す。そして、各資料の調査項目、すなわち、外観観察、顕微鏡組織観察、Ｘ線回析測定、化学成分分析およびSEM観察の調査結果をまとめ、考察する。各資料の最も確からしい推定結果を最後にまとめる。以下、資料番号順に述べる。

〈資料No.１〉鞴羽口、着磁力：無、MC：無

外観：外観写真を42頁図39に示す。総重量は81.6g、長さ68mm×幅55mm×厚さ22mm。先端に灰色の発泡した溶融滓が付着している羽口片で、遺存部分から推定すると外径70mm、内径25mm程度か。着磁力は先端付着滓部でわずかに感応する。内側の胎土はやや濃い肌色で白色・褐色の砂礫が混入し苅（スサ）と思われる植物繊維痕も見える。灰色の土と表皮側の熱影響部を避けて試料採取する。

耐火度：胎土の耐火度ｙを化学成分因子fxから推定した計算結果を表12に示す。耐火度は1,420℃（fx＝4.33）と得られ、図43にプロットした。耐火度の測定結果は1,405℃と得られた。既往の値と比較して、本資料の耐火度は羽口として通常の温度である。

化学成分：胎土の化学成分分析の結果を表12に示す。シリカ（SiO_2）、アルミナ（Al_2O_3）を主成分（87.2%）とするムライト（Mullite：$3Al_2O_3\cdot 2SiO_2$）系耐火材で、酸化鉄（2.8%Fe_2O_3）とアルカリ成分（K_2O+Na_2O＝3.5%）を含んでいる。原料には、通常の木節系粘土に、シリカ成分の高い陶石系または長石系の胎土原料を配合し焼成したもの、と推察される。

したがって、本資料は、製鉄用羽口の上質粘土材で、使用には十分耐えた羽口胎土と推定される。

〈資料No.２〉鉄滓（鍛冶滓（含鉄錆化物））、着磁力：強、MC：無

外観：外観写真を42頁に示す。総重量は19.5g、長さ29mm×幅26mm×厚さ20mm。全体が橙色の水酸化鉄と土の酸化鉄瘤に覆われた小型資料。錆化鉄塊系遺物か。錆化瘤を避けて切断し、試料採取する。錆化鉄塊か鉄滓か切ってみないとわからないが、着磁力が強いため残存金属鉄の小片でも見つかるとよいが。試料調整時に残存金属は見られなかった。

顕微鏡組織：ミクロ組織写真を43頁に示す。No.２－１、No.２－２とも、写真全体に白く霞がかかったように見える。オキシ水酸化鉄（安定なゲーサイト）が存在すると推察される。写真No.２－１は、オキシ水酸化鉄で、本来は白色繭玉状ウスタイトと金属鉄が共存していたと推察される。写真No.２－１は、金属鉄と炉壁材が接した資料で、金属鉄は完全に錆化し、オキシ水酸化鉄（ゲーサイト）になっていると推察される。なお、着磁力が強で、MC反応が無の資料は、金属鉄が存在しないで、マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）が存在することを示す。（参考：鉄さびの経年過程を参照）

Ｘ線回析：回析結果を表13に示す。マグネタイト、ゲーサイト、ウスタイトとヘマタイトが同定された。酸化鉄・水酸化鉄の鉱物である。

化学成分：化学成分分析の結果を表11に示す。全鉄（T. Fe）54.5%に対して、酸化第一鉄（ウスタイト：

FeO）は16.6%、酸化第二鉄（ヘマタイト：Fe_2O_3）は59.2%で、Fe_2O_3と FeO の比率は、78：22で、シリカ（Silica：SiO_2）12%では平衡状態図（参考：鉄滓の平衡状態図を参照）のマグネタイトとヘマタイトの境界領域に近く、金属鉄は完全に錆化していると推察される。また、化合水を4.7%含むことからも金属鉄が錆化し、オキシ水酸化鉄（ゲーサイト）を生成していると推察される。

滓化（溶融ガラス化）成分の指標となる造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+Na_2O+K_2O$）は16%である。砂鉄原料に含まれていたと考えられる二酸化チタン（Titanium　dioxide：TiO_2）は0.2%と低く、バナジウム（Vanadium：V）0.002%と低い。鉱石に含有する成分の一つである銅（Copper：Cu）は0.001%と少ない。酸化マンガン（MnO）含有量は、砂鉄系に含まれる値よりも、５～10倍高い。

本資料の製造工程の位置づけとして、これまでの化学成分分析の結果（データ）を整理し、図40～42に示す。図40・41では鍛冶滓を、図42では、MnO/TiO_2比と TiO_2/T. Fe 比の関係から鉱石系鉄滓を示している。金属組織から金属鉄は完全に錆化し、顕微鏡組織を消失しているが、鉱石系の精錬鍛冶滓または鍛錬鍛冶滓の金属鉄が含まれていた、と推察される。

以上の結果を総合すると、本資料は、①鍛冶滓（含鉄錆化物）で、②鉄源には鉄鉱石を使用した可能性が高い、と推定される。

〈資料 No. 3〉鉄滓（鉄鉱石系精錬鍛冶滓）、着磁力：強、MC：無

外観：外観写真を42頁に示す。総重量は19.5g、長さ56mm×幅47mm×厚さ29mm。３面に割欠面を有し、２片に割れたものを接着してある資料。破面からは黒色発泡粗鬆な滓の様相を呈する。表面には灰色の土が固着しているが、剥がれた部分からは緻密な黒い鉄滓が確認できる。表皮の土は除去して試料採取する。

顕微鏡組織：ミクロ組織写真を43頁に示す。写真 No. 3－1の前面に白色繭玉状・樹枝状のウスタイト（Wustite：FeO）と写真の背面にファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が観察される。写真 No. 3－2もウスタイトと多量のファイヤライトが観察される。

Ｘ線回析：回析結果を表13にまとめた。ウスタイト（Wustite：FeO）、マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）が同定された。

化学成分：化学成分分析の結果を表11に示す。全鉄51.7%に対して、ウスタイトは49%、ヘマタイトは19.2%で、Fe_2O_3と FeO の比率は、28：72で、シリカ14%で、平衡状態図のウスタイトの領域にあり、還元反応が進行していたと推察される。酸化マンガン（MnO）含有量が、砂鉄系に含まれる値よりも、約10倍高い。

滓化成分の指標となる造滓成分は29%で、砂鉄原料に含まれていたと考えられる二酸化チタン0.17%で、バナジウム0.006%、銅0.001%と少ない。本資料の製造工程の位置づけとして、図40～42に、分類を示す。本資料は、図40・41において、砂鉄系か鉱石系か判断が難しいが、鍛冶滓に近い。図42では、鉱石系製錬滓のグループに属している。したがって、製錬の後期から精錬の中期の工程で生成した鉄滓で、金属鉄が生成する段階にあったと推察される。

以上の結果を総合すると、本資料は、①精錬鍛冶滓で、②鉄源には鉄鉱石を使用した可能性が高い、と推定される。

〈資料 No. 4〉鉄滓（炉壁付着滓）、着磁力：弱、MC：無

外観：外観写真を42頁に示す。総重量は364.9g、長さ128mm×幅62mm×厚さ60mm。全体が灰褐色と黒色のまだら模様で、牡蠣状の大きな資料。ガラス質で一方に炉壁材と思われる変色部分があり、炉壁溶融部か炉壁付着滓であろう。中央の黒灰色の瘤状になった部分から試料採取する。

顕微鏡組織：ミクロ組織写真を43頁に示す。写真 No. 4－1の前面に軟化溶融した胎土成分中に気泡が観察される。写真 No. 4－2にはやや赤色を呈するガラス質滓が観察される。したがって、炉壁材が軟化したガラス質滓と推察される。

Ｘ線回析：回析結果を表13に示す。シリカ（Quartz：SiO_2）とクリストバライト（Cristobalite：SiO_2）のみが同定された。胎土成分がガラス化しているため、回析されない。

化学成分：化学成分分析の結果を表11に示す。全鉄3.8%　に対して、ウスタイトは0.6%、ヘマタイトは4.4%で、Fe_2O_3と FeO の比率は、87：13で、シリカ73%で、平衡状態図のクリストバライトの領域にあり、胎土成分と推察される。

滓化成分の指標となる造滓成分は93%で、砂鉄原料に含まれていたと考えられる二酸化チタン0.6%で、バナジウム0.005%、銅0.001%と少ない。本資料の製造工程の位置づけとして、図40・41に、分類を示す。本資料は、図40・41において、炉壁付着滓のグループに属している。

以上の結果を総合すると、本資料は、①炉壁付着滓、と推定される。

〈資料 No. 5〉鉄滓（鉄鉱石系製錬滓）、着磁力：弱、MC：無

外観：外観写真を42頁に示す。総重量は182.8g、長さ77mm×幅44mm×厚さ40mm。割欠面は２つ。ごろりとした礫状資料。発泡した凹凸のある面には、灰茶色の土砂が凹部に詰まっている。平坦な一面には石英質の砂礫や長さ５mm、幅３mm 程度の白い石灰質状のものもある。小魚の骨ででもあろうか。試料採取は付着土砂や埋没砂礫を除去して行う。

顕微鏡組織：ミクロ組織写真を43頁に示す。写真 No. 5－1の前面に僅かに白色繭玉状・樹枝状のウスタイト

および写真の背面には多角形がやや変形したファイヤライト観察される。写真No. 5－2にも大きなファイヤライトが観察される。

X線回析：回析結果を表13に示す。ファイアヤライトとウスタイトが同定された。

化学成分：化学成分分析の結果を表11に示す。全鉄43%に対して、ウスタイトは54%、ヘマタイトは２%で、Fe_2O_3と FeO の比率は、４：96で、シリカ28%で、平衡状態図のファイアヤライトの領域にあり、還元反応は僅かに進行していたと推察される。

滓化成分の指標となる造滓成分は40%で、砂鉄原料に含まれていたと考えられる二酸化チタン0.27%で、バナジウム0.002%、銅0.001%と少ない。酸化マンガン（MnO）含有量が、砂鉄系に含まれる値よりも、10～20倍高い。

本資料の製造工程の位置づけとして、図40～42に分類を示す。本資料は、図40・41において、鉱石系製錬滓または砂鉄系鍛冶滓に属している。図42において、鉱石系製錬滓に属している。顕微鏡組織では、ファイヤライトが主成分であり、酸化マンガン含有量が高いので、鉱石系製錬滓と推察される。

以上の結果を総合すると、本資料は、①製錬滓で、②鉄源には鉄鉱石を使用した可能性が高い、と推定される。

〈資料 No. 6〉鉄滓（鉄鉱石系製錬滓）、着磁力：稍強、MC：無

外観：外観写真を42頁に示す。総重量は193.0g、長さ78mm×幅50mm×厚さ45mm。割欠面は２つ。全体に滑らかな凹凸があり、赤橙色の水酸化鉄が凹部に詰まっている。下部には径８mm程度の白色鉱物が埋没している。裏は平らで細かな発泡痕がある。試料採取は付着土砂や埋没砂礫を除去して行う。

顕微鏡組織：ミクロ組織写真を43頁に示す。写真No. 6－1の全面にやや尖った多角形のファイヤライトと僅かにウスタイトが観察される。写真No. 6－2には、No. 6－1の多角形が崩れた短冊状のファイヤライトが観察される。製錬滓にみられる組織である。

X線回析：回析結果を表13に示す。ファイヤライト、ウスタイトとマグネタイトが同定された。

化学成分：化学成分分析の結果を表11に示す。全鉄43%に対して、ウスタイトは51%、ヘマタイトは４%で、Fe_2O_3と FeO の比率は、８：92で、シリカ30%で、平衡状態図のファイヤライトの領域にあり、還元反応は僅かに進行していたと推察される。

滓化成分の指標となる造滓成分は42%で、砂鉄原料に含まれていたと考えられる二酸化チタン0.39%で、バナジウム0.006%、銅0.005%と少ない。酸化マンガン（MnO）含有量が、砂鉄系に含まれる値よりも、約10倍高い。

本資料の製造工程の位置づけとして、図40～42に分類を示す。本資料は、図40・41において、鉱石系製錬滓または砂鉄系鍛冶滓に属している。図42において、鉱石系製錬滓に属している。顕微鏡組織ではファイヤライトが主成分であり、酸化マンガン含有量が高いので、鉱石系製錬滓と推察される。

以上の結果を総合すると、本資料は、①製錬滓で、②鉄源には鉄鉱石を使用した可能性が高い、と推定される。

まとめ

各資料の調査結果および考察結果を以上に述べた。それらの結果を以下にまとめる。

調査資料は、鞴羽口片と鉄滓から構成されている。

（１）資料No. 1の羽口片は、シリカ（SiO_2）、アルミナ（Al_2O_3）を主成分（87.2%）とするムライト（Mullite：$3Al_2O_3 \cdot 2SiO_2$）系耐火材で、やや上質胎土と推察される。耐火度は、測定では1,405℃と計算では1,420℃と得られ、通常製鉄用羽口材として使用には十分耐えた羽口胎土と推定される。

（２）資料No. 2は、金属鉄が完全に錆化したオキシ水酸化鉄（錆化鉄）と鍛冶滓が共存している。鉄源は、酸化マンガン含有量が高いので、鉄鉱石を使用した可能性が高い、と推定される。

（３）資料No. 3は、精錬鍛冶滓で、鉄源には鉄鉱石を使用した可能性が高い、と推定される。

（４）資料No. 4は、造滓成分が93%で、炉壁付着滓、と推定される。

（５）資料No. 5と資料No. 6は、製錬滓で、酸化マンガン含有量が高いので、鉄源には鉄鉱石を使用した可能性が高い、と推定される。

【付記】試料NO. 4の弥生時代後期の「炉壁付着滓」については、溝からの出土という点と時期的な問題を鑑みて、慎重に検討することとしたい。

（岩崎）

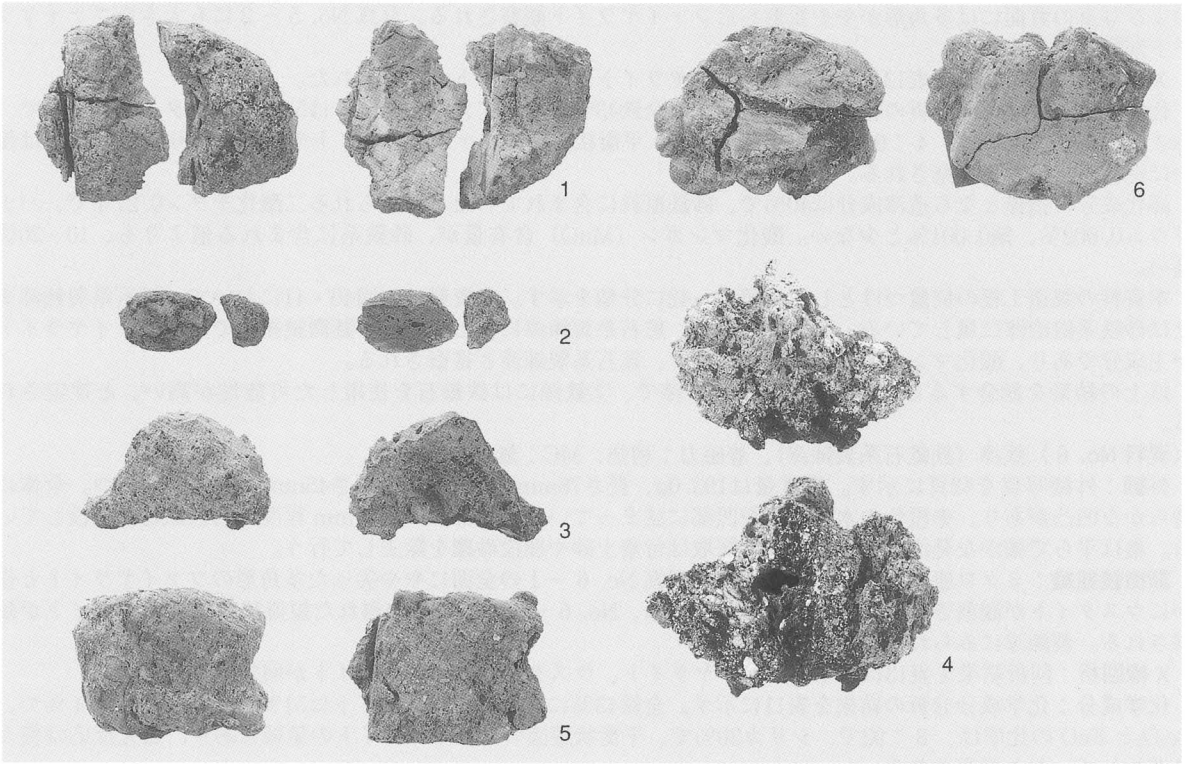


図39　出土鉄滓外観写真（番号は資料番号と一致する）

• 製鉄工程上の鉄滓の分類

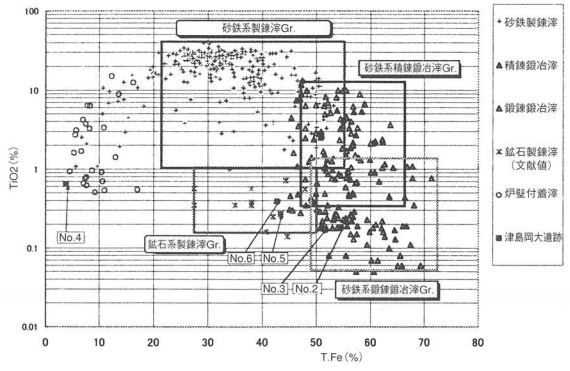


図40　出土鉄滓類の全鉄量と二酸化チタンの分布図

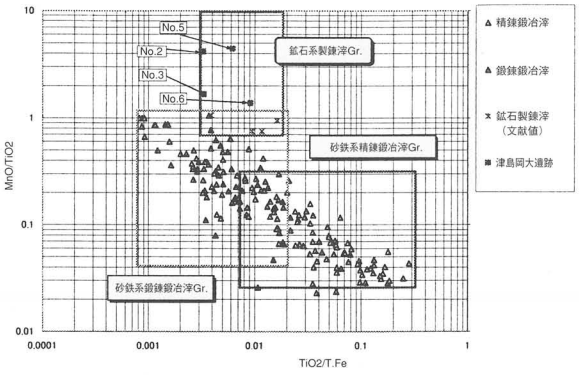


図42　砂鉄系鍛冶滓と鉱石系製錬滓の分類

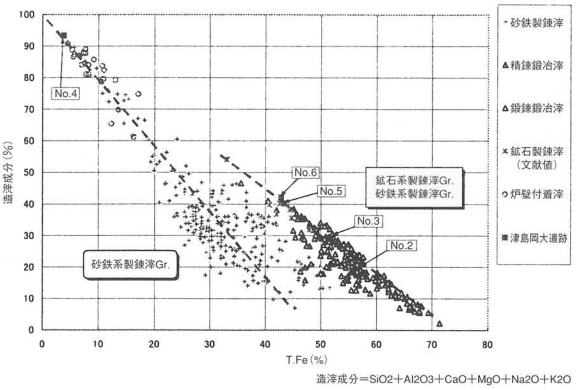


図41　製錬滓と鍛冶滓の分類

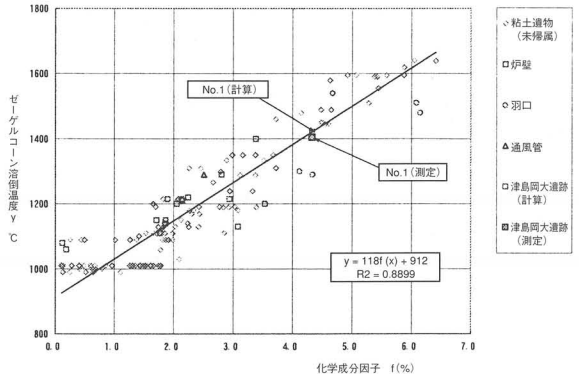
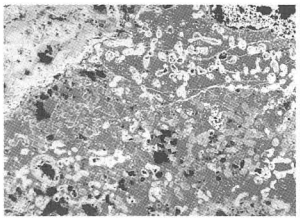
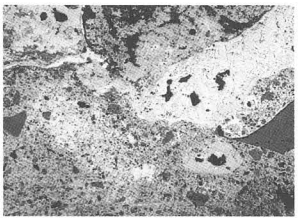
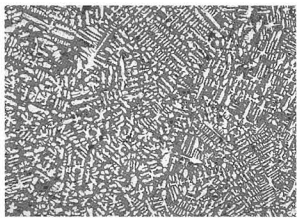
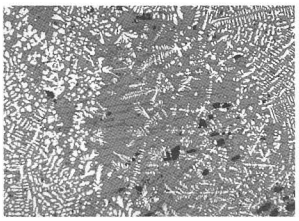


図43　粘土遺物の化学成分と耐火度との関係

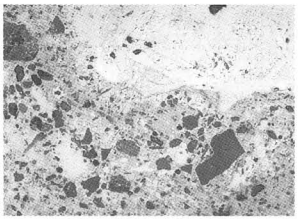

×100　1cm：100 μm

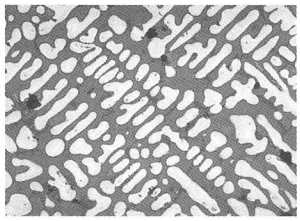

×100　1cm：100 μm

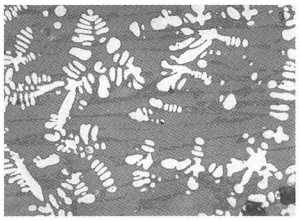

×100　1cm：100 μm

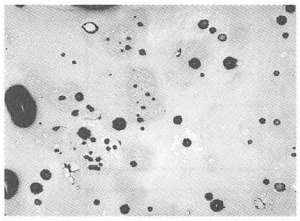

×100　1cm：100 μm

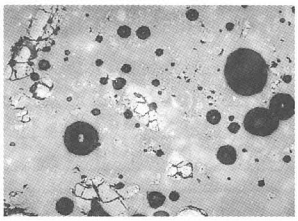
×400　1cm：25 μm
資料 No. 2-1

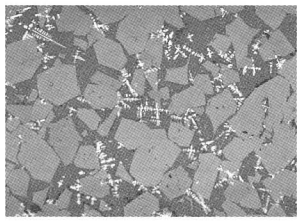

×400　1cm：25 μm
資料 No. 2-2

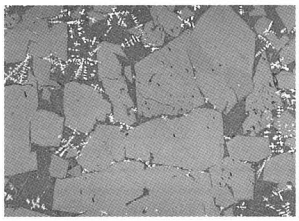

×400　1cm：25 μm
資料 No. 3-1

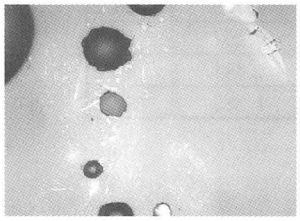

×400　1cm：25 μm
資料 No. 3-2

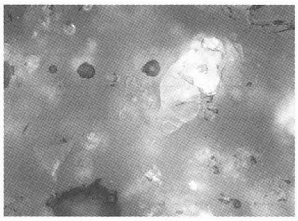

×100　1cm：100 μm

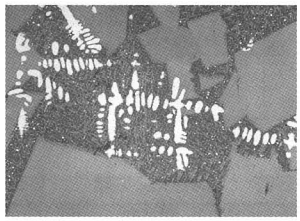

×100　1cm：100 μm

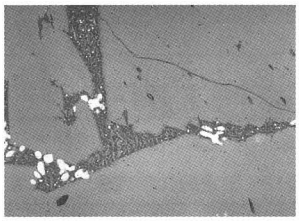

×100　1cm：100 μm

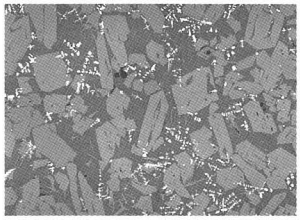

×100　1cm：100 μm

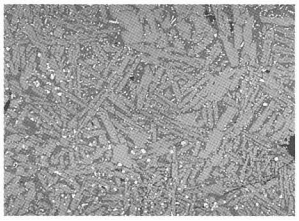

×400　1cm：25 μm
資料 No. 4-1

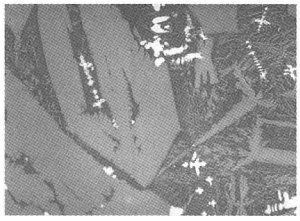

×400　1cm：25 μm
資料 No. 4-2


×400　1cm：25 μm
資料 No. 5-1


×400　1cm：25 μm
資料 No. 5-2


×100　1cm：100 μm


×100　1cm：100 μm


×400　1cm：25 μm
資料 No. 6-1

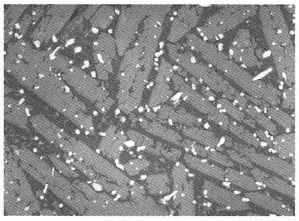

×400　1cm：25 μm
資料 No. 6-2

図44　ミクロ組織写真

表10　調査資料と調査項目（津島岡大遺跡出土資料）

資料No.	出土地点・層・遺構	資料種別	重量g	着磁力	MC反応	外観写真	化学成分	組織写真	X線回析	耐火度
1	津島岡大10次　7層上半	鞴羽口	81.6	無	無	○	○			○
2	津島岡大10次　竪穴住居２ 古墳時代後期	鉄滓	19.5	強	無	○	○	○	○	
3	津島岡大10次　7層下半 図102－M４	鉄滓	84.7	強	無	○	○	○	○	
4	津島岡大19次　10層　溝13 弥生時代後期	製錬滓	365	弱	無	○	○	○	○	
5	津島岡大19次　9層　溝46・49 古墳時代後期	製錬滓	182.8	稍弱	無	○	○	○	○	
6	津島岡大19次　9層　溝47 古墳時代後期	製錬滓	193.0	稍強	無	○	○	○	○	

註(1)　資料番号・記号、資料種別等は、埋蔵文化財調査研究センターの記載資料による。
(2)　○は、観察・測定調査の実施項目を示す。
(3)　MC反応とは、メタルチェッカー（金属探知機）による残存金属の有無を示す。
〈附記〉
No. 1　図102－１
2　図102－M５
3　図102－M４
4　図104、図版21－１
5　表３中「椀形滓」
6　表３中「製線法か？」

表11　津島岡大遺跡出土鉄滓の化学成分分析結果（%）

資料No.	T. Fe	M. Fe	FeO	Fe_2O_3	SiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	Na_2O	K_2O	比率（%）	
											Fe_2O_3	FeO
2	54.5	0.19	16.6	59.2	12.0	2.11	1.67	0.12	0.12	0.24	78.1	21.9
3	51.7	0.17	49.0	19.2	13.7	2.16	11.0	1.27	0.18	0.85	28.2	71.8
4	3.77	0.19	0.64	4.4	72.6	13.3	1.95	1.25	1.08	3.16	87.3	12.7
5	43.4	0.22	53.6	2.2	28.2	4.97	4.29	1.55	0.38	0.82	3.9	96.1
6	42.8	0.11	51.1	4.2	30.0	4.30	5.79	0.80	0.22	1.02	7.7	92.3

資料No.	TiO_2	MnO	P_2O_5	Co	C. W.	C	V	Cu	TiO_2/T. Fe	MnO/TiO_2	造滓成分
2	0.18	0.30	0.181	0.014	4.66	0.77	0.002	0.001	0.003	1.667	16.3
3	0.17	0.71	0.714	0.030	0.89	0.03	0.001	0.001	0.003	4.176	29.2
4	0.65	0.17	0.192	0.001	0.93	0.02	0.005	0.001	0.172	0.262	93.3
5	0.27	1.20	0.205	0.010	1.25	0.03	0.002	0.004	0.006	4.444	40.2
6	0.39	0.54	0.203	0.021	1.02	0.03	0.006	0.005	0.009	1.385	42.1

C. W.＝化合水、造滓成分＝SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋Na_2O＋K_2O

表12　胎土の化学成分分析結果（%）と耐火度測定結果（℃）

No.	T. Fe	FeO	Fe_2O_3	C. W.	SiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO
1	2.34	0.46	2.83	2.40	72.0	15.2	0.71	0.46

No.	TiO_2	MnO	Na_2O	K_2O	C	Igloss	耐火度 y（℃）		
							f(x)	y(計算)	y(測定)
1	0.67	0.04	1.15	1.97	0.17	2.70	4.33	1,420	1,405

Igloss：Ignition loss（1000℃加熱減量）

y（耐火度（ゼーゲルコーン溶倒温度y）試験法：JIS R 2204（耐火物及び耐火物原料の耐火度試験方法）およびJIS R 8101（耐火度試験用標準コーン）に準拠して測定。

y＝118fx＋912　　（粘土遺物未帰属）（化学成分因子 fx＜7.0）

ここで、

fx＝(25.8Al_2O_3＋5.2SiO_2)/(146MgO＋448MnO＋78.6CaO＋12.5T. Fe＋10.4TiO_2)

表13　鉄滓資料のX線回析鉱物・顕微鏡組織と製造工程の分類

資料No.	資料の種別	X線回析鉱物	製造工程の分類	出土遺構記号
2	鉄滓	M、Go、W、H	鍛冶滓（含鉄鋳化物）	津島岡大10次　竪穴住居２
3	鉄滓	W、M	鉄鉱石系精錬鍛冶滓	津島岡大10次　7層下半　図102－M４
4	製錬滓	S	炉壁付着滓	津島岡大19次　10層　溝13
5	製錬滓	F、W	鉄鉱石系製錬滓	津島岡大19次　9層　溝46・49
6	製錬滓	F、W、M	鉄鉱石系製錬滓	津島岡大19次　9層　溝47

鉱物記号：W（ウスタイト：Wustite-FeO）、M（マグネタイト：Magnetite-Fe_3O_4）、
H（ヘマタイト：Hematite-Fe_2O_3）、Go（ゲーサイト：Goethite-FeOOH）、
F（ファイヤライト：Fayalite-Fe_2SiO_4）、S（シリカ：Quartz-SiO_2）

(2)　棒火矢の火薬成分分析

津島岡大遺跡第12次調査で出土した近世の棒火矢[1]について使用された火薬の成分分析を試みた。事前に火薬専門機関等数カ所に問い合わせたところ、通常江戸時代のものであれば「黒色火薬」であろうとの予測を得られた。黒色火薬の成分は硝酸カリウム・硫黄・木炭の３種であり、分析の結果、カリウムと硫黄が検出されれば、黒色火薬であると確定できるということである。

そこで2003年７月に、理学部地球科学科松田敏彦助教授に実物を見て頂いたうえで、サンプルを採取し、Ｘ線回析装置による分析を実施して頂いた。

その結果、期待された成分は得られなかった。その要因として、発掘後長時間が経過していること、保存処理を経ていることことから、カリウム・硫黄ともにすでに溶け出してしまったものと考えられる。出土直後に周辺土壌も一緒に取り上げたうえで、分析することができれば、あるいは良い結果が得られたものと思われる。

今回の成分分析では期待された成果ではなかったものの、今後の調査・研究に活用される貴重な点が得られた。（岩崎）

註（１）山本悦世・岩崎志保2003『津島岡大遺跡11』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第16冊

(3)　津島岡大遺跡第28次調査土壌分析

津島岡大遺跡第28次調査（自然科学系総合研究棟新営予定地）[1]において、主に「黒色土」層の成因を探ることを目的として、土壌の成分分析を実施した。実施にあたっては白石純氏（岡山理科大学自然科学研究所）の御協力・御教示を得た。

分析試料：津島岡大遺跡第28次調査共同溝地点の北壁及び東壁より、縄文時代後期～近世まで９枚の土層について、各５点ずつ土壌のサンプリングを行った。

分析結果：表14に土壌の分析値を示している。各土層からは、合計５点の土壌をサンプリングし、その平均値を表に掲載した。なお、東壁土壌もほぼ同じ結果となったため、ここでは省略している。

①各土層で比較すると、10元素のうちFe元素にのみ差がみられた。

②Fe量は６層（明黄褐色砂質層）に最も多く含まれ、ついで11ａ層（黒褐色粘質＝「黒色土」）に多く含まれていた。このことから、Feの量が土層の色調に反映していることは、十分予測される。また、その他の元素には、顕著な差がみられず、分析値からはこれ以上の検討はできない。

③土壌のpH値を調べた。すると、５層までの上層では微アルカリであったが、６・11・12層では中性で、13層では微アルカリであった。

まとめ：この結果を受けて、以下の２点についての検討を行った。

表14　土壌サンプリング分析値（%）

層位	土　　層	PH値	時期	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P
3 b	黄褐色砂質土	7.3	近世	62.51	1.02	19.90	7.87	0.23	2.16	1.41	2.51	2.00	0.13
4 a	黄褐色砂質土	7.4	中世	63.24	1.03	19.63	7.10	0.22	2.18	1.42	2.82	1.98	0.14
4 b	黄褐色砂質土	7.5	中世	66.14	0.92	18.33	5.76	0.13	2.01	1.55	2.58	2.18	0.18
4 c	淡黄灰色粘質土	7.5	中世	64.29	1.12	19.53	6.23	0.11	2.20	1.37	2.87	1.95	0.16
5	淡黄灰色粘質土	7.3	古代～中世	63.91	1.07	19.70	6.30	0.13	2.08	1.29	3.18	1.96	0.15
6	明黄褐色砂質土	7.0	古墳	59.69	0.95	19.02	12.19	0.19	2.08	1.19	2.38	1.90	0.13
11 a	黒褐色粘質土	6.9	弥生前期	61.69	0.97	19.26	9.50	0.24	2.06	1.48	2.31	2.04	0.18
12 a	淡黄褐色砂質土	6.9	縄文後期	62.65	0.99	19.57	7.96	0.23	2.13	1.23	2.81	1.99	0.22
13 a	淡青灰色粘質土	7.2	縄文後期	64.46	0.95	19.46	6.26	0.11	2.10	1.40	2.78	2.08	0.20

１．鉄分が多いということは、上層から沈殿してきたものが、黒色土で止まることにより、その上層に多く堆積しているものと考えられる。

２．pH値について、６・11・12層が中性であることの原因は不明である。しかし黒色土の周辺の土層のみに認められることから、黒色土の成因を解明する手がかりになる可能性がある。

今回の分析の結果、依然として、不明な点は多いものの、黒色土の成因を考えるひとつの手がかりとはなった。今後も様々なアプローチを試みることとしたい。（岩﨑）

註（１）忽那敬三2004「津島岡大遺跡第28次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2002』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

３．調査資料の保存処理

木製品の保存処理作業

PEG保存処理　2002年度11月より開始している第６期保存処理を、今年度も継続して実施した。経過は表15の通りである。PEG濃度を95％から100％へ向けて上昇させている途上で、次年度に継続となった。

表15　保存処理工程表

処理回数	年月日	濃　　度
第６期処理	2002/11/12	40％で開始
	2003/４/18	50％へ
	2003/５/29	60％へ
	2003/８/25	70％へ
	2003/９/30	80％へ
	2003/11/10	90％へ
	2004/２/４	95％へ
	2004/３/31	100％へ上昇中

今回は津島岡大遺跡第19次・22次調査および、鹿田遺跡第７次調査出土木器の処理を行っている。なお今年度も保存処理の外部委託は行っていない。（岩﨑）

第２節　調査成果の公開・活用

2003年度は、鹿田遺跡第14次調査において現地説明会ならびに地域の公民館講座の中での説明会を実施したほか、鹿田キャンパスと津島キャンパス両地域において展示会を開催した。また、博物館学実習あるいは中学生の職場体験の受け入れなど、学校教育現場との連携も積極的に行い、調査成果の公開・活用に対して、様々な形の取り組みを行った。

１．公開・展示

(1)　鹿田遺跡第14次調査現地説明会の実施

発掘調査における現地説明会は、学内および一般向けに１度開催することが常であったが、今回は、地域の公民館講座に関わる見学依頼があったため、２回の説明会を行うこととなった。

図45　鹿田遺跡第14次調査現地説明会風景

①　**学内・一般向けの説明会**：10月18日（土）

鹿田遺跡第14次調査では、７月から発掘調査を開始していたが、終盤にさしかかった10月に、本地点の調査成果として中心になる近世～古代末の調査がほぼ終了した段階であったことから、説明会を行うこととした。日程は、10月18日（土）の14時～16時である。調査地点が、新病棟の東隣であったことから、外部からの見学者に加えて、入院患者や見舞い客など病院関係の方々の姿も少なからず見受けられた（図45）。見学者は106名となり、２組に分かれての見学となった。

調査現場では、近世の導水施設が設置されたと考えられる溜め池状遺構や中世あるいは古代末に遡る井戸などが注目された。また、出土した遺物に関しては、新病棟内において開催した鹿田キャンパス特別展示の中で、その説明を行った。

②　**公民館講座に伴う説明会**：10月５日（土）『岡山市立御南公民館むかし探検隊』

地域の歴史を学ぶというテーマで一連の講座を開催されている御南公民館から、鹿田遺跡の内容、特に「鹿田庄」に関しての講演と遺跡見学の依頼があった。それを受けて日程を調整した結果、10月５日（土）の午前中に同遺跡の説明と歴史的位置づけに関する講演を、続いて午後に遺跡見学を行った。それに加えて、これまで出土した遺物の中で、特色あるものに直接触れられる簡単な展示を提供し好評を博した。　（山本）

(2)　鹿田キャンパス特別展示

鹿田遺跡は、岡山大学が埋蔵文化財調査室（現埋蔵文化財調査研究センターの前身）を設置した1983年から、本格的な発掘調査が開始されており、2003年は鹿田遺跡発掘20周年の年にあたる。また、定期的に開催している展示会は、津島キャンパスでは６回を数えるのに対して、鹿田キャンパスでの開催は1990年の第２回目にあたる１回だけで、以来行われていなかった。こうした状況から、現地説明会を契機に、これまでの鹿田遺跡の調査成果を概観できる「鹿田遺跡発掘20周年特別展示」を併せて計画することとなった。

展示会場は、新たに建設された南病棟エレベーター前のフリースペースを利用し、期間は2003年10月18日（土）～24日（金）の７日間である。会場の利用などには医学部附属病院の協力を得た。初日の18日は第14次調査の現地説明会にあわせた展示であり、順次、調査研究員が解説を行った（図46）。その内容は、①鹿田遺跡の位置と概要、②鹿田遺跡の弥生～古墳時代、③中世の鹿田、④近世の鹿田、の４コーナーに分けて遺構の写真や主だった遺物の展示を行うものとした。遺物に触れてもらうほか、遺構では井戸の土層はぎ取りや模型も加えることで、全体に、実物を実感してもらうことを主眼においた。

当日は、200名を超す見学者があった。初日の開催時間は14：00～16：00の予定であったが、昼過ぎには、通りすがりの方を含め、次々と見学者が会場に来られ、また、終了後も絶えず数名の方が残る状態であったため、実際は13：00～17：00が開催時間となった。見学者の中には、現地説明会以上に病院患者さんの姿が目につき、車いすを利用されている方やパジャマ姿の小学生などが興味深げに訪れるのが印象的であった。

図46　鹿田キャンパス特別展示会風景

19日は休日であったが、20日からは職員の勤務時間にあわせて、８：30～５：00にパネル展示を継続した。平日は発掘調査を行って

いるため、調査研究員は展示に立ち会うことができず、残念ながら展示ケースの無い状態にある遺物の展示は、保管上の問題から不可能と判断せざるを得なかった。遺物に関してはパネルを用いることで、少しでもそれを補うこととした。会場には解説パンフレットを１日に50部程度を置いたが、毎日全て無くなっており、その数から期間中に370名以上の見学者があったことが予想される。

今回はいわゆる「出前展示」とでもいうものであった。こうした試みを通常の生活からは隔離されてしまう多くの方々を抱える病院という場所で行うことができたことは、今までの展示とはまた違う意味で有意義な展示であったと言えよう。（山本）

(3)　第７回岡山大学キャンパス発掘成果展

概要：2002年度以降、年１回の定例となっている岡山大学キャンパス発掘成果展を開催した。第７回目である。本年度は、発掘調査の実施と報告書刊行が重複した状況にあり、それに加えて、鹿田キャンパスでの展示も企画されたため、限られたスタッフと時間の中で、より効果的な展示方法を模索することが望まれた。その結果、開催期間は、本学附属図書館による「池田家文庫貴重資料展」の期間を考え合わせて、2003年10月27日（月）～11月１日（土）、会場は埋蔵文化財調査研究センターの収蔵庫２階展示室周辺となり、昨年度に比べると、期間は１/２に短縮し、会場スペースも大幅に限定した状態で行った。見学者は延べ109名であった。

内容と成果：テーマは『遺跡の土層を切る！！』で、今年の特色は土層に焦点をあてたことにある。発掘調査の際に、「どのような観察から遺構をとらえるのか」、あるいは「土層と遺物の密接な関係を伝えること」に主眼を置いた。また、発掘現場の臨場感を出す展示をめざし、現場で撮影したビデオでは、現場の音声をそのまま使用したほか、津島岡大遺跡・鹿田遺跡で採集した土層のはぎ取りを全体に巡らせるなど、随所に工夫を凝らした。土層のはぎ取りは、遺跡や時代によって土質が異なることがわかりやすいように並べ、土層と遺物の時期を対応させた展示を、現代から縄文時代まで各時期ごとにレベルを考えながら行った。さらに、遺構に関しては、井戸の断面や炭化米集中土坑の平面でのはぎ取りを展示し、「その掘り方を考えてもらう」という企画を一つの目玉に据えた。その他に、チャレンジコーナーとして、昨年度の展示会で好評を博した「石器を探してみよう」のコーナーを再度設けたほか、新たに「土器の時期を当ててみよう」の企画を追加した。

こうした試みが一定の成果を上げたことは、アンケート結果から窺うことができる。展示の中で印象に残った

アンケート数（回収率）	印象に残ったもの・おもしろかった企画		やってみたいこと	
49（45%）	土層（と遺物）	30（61%）	発掘体験	21（43%）
	石器を探そう	17（35%）	土器の接合	17（35%）
	土器を分類しよう	8（16%）	その他	計14（各項3～6%）
	展示方法	11（22%）		
	その他	計20（各項1～4%）		

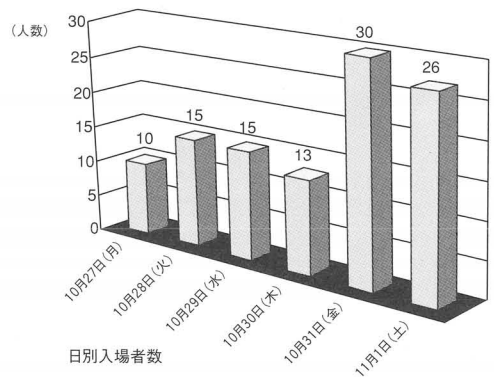


図47　展示会日別入場者数

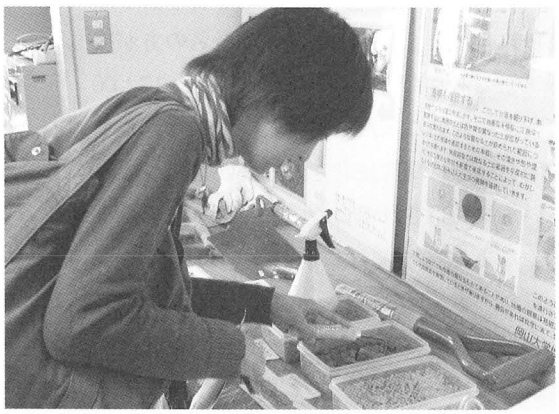


図48　展示会見学風景

図49　津島キャンパス展示風景

ものあるいはおもしろかった企画について、土層に関連することをあげた人が最も多く、回答者の61％にのぼっている。第２番目は、昨年人気の高かった「石器を探そう」が35％と根強い人気が示された。遺構のはぎ取りなどに関する展示方法をあげる人も22％あり、目的としたテーマあるいは展示方法の工夫が、見学者に評価されたと考えられる。

一方、実験的に行った７時までの夜間開催に関しては、効果ははかばかしいものではなかった。時期的に日没時間との関係で、５時以降は暗くなってしまう点なども問題であったのかもしれない。

広報活動：広報活動は昨年と同様であるが、その中で、本センターの展示会や発掘調査現地説明会の参加者に対する案内が効果的であることも、見学者におけるリピーター比率の高さから窺われる。

課題と展望：見学者合計109名という数字は、昨年の252名を大きく下回る。昨年の１／２に到達しない数字である。減少の要因としては、期間が10日間から５日間と短かったことや、その期間内に日曜日を含まなかったことが大きいことは、日曜日１日のみで全体の２割強となる60名の来場者を得た昨年度の実績から容易に導き出される。さらに、今年度の状況を確認してみると、月曜日～木曜日の平日は10～15名程度で推移し、終了間近となる金曜日に30名、土曜日に26名を数えた（図47）。昨年度と比較すると、平日の状況は共通しており、やはり休日開催が効果的であることが再確認されることとなり、今年度の数値は期間からすると妥当といえるのかもしれない。

アンケートの回収率を見ると、今年度は49枚で回収率45％であり、昨年の75％と大きな違いを示す。回収率が激減した背景には、見学者の満足度に昨年度との違いが現れている可能性があるのではなかろうか。体験型を全面に出した昨年の展示が強く支持された結果といえるかもしれない。しかし、「楽しかったです」「たびたび展示会を開いてください」「来年も楽しみにしています」「こんな展示もありなんだなというのがたくさんありました。」「いろいろおもしろい展示があり楽しめました。」という声も得られており、展示方法に一定の評価があったことも確かである。昨年度に比べると、体験の度合いは減少したが、はぎ取り土層という実物本意の展示からは、発掘現場の雰囲気を伝えることができたのではなかろうか。

また、「やってみたいことは？」の問いでは、発掘体験と土器接合が二分する状況を示した。両方をあげた人は多くはないことから、体験希望者に関しては、現場指向と室内指向に分かれることが浮き彫りとなったことも、アンケートから読み取れた点である。

今回の見学者に占めるリピーター率は39％にのぼっており、継続的な展示会への期待の大きさを示している。今後も、こうした様々なデータを活用しながら、いろいろな実験的展示方法に取り組み、安易な体験型にとどま

らず、効果的な展示方法を模索しつつ、魅力的な展示会を企画・実施することが重要であろう。業務全体の中で、それぞれのバランスを考慮しながら、より多くの期待に応えられるような工夫を考えつつ、今後も内容の濃い情報発信を継続していきたい。（山本）

(4)　その他の展示・開放

前述の津島・鹿田両キャンパスにおける展示会、あるいは本センター建物内における常設展示の他に、学内においては、附属図書館内でのパネル展示、そして、岡山大学考古資料展示室における常設展示にも展示コーナーを設けている。

①　**附属図書館内での展示**：11月４日～11月28日に展示

例年、年に１回パネル展示を行っている。今回は、津島キャンパスでの展示会が直前に予定されたため、第７回展示の内容と関連した「発掘調査と地層の観察」という題を設定し、発掘調査では、どのような視点で遺構を確認し、どのような方法で調査するのかを、地層との関係を示しながら解説した。

②　**岡山大学考古資料展示室**

文学部考古学研究室が保管する資料を中心に、本センターの資料を含めた展示を行っている。常設展示ではあるが、見学に際しては希望を受付けた上で随時対応している。大学関係者から一般の方々、さらには各地の高校・大学の生徒・学生が団体で訪れる場合も多い。（山本）

(5)　報道機関への公開

新聞紙面への掲載としては、津島岡大遺跡第12次調査（附属図書館）で出土した棒火矢、鹿田遺跡第14次調査（医学部附属病院病棟）で確認した近世の溜め池状遺構、鹿田遺跡第７次調査（医学部基礎棟）で出土した猿形木製品があげられる。

棒火矢は幕末頃の砲術に使用する武器であるが、全国的にも、これほど完形に近い状態で出土した例は無く、2002年度に山陽新聞で取り上げられ、その後、2003年度には読売新聞でも紹介された。鹿田遺跡の溜め池状遺構は、現地説明会の前に山陽新聞で報告された。鹿田遺跡第７次調査の猿形木製品は、かつてその希少価値から新聞報道があったが、類似資料から使用方法に関する分析が進んだことを受けて山陽新聞が取り上げた。（山本）

２．資料・施設等の利活用

(1)　教育機関への支援（授業等の受け入れ）

①　**博物館学実習**：８月１日～８日

例年通り、岡山大学文学部が実施している学芸員資格取得のための授業（博物館学実習）の受け入れを行った。期間は、８月１日～８月８日のなかで６日間である。全体を３グループに分けて、それぞれ２日間の受講日程を組んだ。内容は、埋蔵文化財の取り扱い方に関する知識を体験できるように設定している。幸いに、同時期が鹿田遺跡第14次調査の発掘調査中であったことから、第１日目は発掘調査、第２日目は本センター施設内で出土遺物の洗浄・注記・接合作業を実施した。さらに、展示コーナーを利用して、大学内に広がる構内遺跡の概要説明とともに遺物の展示状況を見学し、埋蔵文化財が出土してから一般に公開されるまでの一連の作業工程を組み込んだ。その他に、木器の保存処理作業の体験も一部で行った。

②　**中学生の職場体験**：11月19日～20日・21日、岡山市立高松中学校・竜操中学校、生徒計５名

岡山市内の中学校から、「中学生の職場体験」の受け入れ依頼が２件あった。１件は昨年にも依頼された岡山市立高松中学校で、もう１件は、今年度新たに申し入れのあった岡山市立竜操中学校である。担当教諭との打ち合わせならびに生徒の下見を経た後、職場体験を実施した。作業内容にあたっては、竜操中学校の教諭から、「大学研究者の仕事も伝えて欲しい。」との希望があったため、通常、よく行われている埋蔵文化財資料に関する実務的な体験だけではなく、考古学研究室の協力を得て、研究活動面の実態に触れてもらうことを新たに盛り込んだ。

期間は、岡山市立高松中学校の中学２年生３名が11月19日（水）～20日（木）、岡山市立竜操中学校の中学２年生２名が11月19日（水）～21日（金）である。内容は、第１日目に本センターの施設見学・室内整理作業、第２日目に考古学概論受講・文学部の考古学研究室見学・考古資料展示室見学等、そして午後に鹿田遺跡第14次調査の発掘体験を予定した。しかし、第２日目の天候が悪い予報が出たため、急遽予定を組み替えて以下のような内容となった。

第１日目午前：本センターの施設見学と概要説明後、室内整理作業を実施。図書整理、施設内の整理・整頓
　　午後：鹿田遺跡第14次調査の発掘（残念ながら、降雨のため短時間の体験となった。）。土器注記
第２日目午前：考古学概論受講、文学部考古学研究室見学、考古資料展示室見学・掃除・遺物の展示作業体験、
　　午後：出土土器の洗浄・接合・注記作業。
第３日目午前（竜操中学生のみ）：施設内整理、レポート作成

③　**中学生の総合学習**

・岡山市立京山中学校生徒見学

(2)　調査・研究への支援

①　**資料提供**

〈一般〉・縄文時代後期土器（津島岡大遺跡第15・17次調査）：２件
・植物遺体－種子（津島岡大遺跡）：１件
・磨り石・敲き石（津島岡大遺跡・鹿田遺跡）：１件
・飯蛸壺（鹿田遺跡第５次調査）：１件
・年代測定資料（津島岡大遺跡第３・５・15次調査、鹿田遺跡第７次調査）：１件
津島岡大３次－弥生早期土器・堅果類、同５次－縄文後期土器・堅果類
同15次－縄文後期土器・弥生早期土器、両時期の堅果類、鹿田７次－古墳初頭土器

〈学生〉・縄文時代後期土器（津島岡大遺跡第17次調査）：１件－岡山大学考古学修士課程
・猿形木製品（鹿田遺跡第７次調査）：１件－名古屋大学博士課程

②　**図書の外部貸し出し**：21件（岡山大学文学部学生他）

③　**保有機器の外部利用**：鉄製品の保存処理１件（岡山大学文学部考古学研究室）

(3)　資料の貸し出し

①　**出版物への資料提供**

・考古資料大観（小学館）：鹿田遺跡第１次調査－古墳時代初頭の木製短甲・古墳時代後期の土器一括
・季刊考古学84号（雄山閣）：鹿田遺跡第１次調査－古墳時代初頭の甕

② 他機関の展示・公開支援

〈写真〉・大阪府立弥生文化博物館：津島岡大遺跡第3次調査－弥生時代早期・前期土器
・岡山県立博物館：鹿田遺跡第5次調査－鎌倉時代井戸
・岡山県古代吉備文化財センター：鹿田遺跡・津島岡大遺跡

〈遺物〉・大阪府立弥生文化博物館：津島岡大遺跡第3次調査－弥生時代早期・前期土器
・岡山県立博物館：鹿田遺跡第5次調査－鎌倉時代井戸出土遺物（牛頭骨・土師質土器皿）
〃　井戸枠模型

（山本）

第3節　2003年度調査研究員の個別研究活動

1．科学研究費採択状況

山本悦世：平成15年度科学研究費（基盤研究C）「縄文時代から弥生時代における景観比較と植物遺体の標本化」：研究代表者

岩崎志保：平成15年度科学研究費（若手研究B）「東周時代墓葬の比較考古学的研究」：研究代表者
平成15年度科学研究費（基盤研究C）「縄文時代から弥生時代における景観比較と植物遺体の標本化」（研究代表者　山本悦世）：研究分担者

横田美香：平成15年度科学研究費（基盤研究C）「縄文時代から弥生時代における景観比較と植物遺体の標本化」（研究代表者　山本悦世）：研究分担者

2．論文・資料報告

山本悦世：『津島岡大遺跡14』（編集）
「津島岡大遺跡における生業変遷－貯蔵穴と水田の実態」『津島岡大遺跡14』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
『遺跡出土の種子集成図録』（共著）平成15年度科学研究費（基盤研究C）「縄文時代から弥生時代における景観比較と植物遺体の標本化」の報告の一部

岩崎志保：『遺跡出土の種子集成図録』（共著）平成15年度科学研究費（基盤研究C）「縄文時代から弥生時代における景観比較と植物遺体の標本化」の報告の一部

野崎貴博：「吉備地域における円筒埴輪製作技法の伝播と受容」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会

忽那敬三：「石器組成からみた縄文時代後期集落の空間利用」『津島岡大遺跡14』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
「『子ども観』の系譜－子ども墓の比較を通して－」『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会50周年記念論文集

高田浩司：『津島岡大遺跡13』（編集）

「津島岡大遺跡における縄文時代後期の炉」『津島岡大遺跡13』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

『弥生・古墳時代の手工業生産と集団関係』（岡山大学大学院文化科学研究科提出学位論文）

光本　順：『認知考古学とは何か』青木書店（共著、執筆部分「世界像としての古墳被葬者の身体－死者の身体をめぐる行為と認知－」）

「行為と身体の考古学における方法と実践（素描）－弥生時代から古墳時代を事例として－」『メタ・アーケオロジー』第４号

「身体の考古学と儀礼研究」『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会50周年記念論文集

「近代的身体と考古学」『シンポジウム近現代考古学の射程』

３．研究発表等

山本悦世：「生業から見た縄文から弥生への変遷－ドングリ貯蔵穴から水田－」東京大学公開セミナー（９月27日）

「埋蔵文化財から見る鹿田荘」『岡山市立御南公民館むかし探検隊』（10月５日）

「鹿田遺跡の調査成果」考古学研究会例会発表（11月８日）

岩崎志保：「呉墓と呉系遺物からみた春秋戦国時代の社会」日本中国考古学会九州支部例会発表（４月12日）

「埋蔵文化財から見る鹿田荘」『岡山市立御南公民館むかし探検隊』（10月５日）

野崎貴博：「吉備地域における円筒埴輪製作技法の伝播と受容」第52回埋蔵文化財研究集会（８月17日）

忽那敬三：「発掘の基本と実際」加古川市民生涯大学講師

光本　順：「吉備の陶棺」倉敷埋蔵文化財センター秋の考古学講座（11月23日）

「岡山地域の分銅形土製品における身体表現の二相－型式学的検討と比較から－」人類史研究会第15回大会（３月21日）

４．資料収集・実態調査

山本悦世：縄文時代中期末～後期土器の実見（岡山県）

縄文・弥生遺跡の実態調査（石川県、富山県、神奈川県）

四国における古代・中世土器の調査（愛媛県）

岩崎志保：縄文時代中期末～後期土器の実見（岡山県）

縄文・弥生遺跡の実態調査（石川県、富山県）

野崎貴博：中・後期古墳の踏査（愛媛県）

高田浩司：古墳の踏査、銅鏃・石器の実見（岡山県、香川県、東京都、埼玉県）

光本　順：弥生時代絵画資料ほかの調査（奈良県・愛知県）

忽那敬三：縄文時代の足型付土製品の資料調査（財団法人北海道埋蔵文化財センター、苫小牧市博物館）

第５章　2003年度における調査・研究のまとめ

調査　発掘調査は鹿田地区での２件（鹿田遺跡第14次調査・15次調査）があげられる。第14次調査は、1999年から始まった医学部附属病院病棟新営工事における最後の調査であり、鹿田地区の南東部域における遺跡の状況を示す遺構・遺物が検出された。近世～弥生時代の資料なかで、近世における導水施設が設置された大規模な溜池状遺構や、中世の木簡の出土は特に注目される。木簡に関しては、本紀要にその類例などを含めた報告を掲載した。こうした一連の病棟新営工事に伴う調査からは、鹿田遺跡の南東部の状況が明らかとなってきており、中世段階の集落の範囲、あるいは弥生時代においては水田域の端部の状況など、鹿田遺跡の全容を解明するにあたって欠くことのできない重要な成果をあげている。第15次調査は小規模な調査であったが、古墳時代の井戸を確認するなど、古墳時代前期の資料を豊富に出土した第13次調査地点とあわせて、同時期の集落実態を解明するのに貴重な成果を得ることができた。

立会調査では、津島・鹿田両地区とも比較的規模が大きいものが多く、これまでの成果を補足するデータとして、両地域における遺跡の全体像を理解するために必要な資料の蓄積が進められている。

研究　今年度は、『津島岡大遺跡13』と『津島岡大遺跡14』の２冊の発掘調査報告書を刊行し、津島岡大遺跡の縄文時代に関して居住域周辺地点と炉を中心とした活動域の状況、あるいは弥生時代早期における水田の広がりを報告した。また、貯蔵穴から水田への生業転換の推移、石器出土状況からの空間利用形態の解明、縄文時代後期の炉の機能に関する考察などがなされ、縄文集落の実態解明にとって重要な知見が示された。

そのほかには、津島岡大遺跡第17次調査の報告書作成での成果があげられる。同地点は、まさに縄文集落の中心をなす地点であり、多数の遺構・遺物が調査されている。特に、縄文土器は質量共に際だっており、土器研究にとって注目される資料として分析の進展が期待される。

本紀要に掲載した鉄滓の分析・棒火矢の火薬成分分析は、すでに報告書を刊行した資料の分析である。報告書刊行後、必要な資料に関しては研究・分析を継続し、報告を補足できた点は意義深い。また、分析に際して、火薬分析・土壌分析については学内外の研究機関所属の方々と協力・連携することによって行うことができた。今後もこうした研究体制を積極的に取り入れていくことは重要であろう。

展示・公開　発掘調査の現地説明会・鹿田キャンパス特別展示会・第７回岡山大学キャンパス発掘成果展など、本年度は展示・公開に関して様々な取り組みを行った。展示会の成果は、鹿田地区では予想を遙かに上回る入場者数を記録し、津島では多くのリピーターの参加が確認できるなど、本センターの活動が地域において強く求められていること、そして、定期的な開催は地域に根付いてきたことを示す結果として現れている。ただし、こうした展示にあたっては、本センターだけの力ではなく、学内諸機関の御協力・御援助があってこそ、有意義な開催が可能となる。今回、特に鹿田地区では病院の御協力を頂けた点は、そうした良き事例といえるであろう。

このように、埋蔵文化財という資源を、より多くの人に提示するために、教育現場での活用・地域公開・学内での公開・研究会など様々な場での取り組みがあげられるが、今年度は、そう言う点では、例年以上に幅広い対応ができたと評価されよう。

その他に、専任職員の発掘調査と整理作業に関する能力向上を促す試みや、高度機材の導入による調査の効率化を積極的に行った。限られた条件の中で、様々な活動を支えるためには、こうしたセンター業務に対する質の向上を絶えず意識することが重要である。今後、施設の充実などの外的条件整備に加えて、調査・整理・研究などの内的な質の向上をより一層高める努力を目指していきたい。　（山本）

付　編

岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

1．岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの規程

(1)　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（2004年３月31日まで）

昭和62年11月26日岡山大学規程第48号
改正　平５．２．25　規程４号
平７．３．31　規程19号
平12．３．31　規程38号

（設置）

第１条　岡山大学（以下「本学」という。）に岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）を置く。

（目的）

第２条　センターは、本学の敷地内の埋蔵文化財について、次の各号に掲げる業務を行い、もって埋蔵文化財の保護を図ることを目的とする。

一　埋蔵文化財の発掘調査に関すること。

二　発掘された埋蔵文化財の整理および保存に関すること。

三　埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成等に関すること。

四　その他埋蔵文化財の保護に関する重要な事項。

（自己評価等）

第２条の２　センターは、岡山大学学則（平成６年岡山大学規程第64号）第２条の定めるところにより、センターに係る点検及び評価（以下「自己評価」という。）を行い、その結果を公表する。

２　前項の自己評価については、本学の職員以外の者による検証を受けるよう努めるものとする。

３　第１項の自己評価を行うため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会（以下「自己評価委員会」という。）を置く。

４　自己評価委員会に関し、必要な事項は、別に定める。

（教育研究等の状況の公表）

第２条の３　センターは、教育研究及び組織運営の状況等について、定期的に公表する。

（センター長）

第３条　センターにセンター長を置く。

２　センター長は、専門的知識を有する本学の専任教授のうちから学長が命ずる。

３　センター長は、センターに関する業務を掌理する。

４　センター長の任期は、２年とし、再任を妨げない。

（調査研究室）

第４条　センターにセンターの業務を処理するため調査研究室を置く。

２　調査研究室に室長、調査研究員及びその他必要な職員を置く。

３　室長は、専門的知識を有する本学の専任教官のうちから学長が命ずる。

４　室長は、センター長の命を受け、センターの業務を処理する。

５　室長の任期は２年とし、再任を妨げない。

６　調査研究員及びその他の職員は、上司の命を受け、センターの業務に従事する。

（調査研究専門委員）

第５条　センターに、センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るため、調査研究専門委員（以下「専門委員」という。）を置く。

２　専門委員は、本学の専任教官のうちから学長が命ずる。

３　専門委員の任期は、２年とし、再任を妨げない。

（管理運営の基本方針等）
第６条　センターの管理運営の方針等は、岡山大学部局長会で審議する。
（運営委員会）
第７条　センターに、センターの運営に関する具体的な事項を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。
２　運営委員会に関し、必要な事項は別に定める。
（事務）
第８条　センターの事務は、施設部企画課において処理する。
（雑則）
第９条　この規則に定めるもののほか、センターに関し必要な事項は、学長が別に定める。
附　則
１　この規程は、昭和62年11月26日から施行する。
２　この規程施行後最初に任命されるセンター長。室長及び専門委員の任期は、第３条４項、第４条第５項及び第５条第３項の規程にかかわらず、昭和64年３月31日までとする。
附　則
この規程は、平成５年５月25日から施行する。
附　則
この規程は、平成７年４月１日から施行する。
附　則
この規則は、平成12年４月１日から施行する。

(2)　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会規程（2004年３月31日まで）

昭和62年11月26日岡山大学規程第50号
改正　平12．３．31規程93号

（趣旨）
第１条　この規程は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規則（昭和62年岡山大学規程第48号）第７条第２項の規程に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。
（審議事項）
第２条　運営委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という）の運営に関する具体的な事項を審議する。
（組織）
第３条　運営委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。
一　埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）
二　本学の教授のうちから学長の命じた者若干名
三　センターの調査研究専門委員のうちから学長の命じた者１人
四　センターの調査研究室長
五　施設部長
２　前項第２号の委員の任期は、１年とし、再任を妨げない。
（委員長）
第４条　運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。
２　委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。
３　委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。
（委員以外の者の出席）
第５条　委員長が必要と認めたときは、委員会以外の者の出席を求め、その意見を聞くことができる。
（庶務）
第６条　運営委員会の庶務は、施設部企画課において処理する。

附　則

1　この規程は、昭和62年11月26日から施行する。

2　この規程施行後最初に任命される第３章第１項第２号の委員の任期は、同条第２項の規程にかかわらず、昭和64年３月31日までとする。

附　則

この規程は、平成12年４月１日から施行する。

(3)　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会規程（2004年３月31日まで）

平成５年２月25日岡山大学規程第５号
改正　平12．３．31　規程94号

（趣旨）

第１条　この規程は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（昭和62年岡山大学規程第48号）第２条の２第４項の規程に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会（以下「委員会」という。）の組織および運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

（審議事項）

第２条　委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）に係わる点検及び評価の実施並びにその結果の公表に関し、必要な事項を審議する。

（組織）

第３条　委員会は、次の各号に掲げる者で組織する。

一　埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）

二　埋蔵文化財調査研究センター調査研究室長

三　センターに勤務する教官のうちから若干名

四　埋蔵文化財調査研究センター運営委員会委員のうちからセンター長が委嘱した者若干名

五　施設部長

3　前項に定める委員のほか、センター長が必要と認めた者を加えることができる。

（委員長）

第４条　委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

（会議）

第５条　委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

2　委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代行する。

（庶務）

第６条　委員会の庶務は、施設部企画課において処理する。

（雑則）

第７条　この規程に定めるもののほか、委員会に関し必要な事項は、別に定める。

附　則

この規程は、平成５年２月25日から施行する。

附　則

この規程は、平成12年４月１日から施行する。

2．2003年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センター組織

(1)　センター組織一覧

〈埋蔵文化財調査研究センター長〉稲田孝司：併・文学部教授

運営委員会

〈調査研究専門委員〉
千葉喬三：大学院自然科学研究科教授
今津勝紀：文学部助教授
沖　陽子：環境理工学部教授

〈調査研究室長〉山本悦世：専・文学部助教授
〈調 査 研 究 員〉岩崎志保・忽那敬三・高田浩司・野崎貴博・
光本　順・横田美香　：専・文学部助手
〈非 常 勤 職 員〉伴　祐子：技術補佐員
井口三智子・片山純子・黒藪美代子：補助員

(2)　運営委員会

【委　員】

稲田孝司　文学部教授（センター長、委員長）
新納　泉　文学部教授
久野修義　文学部教授
村上宅郎　大学院医歯学総合研究科教授
名合宏之　環境理工学部教授
沖　陽子　環境理工学部教授（調査研究専門委員）
柴田次夫　大学院自然科学研究科教授
山本悦世　文学部助教授（調査研究室長）
齋藤健次　施設部長

【2003年度審議・決定事項】

第51回　2003年５月30日	• 平成14年度決算について
	• 平成15年度事業計画について
	• その他
第52回　2003年12月（持ち回り会議）	• 平成15年度予算に関して
第53回　2003年12月25日	• 技術補佐員の雇用について
	• 鹿田遺跡第14・15次調査完了報告
	• その他
第53回　2004年１月13日	• 平成16年度予算について

3．岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項

岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項

平成12年５月15日
埋蔵文化財調査研究センター長
施　　設　　部　　長

Ⅰ．請負業者が留意すべき事項

1．請負業者は現場代理人を発掘作業の現場に常駐させ、作業員の安全と健康の管理につとめること。
2．発掘作業の現場に「地山掘削」と「土止め支保工」の技能講習修了者をおき、作業員の安全や健康にも注意すること。
3．工事用電力の保安責任者をおくこと。

4．非常停止装置を備えたベルトコンベアーを用いること。
5．重機の運転は、免許所有者がおこなうよう厳守させること。

Ⅱ．発掘現場で注意すべき事項

1．服装・装備・用具等
1）安全で機能的な服装にする。
2）平坦面から２ｍ以上の穴等を掘削する場合は、ヘルメットを着用する。
3）ベルトコンベアーの移動時および周辺での作業の際には、ヘルメットを着用する。
4）グラインダーを使用する際は、手袋・防護眼鏡を着用する。
5）スコップ・草削りなどの用具は、危険がないように使用方法や置き方や保管方法に十分注意する。
2．掘削
1）のり面の角度
造成土：通常の土壌の場合は50～60度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。砂地の造成土の場合は35度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。
堆積土：基本75度とし、状況や土質に応じて安全な角度をとる。
発掘区の壁際を深さ1.5m 以上掘削する場合は、原則として途中で段を設ける。その場合の段の巾は、60cm 以上とする。
2）のり面の保護
のり面はシート等で覆うなどし、崩落防止のために必要な保護措置をとる。
3）深い遺構（深さ1.5m 以上の遺構）
遺構掘削者以外の者が上面で安全確認を行い、十分な注意を払う。場合によっては周囲を広くカットして対応する。
なお、作業現場内への昇降のために、階段を設置する。
3．高所（高さ２ｍ以上の場所）での作業
1）作業中には安全帯を使用する。
2）架台を組んだ場合は最上段に手すりを設け、安全を確保する。
3）２段以上の架台は、分解して移動させる。
4．発掘用機械類の操作
（ベルトコンベアー・ポンプ等）
1）調査用電源の設置と取扱いについては、工事用電力の保安責任者が安全確認を行う。
2）ベルトコンベアー・水中ポンプ等の知識を持つ者が整備・稼働させる。
3）ベルトコンベアーを重ねたつなぎ目の部分には、なるべく土が落ちないような措置をする。
4）原則としてベルトコンベアーの直下での作業・通行を避ける。
5）ベルトコンベアーの移動時は作業員の中で指揮者を決め、周辺の安全性を確保したうえで移動させる。
（重機関係）
1）重機の免許所有者以外は運転しない。
2）運転者は、周囲の安全に注意する。
3）稼働中は、重機の旋回半径内に立ち入らない。
5．健康管理
1）作業中に体調が悪くなった場合は直ちに申し出る。

Ⅲ．その他

1）作業現場内の状況の変化に絶えず注意し、異常を発見したら、直ちに作業を中止して現場代理人に報告し、施設部の監督職員の指示を受ける。
2）調査区の状況や遺構などの特殊性・重要性等により、上記の２の１）～３）どおりに発掘作業を実施することが困難な場合は、現場代理人が監督職員と協議のうえ、安全に留意し作業を行う。

4．2004年度の新規程およびセンター組織に関する事項

2004年度は、国立大学の法人化に伴って、埋蔵文化財調査研究センターも組織上の改変が行われ、センター長は大学理事が担当することとなり、副センター長があらたに設置された。また、調査研究員の所属が、従来の文学部から埋蔵文化財調査研究センターへ移行した。その結果、センター規程および組織体制は以下のように変更となった。

(1)　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（2004年４月１日から）

〔平成16年４月１日
岡大規程第93号〕

（趣旨）

第１条　この規程は、国立大学法人岡山大学管理学則（平成16年岡大学則第１号。以下「管理学則」という）第26条の規定に基づき、管理学則第21条の規定により学内共同利用施設として置かれる岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という）の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

（目的）

第２条　センターは、岡山大学（以下「本学」という）の敷地内の埋蔵文化財について、次の各号に掲げる業務を行い、もつて埋蔵文化財の保護を図ることを目的とする。

一　埋蔵文化財の発掘調査に関すること。

二　発掘された埋蔵文化財の整理及び保存に関すること。

三　埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成等に関すること。

四　その他埋蔵文化財の保護に関する重要な事項

（自己評価等）

第３条　センターは、センターに係る自己点検及び評価（以下「自己評価」という）を行い、その結果を公表する。

２　前項の自己評価については、本学の職員以外の者による検証を受けることを原則とする。

（教育研究等の状況の公表）

第４条　センターは、教育研究及び組織運営の状況等について、定期的に公表する。

（センター長）

第５条　センターにセンター長を置く。

２　センター長は、国立大学法人岡山大学役員規則（平成16年岡大規則第３号）第５条第１項第５号に規定する財務・施設担当理事をもって充てる。

３　センター長は、センターを代表し、その業務を総括する。

（副センター長）

第６条　センターに副センター長を置く。

２　副センター長は専門的知識を有する本学の教授のうちから学長が任命する。

３　副センター長は、センター長の職務を助ける。

４　副センター長の任期は、２年とし、再任を妨げない。

（調査研究室）

第７条　センターにセンターの業務を処理するため調査研究室を置く。

２　調査研究室に室長、調査研究員及びその他必要な職員を置く。

３　室長は、専門的知識を有する本学の教員のうちからセンター長が命ずる。

４　室長は、センター長の命を受け、センターの業務を処理する。

５　室長の任期は、２年とし、再任を妨げない。

６　調査研究員及びその他の職員は、上司の命を受け、センターの業務に従事する。

（調査研究専門委員）

第８条　センターに、センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るため、調査研究専門委員（以下「専門委員」という）を置く。

２　専門委員は、本学の教員のうちからセンター長が命ずる。

３　専門委員の任期は、２年とし、再任を妨げない。

（管理運営の基本方針等）
第９条　センターの管理運営の基本方針等は、役員会で審議する。
（運営委員会）
第10条　センターに、センターの運営に関する具体的な事項を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という）を置く。
２　運営委員会に関し、必要な事項は、別に定める。
（事務）
第11条　センターの事務は、施設企画部施設企画課において処理する。
（雑則）
第12条　この規程に定めるもののほか、センターに関し、必要な事項は、別に定める。
附　則
この規程は、平成16年４月１日から施行する。

(2)　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会内規（2004年４月１日から）

〔平成16年４月１日
学　長　裁　定〕

（趣旨）
第１条　この内規は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（平成16年岡大規程第93号）第10条第２項の規定に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。
（審議事項）
第２条　運営委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の運営に関する具体的な事項を審議する。
（組織）
第３条　運営委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。
一　埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）
二　埋蔵文化財調査研究センター副センター長
三　岡山大学の教授のうちからセンター長の命じた者若干名
四　センターの調査研究専門委員のうちからセンター長の命じた者１人
五　センターの調査研究室長
六　施設企画部長
２　前項第３号の委員の任期は、２年とし、再任を妨げない。
（委員長）
第４条　運営委員会に委員長を置き、センター長をもつて充てる。
２　委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。
３　委員長に事故があるときには、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。
（委員以外の者の出席）
第５条　委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聞くことができる。
（事務）
第６条　運営委員会の事務は、施設企画部施設企画課において処理する。
附　則
この内規は、平成16年４月１日から施行する。

(3)　センター組織一覧（2004年度）

〈埋蔵文化財調査研究センター長〉阿部　健：併、財務・施設担当理事
　運営委員会
〈副センター長〉稲田孝司：併、大学院文化科学研究科教授
〈調査研究専門委員〉
沖　陽子：環境理工学部教授
今津勝紀：文学部助教授
鈴木茂之：大学院自然科学研究科助教授
〈調査研究室長〉山本悦世：専・埋蔵文化財調査研究センター助教授
〈調 査 研 究 員〉岩崎志保・高田貫太・野崎貴博・光本　順・
横田美香（５月31日で退職）
：専・埋蔵文化財調査研究センター助手
〈非 常 勤 職 員〉景山　明香：技術補佐員
井口三智子・片山純子・黒藪美代子：補助員

(2)　運営委員会（2004年度）

【委　員】

阿部　健　財務・施設担当理事（センター長）
稲田孝司　大学院文化科学研究科教授（副センター長）
新納　泉　文学部教授
久野修義　文学部教授
大塚愛二　大学院医歯学総合研究科教授
柴田次夫　大学院自然科学研究科教授
沖　陽子　環境理工学部教授（調査研究専門委員）
山本悦世　埋蔵文化財調査研究センター助教授（調査研究室長）
齋藤健次　施設企画部長

付　　表

付表１　1982年度以前の構内主要調査（1980～1982年度）

年度	地区名		種類	所属	調査名称	調査組織	調査面積（㎡）	文献	備考
1980	鹿田		立会	歯	同附属病院棟新営	岡山市教育委員会	8		
1981	津島南	BD26	〃	農	寄宿舎新営	〃			
	津島北		〃	文法	合併処理槽施設	〃			
	津島北		〃	文法経	合併処理槽施設	〃			
	津島南	BD09、BC09～11	〃		基幹整備（共同溝取付）	〃			
	津島南	BD～BE04～07	〃		陸上競技場改修（配水管施設）	〃			
	鹿田		〃	医病	高気圧治療室新営	〃			
	〃		〃	〃	動物実験棟新営	〃 岡山県教育委員会			大学が市教委への確認調査の依頼をせずに掘削。その後、岡山市・岡山県教委が残存壁面等の調査を実施
	〃		〃	〃	病理解剖体臓器処理保管庫新営	岡山市教育委員会			
	〃		〃	医	運動場改修	〃			
1982	津島	AV06・10、AW05・14、AX08、BD07、BE10	試掘		排水基幹整備	〃			津島AW14区で弥生時代包含層確認、協議→津島岡大遺跡第１次調査へ
	津島北	AW14	発掘	法文	排水集中槽（NP－１）埋設	岡山大学	24.0	3	小橋法目黒遺跡：津島岡大第１次調査
	津島南		試掘	学	武道館新営	岡山市教育委員会	2.3		
	津島北	AY15・16	〃	法経	校舎新営	〃	7.0		
	鹿田		〃	医	標本保存庫新営	岡山県教育委員会	8.0		
	〃		〃	医病	外来診療棟新営	〃 岡山市教育委員会	4.0	2	
	〃		立会	医	動物実験施設関連排水管・ガス管埋設	岡山県教育委員会		1	
	鹿田	AE～AN22、AE22～26	〃	歯	電話ケーブル埋設	〃 岡山市教育委員会 岡山大学埋蔵文化財調査室			

文献

１．光永真一　1983「岡山大学医学部附属病院動物実施設新営工事に伴う排水管付設工事に伴う立会調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13　岡山県教育委員会
２．河本　清　1983「岡山大学医学部附属病院外来診療棟改築に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13　岡山県教育委員会
３．吉留秀敏　1985　『岡山大学津島地区小橋法目黒遺跡（AW14区）の発掘調査』　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第１集　岡山大学埋蔵文化財調査室

付表２　2002年度以前の構内主要調査（1983～2002年度）

凡例
- 総合番号：調査地区別の通し番号（立会調査は選択的に保存）
  津島岡大遺跡第１次調査は本機関設置以前の調査であることから、総合番号を※１として区別している。
  発掘調査には番号に○を付す。
  試掘確認調査で、その後、発掘調査範囲内に入った地点は、範囲内の番号記載を省き、全てが範囲内に含まれた場合には総合番号に（　）を付す。
  立会調査で、付表に保存する基準：①中世土層以下を確認した調査　②明確な遺構・遺物を確認した調査
- 番号：年度別報告番号
- 文献：付表４・５の番号に対応する。

付表２－(1)　発掘調査

〈津島地区：津島岡大遺跡〉

総合番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	調査期間	面積（㎡）	概要	文献
※１	1982	－	AW14	文	小橋法目黒遺跡（津島岡大遺跡第１次調査）：排水集中槽(NP－１)埋設	82.10.28～11.24	24	弥生時代中期・古代溝	3
①	1983	11	BE14・18、BF17・18、BG14、BH14・15	農	津島岡大遺跡第２次調査：排水管埋設	84. 1. 9～ 3. 5	265	弥生時代早～前期集落	4
②	1983	12	BH13	農	津島岡大遺跡第２次調査：合併処理槽埋設	11.14～11.22 84. 1. 9～ 3. 5	276	弥生時代早～前期水田関連遺構（溝他）	4
⑮	1986 1987	2 1	AV00 AW00・01	学	津島岡大遺跡第３次調査：男子学生寮	12. 1～87. 6.18 8.24～　9. 5	1550	縄文時代後期～弥生時代早期の貯蔵穴と河道および集落、弥生時代の前期～近代の水田・溝、古代の条里関連溝	19

総合番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	調査期間	面積(㎡)	概要	文献
⑯	1986	3	BF・BG09	学	津島岡大遺跡第4次調査 ：屋内運動場	87. 1.19～ 1.22	70	弥生時代前期の溝、中世河道	6
㉖	1988	1	AY06～08 AZ06・07	大自	津島岡大遺跡第5次調査 ：自然科学研究科棟	6.27～ 89. 3.19	1537	縄文時代後期・弥生時代早期の貯蔵穴と河道・弥生時代末～近世の水田関連遺構	27
㉗	1988 1989	2 1	AV・AW04・05	工	津島岡大遺跡第6次調査 ：生物応用工学科棟	9.20～ 89. 5.31	600	縄文時代後期の貯蔵穴と河道、古代条里関連溝、弥生時代前期～近世の水田・溝	35
㉘	1988	3	AV・AW05・06	工	津島岡大遺跡第7次調査 ：情報工学科棟	10.12～ 89. 3.31	800	縄文時代後期集落、弥生時代前期～近世水田	35
㉙	1990	1	AY・AZ08	大自	津島岡大遺跡第5次調査 ：自然科学研究科棟	4.3～ 4.21	90	古墳時代後期の溝	27
㊹	1991	2	BD18・19	農・薬	津島岡大遺跡第8次調査(A地点) ：遺伝子実験施設	7.23～12.25	650	縄文時代の土坑、弥生時代～近世の溝	32
㊺	1991	3	BH13	農・薬	津島岡大遺跡第8次調査(B地点) ：合併処理槽	7.23～12. 2	140	弥生時代溝、古代～近世水田	32
㊿	1992	1	AU～AW04	工	津島岡大遺跡第9次調査 ：生体機能応用工学科棟	7. 1～ 93. 1.29	650	縄文時代後期の貯蔵穴と河道、弥生時代～近世の水田址	47
(51)	1992 1993	2 1	BB～BC10～11	保	津島岡大遺跡第10次調査 ：保健管理センター	93. 2. 1～ 3.31 4.17～ 7.31	400	弥生時代後期～古墳時代集落、近世耕作関連遺構	64
(54)	1993	2	AV～AW11～12	情	津島岡大遺跡第11次調査 ：総合情報処理センター	9.14～94. 1.11	640	縄文時代後期遺構	36
(55)	1993 1994	3 1	AV～AW13～14	図	津島岡大遺跡第12次調査 ：図書館	94. 2. 9～ 3.31 4. 1～11.30	1472	弥生時代前期水田、弥生時代時代中期～古墳時代溝、古代～近世溝（条里関連）	64
(64)	1994 1995	2 1	AW～AX11～12	事	津島岡大遺跡第13次調査 ：福利厚生施設北棟	10. 6～11.30 95. 7.10～10. 4	816	縄文時代後期ピット、弥生時代水田、弥生～古墳時代溝、近代耕作面	41
(69)	1995	2	BB～BC12・13	事	津島岡大遺跡第14次調査 ：福利厚生施設南棟	10.25～96. 2.14	856	弥生時代前期水田、弥生～古墳時代の溝	46
(70)	1995 1996	3 1	AW00・01	サ	津島岡大遺跡第15次調査 ：サテライトベンチャービジネスラボラトリー	96. 1.16～ 4.25	1600	縄文時代後期・弥生時代早期の貯蔵穴と河道、縄文時代後期集落、弥生時代前期水田、古墳～中世水田・溝	38 72
(74)	1996	2	BD19～20	農・薬	津島岡大遺跡第16次調査 ：動物実験棟新営	96. 5. 7～15	30.3	A地点：縄文時代と古墳時代の土坑、B地点：中世の溝、古代の柱穴列、弥生時代の水田	44
(75)	1996	3	AW02～04	環	津島岡大遺跡第17次調査 ：環境理工学部新営	96. 5.21～ 1. 9	1451	縄文時代後期の集落、弥生時代の溝・水田、古代の水田	44
(85)	1998	2	BB11	事	津島岡大遺跡第18次調査：福利施設(南)新営に伴うポンプ槽取設	98.4.7～4.10	16	古代の溝状遺構	53
(86)	1998	3	AZ09・10	理	津島岡大遺跡第19次調査 ：コラボレーションセンター	98. 7.27～ 99. 2.18	1019	縄文時代後期遺構、弥生時代前期の河道、古墳時代・中世の溝、近世道路状遺構・溝	65
(87)	1998	5	AY07	環	津島岡大第20次調査：校舎(Ⅰ期)新営に伴うポンプ槽取設	98.10.19～28	16	黒色土上面に溝、中世溝	53
(88)	1998	6	AX09	工	津島岡大遺跡第21次調査 ：エレベーター設置	98.11. 6～24	30.2	縄文時代中期土坑、弥生時代早期～前期溝、古代土坑・溝	65
(89)	1998 1999	8 2	AW02・03	環	津島岡大遺跡第22次調査 ：校舎(Ⅱ期)	99. 3. 1～ 7.12	773.5	縄文時代後期河道・集落、弥生時代河道・水田畦畔、古墳時代溝、古代～近世溝（条里関連）・水田畦畔	53
(100)	1999 2000	5 1	AZ15・BA14	大文	津島岡大遺跡第23次調査 ：総合研究棟	00. 2. 3～ 7.28	1339	縄文時代後期河道・杭列、弥生時代前期河道・堰・溝、弥生時代中期～近世溝	56
(111)	2000	3	AZ14	大文	津島岡大遺跡第24次調査 ：総合研究棟渡り廊下建設	00.12. 5～14	34.2	縄文時代後期河道・杭列	61
(112)	2000	4	BA15	農	津島岡大遺跡第25次調査 ：散水施設設置	01. 1.29～31	20.0	中世～近世の溝・杭	61
(113)	2000 2001	5 1	BC～BD14～15	事	津島岡大遺跡第26次調査 ：事務局	01.3.26～9.30	1550	縄文～弥生時代の河道・貯蔵穴・土坑・炉、近世の溝・堰	56 61
(121)	2001 2002	2 1	BB～BC14～15	事	津島岡大遺跡第27次調査 ：創立50周年記念会館	02. 2. 1～ 6.24	1648	縄文時代後期の炉、弥生時代・古墳時代の溝、中世の畦畔（条里関連）	66 68
(122)	2002	2	AW～AY06～08	大自	津島岡大遺跡第28次調査 ：自然科学系総合研究棟	4.30～ 9.20 11.28～03. 1.15	1798	弥生時代前期の畦畔、中世～古代の畝・溝	71
(123)	2002	4	BF16	農	津島岡大遺跡第29次調査 ：共同溝	02. 9.18～10. 3	62.6	弥生～古墳時代の溝・ピット	71

〈鹿田地区：鹿田遺跡〉

総合番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	調査期間	面積(㎡)	概要	文献
①	1983 1984	9	AU～BD28～40	医病	鹿田遺跡第1次調査：外来診療棟	7.27～11.22 84. 1. 9～ 8.31	2188	弥生時代中期後半～中世集落	7
②	1983	10	BG～BI18～21	医病	鹿田遺跡第2次調査：NMR-CT室	8.1～12.30	176	弥生時代後期～中世集落	7
⑩	1986	1	CN～CU27・28 CT～CY19～27 CX～DD16～25 DD～DG22・23	医短	鹿田遺跡第3次調査：校舎	6.2～11.29	2390	中世の集落、古代の河道と橋脚	10

総合番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	調査期間	面積(㎡)	概要	文献
⑫	1987	3	DD～DF25 DG～DI27・28	医短	鹿田遺跡第4次調査 ：校舎周辺の配管	11. 2～11.21	30	古代の河道	10
⑬	1987	2	BB～BH35～42	医病	鹿田遺跡第5次調査：管理棟	10. 6～88. 3. 2 3.23～ 3.31	1192	弥生時代中期後半～中世の集落	24
⑯	1990 1991	2 1	BW～CC67～71	ア	鹿田遺跡第6次調査 ：アイソトープ総合センター	11.20～91. 6.30	690	弥生～古墳時代の集落、中世集落	40
㉕	1997 1998	4 1	BR55～BX61 BY56～57	医	鹿田遺跡第7次調査 ：基礎医学棟	98. 2.27～ 8. 6	829	古墳時代初頭・中世の集落、近世の水田・溝	50 53
㉗	1998	4	BP～BS30～32	医病	鹿田遺跡第8次調査：RI治療室	98. 7.28～ 9. 1	156	古墳時代溝・中世溝	53
㉘	1998 1999	7 1	CD33～37 CE・CF28～37 CG～CJ20～37 CK・CL25～37	医病	鹿田遺跡第9次調査 ：病棟	98.11.27～ 99. 5.11	2088	弥生時代水田・溝、中世～近世集落	53
㉛	1999	3	CD・CE10～12 DD～DF16～22	医病	鹿田遺跡第10次調査 ：共同溝関連	99. 5. 7～ 99.10.14	244.1	古代の杭列（河道内）、弥生時代ピット、近世溝	56
㉜	1999	4	CD～CM19～42	医病	鹿田遺跡第11次調査 ：病棟	99. 8.19～12.22	2020	弥生時代水田畦畔、古代池状遺構、中世～近世集落	56
㊵	2000 2001	2 －	CO～CV35～44 CN・CM38～41 CN28～38	医病	鹿田遺跡第12次調査 ：エネルギーセンター	00.10. 2～ 01.05.10	1897	弥生時代溝・河道、古墳時代・中世集落、近世土坑・溝	56 61
㊻	2002	3	BL～BR46～51	大医歯	鹿田遺跡第13次調査 ：総合教育研究棟	02. 4.30～10.25	934	弥生時代の溝、古墳時代の土器溜まり・溝、中世の集落、近世土坑群	71

〈三朝地区：福呂遺跡〉

総合番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	調査期間	面積(㎡)	概要	文献
①	1997	1・2	－	固	福呂遺跡第1次調査 ：実験研究棟	97. 5.10～20 7.28～31	269	縄文時代早期・弥生時代中期・中世・近世集落	55
②	1997	3	－	固	福呂遺跡第2次調査：実験研究棟新営に伴う工事スロープ部分	97.11.25～12. 5	120	近世・中世・古代の集落	55

付表２－(2)　試掘・確認調査

〈津島地区：津島岡大遺跡〉

総号番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
(3)	1983	1	BH13	農	合併処理槽予定地	2.5	－	→津島岡大第2次調査：1983年度	1
4	1983	2	BF17	農	排水管中間ポンプ槽予定地	3.5	－	－	1
5	1983	3	BE～BG14 BE・BH15 BE18、BF16～18 BC18	農	排水管埋設予定地	2.0	－	29ヶ所で試掘→津島岡大第2次調査：1983年度	1
6	1983	4	BF22・23	農	農場畜舎新営予定地	2.0～3.0	0.6	2ヶ所、土器片　〈1987年度工事立会〉	1
(7)	1983	5	BC・BD15	事	大学事務局新営予定地	2.0～3.0	0.9	2ヶ所、→津島岡大第26次調査：2000年度	1
(8)	1983	6	BB10	保	保健管理センター新営予定地	2.0～3.0	0.8	→津島岡大第10次調査：1999年度	1
9	1983	7	BI16	事	津島宿舎新営予定地	0.9	0.9	土器片〈1987年度工事立会〉	1
10	1983	8	AW05	工	校舎新営予定地	3.0	1	土器片	1
12	1985	1	BE08	教養	講義棟予定地	3.5	1.2	遺構など未確認　〈1986年度工事立会〉	5
13	1985	2	AX02	教育	研究棟予定地	2.6～3.4	1.2	3ヶ所、縄文～弥生土器出土	5
14	1985	3	AV・AW99～01	学	男子学生寮新営予定地	2.0～3.0	1	→津島岡大第3次調査：1986年度	5
(17)	1986	3	BF・BG09	学	屋内運動場新営予定地	2.4、1.2～1.7	1.1	→津島岡大第4次調査：1986年度	6
(18)	1986	4	AY・AZ07	大自	自然科学研究科棟新営予定地	1.6～3.2	0.6～0.8	→津島岡大第5次調査：1988年度	6
22	1987	4	AP02（土生地区）	事	外国人宿舎建設予定地	2.2～2.8	－	縄文時代・弥生時代・近世の遺構面	8
(23)	1987	5	AV11	情	総合情報処理センター新営予定地	2.0～3.0	2	→津島岡大第11次調査：1993年度	8
24	1987	6	AY09	理	身体障害者用エレベーター建設予定地	3.0～3.5	約1.0	中世・近世の遺物、古代・中世の水田〈継続して調査〉	8
25	1987	7	BD09	教養	身体障害者用エレベーター建設予定地	2.5	0.7	縄文時代遺構、縄文・中世・近世土器〈継続して調査〉	8
29	1988	17	AX04・06、AW04	工	校舎建設予定地	2.0～3.5		→津島岡大第6・7次調査：1988年度	11
30	1988	19	BD18・19	農・薬	動物実験飼育施設・遺伝子実験施設	2.3	1.1～1.2	→津島岡大第8次調査：1991年度	11
31	1988	20	BC29	事	国際交流会館	2.5	1.2	中世・近世の遺物出土〈1988年度工事立会〉	11
33	1989	2	AZ・BA05	教育	身体障害者用エレベーター	2.5	0.8	縄文時代後期・弥生時代早期の落込み、縄文時代後期～中世土器片〈継続して調査、面積38.5㎡〉	14
34	1989	3	AZ17	大自	合併処理槽設置予定地	4.0	1.6～2.0	中世～明治の水田の畦畔・溝〈1989年度工事立会〉	14
35	1989	4	BD02	学	学生合宿所予定地	2.0～3.2	1	弥生時代早・前期の畦畔〈1989年度工事立会〉	14
(36)	1989	5	AV・AW13	図	図書館新営予定地	3.0	1.4～1.6	→津島岡大第12次調査：1993年度	14

総号番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
40	1990	3	BC02	学	学生合宿所ポンプ槽予定地	2.5	1.1	弥生時代前期畦畔、中世土器片	18
41	1990	6	AW・AX11	事	福利厚生施設予定地	3.9	1.4～1.6	→津島岡大第13次調査：1994年度	18
56	1993	3	BE～BF22～23	農	農学部汎用耕地実験実習施設	1.5		中～近世耕作土	30
65	1994	3	BD20	農・薬	動物実験施設	2.0	0.9	GL－1.4mで黒色土、縄文土器1点出土〈盛り土保存〉	33
71	1995	4	BE26	事	国際交流会館新営予定地	4.1、2.4	1.6	明治～中世の土層確認、以下は湿地状態、遺構・遺物無し（明治畝のみ）〈工事立会〉	38
72	1995	5	AW02・03	環	環境理工学部新営	2.4	1.2	→津島岡大第17次調査：1996年度	38
73	1995	6	BF07	学	ボクシング部ボックス移設	3.0	3	標高2.5mで黒色土、弥生～古墳時代の溝2条、古代溝1条	38
(90)	1998	9	AZ09	理	コラボレーションセンター新営に伴う試掘調査	2.7～3.4	1.3	→津島岡大第19次調査：1998年度	53
(91)	1998	10	AW02・03	環	校舎（Ⅱ期）新営に伴う調査	4.5	1.2	→津島岡大第22次調査：1998年度	53
92	1998	13	AW04	工	システム工学科棟新営に伴う調査	2.8	1.0	GL－1.8mで黒色土、縄文後期の遺構	53
93	1998	14	AU02・03・06 AV03	事	遺跡保護区整備に伴う調査	2.4～3.8	0.8～1.6	5カ所、TP1・3・5：微高地状、TP2・4は低湿地状、TP1で弥生溝、TP3で弥生溝・ピット、TP4で中世溝	53
(105)	1999	6	AZ15、BA14	文法経	総合校舎新営に伴う調査	2.7、3.5	0.8、1.1	→津島岡大第23次調査：1999年度	56
106	1999	7	AV08	工	電波暗室新営に伴う調査	1.2	0.2	現表土以下、基盤となる岩盤層	56
114	2000	6	AV00、AX00・02・03、AZ06 AW08	－	縄文～弥生時代における環境復元に伴う調査	2.6～3.2	1.7～0.9	6カ所掘削、縄文・弥生時代の微高地、古代溝を確認	61
115	2000	7	BB14	－	創立50周年記念館新営に伴う調査	2	0.8	→津島岡大第27次調査：2001年度	61
129	2002	5	BD15	事	事務局旧本部棟移転に伴う調査	2.1	－	黒色土の落ち検出	71

〈鹿田地区：鹿田遺跡〉

総号番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
(4)	1984	1	BU30・31	医病	西病棟北側受水槽予定地	1.4	0.5～0.7	中世土器・包含層確認　〈盛土保存〉	2
(5)	1984	2	CT・CU25 CZ19・20・23・24	医短	医療短期大学部校舎新営予定地	2.7	0.8～1.0	→鹿田第3次調査：1986年度	2
6	1985	4	AJ33、AI40 AJ・AK26	医病	外来診療棟環境整備工事に先立つ範囲確認調査	2.2～3.0	0.9～1.4	弥生時代～中世の遺物	5
(17)	1990	5	BY・BZ68	ア	アイソトープ総合センター予定地	2.3	1.2～1.3	→鹿田第6次調査：1990年度	18
(26)	1997	8	BT57	医	基礎医学棟	2.2	0.9	→鹿田第7次調査：1997年度	50
29	1998	11	CF・CG43・44 CH25・26 CK35・36、CK15	医病	病棟新営に伴う調査	2.0～2.4	1.0	→鹿田第9次調査：1998年度	53

〈倉敷地区〉

総号番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
1	1990	4	－	資生研	資源生物科学研究所遺跡確認調査	2.5	0.7	中世後半以降の土器片	18
2	1998	12	－	資生研	バイオ実験棟新営工事に伴う調査	1.5	0.4	近世干拓地内、遺構未確認	53

〈三朝地区：福呂遺跡〉

総号番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
3	1997	5・6	－	固	実験研究棟新営工事に伴う試掘調査	1.66～2.1	0.8	2カ所→福呂第2次調査：1997年度	50

付表2－(3)　立会調査

〈津島地区：津島岡大遺跡〉

総号番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
11	1984	20	BI15～17	事	南宿舎合併処理槽関係配水管埋設	1.0～2.2	1.0	溝・土坑、弥生土器・須恵器	2
19	1986	12	BE08・09	教養	校舎新営	2.3	1.3	中・近世の溝・土器	6
20	1986	21	BG08	学	ハンドボールコート新設	0.2～2.0	0.8	黒色土確認	6
21	1986	26	BF07・08	教養	校舎新営に伴う電気配管	1.8	0.9	中世包含層	6
32	1988	17	BG10・11	教養	テニスコート夜間照明施設	2.2	1.5	GL－約2mで黒色土、西に向かう落ちを推定	11
37	1989	8	AZ08	大自	自然科学研究科棟新営：工事用道路	1.4		弥生時代後期水田・溝	14
38	1989	10	AU05	工	校舎新営に伴う電柱架設	1.9	1.0	黒色土確認	14
42	1990	16 19	AV04～10	事	岡山市道本町津島東線拡幅に伴う補償工事Ⅰ：電柱移設	0.4～3.0	0.6～1.4	5ヶ所、黒色土確認、条里南北溝	18
43	1990	20	BC02～04 BD03・04	事	岡山市道本町津島東線拡幅に伴う補償工事Ⅰ：学生合宿所給排水管設置	2.3	1.2	GL－2.3mで黒色土	18
46	1991	9	BC18	農・薬	防火用水撤去	2.0	0.8	基盤層まで掘削、石鏃出土	21
47	1991	17	BB16	事	津島地区基幹整備（電気）：ハンドホール・アース板	1.7～1.8	0.5	2ヶ所、明治層～淡灰色粘土層	21
48	1991	19	BD15	事	津島地区基幹整備（電気）：アース板埋設	1.7	1.0	GL－1.5mで黒色土	21
49	1991	40	BC・BE・BF12	事	南北道路街灯設置	1.5		3ヶ所、GL－1.4mで古代層	21

総号 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文献
52	1992	15	BD18	農・薬	遺伝子実験施設ハンドホール設置	1.5	0.75～1.1	縄文後期層まで掘削、溝2本検出	25
53	1992	34	AV12	事	附属図書館北側駐車場整備	3	1.7	造成土以下は粘土層	25
57	1993	17	BB～BC10～12	保	保健管理センター新営に伴う外構工事ほか：電気配線	1.8	0.6～0.7	保健管理センター本調査と同じ層序、黒褐色土はGL－1.15～1.7m、その直下に基盤層	30
58	1993	19	BB11	保	保健管理センター新営に伴う旧棟改修：電気配線	1.1	0.8	弥生土器片、工法変更	30
59	1993	23	BA07	事	津島地区基幹整備：RI共同利用施設排水処理施設他設置	3.2	－	明治～中世層・暗褐色土層、古代溝？、縄文晩期？土器片	30
60	1993	28	BD～BE13	事	津島地区環境整備：南北道路沿水路ボックスカルバート敷設	1.5	1.0	近世～中世層を確認	30
61	1993	33	BB～BG12～13	事	津島地区環境整備：水銀灯設置	1.8	0.5～1.2	10ヶ所、近世～中世層まで掘削、一部で暗褐色土層を確認	30
62	1993	34	BD～BE12・13	事	津島地区環境整備：信号機設置	1.6	1.0	近世から中世層、一部で暗褐色土層	30
63	1993	39～41	BB05～07 BC05・41	学	野球場バックネット・防球ネット改修	2.0～3.2	1.0	GL－1.2～2.0m付近で黒色土、以下は黄色砂～青灰色粘土	30
66	1994	9	BD・BE・BF04～07	事	陸上競技場照明灯設置	2	0.96	オーガー掘削（径80cm・深さ10m）、GL－1.92～2.0mで黒色土	33
67	1994	13	AV10、AW10 AU11	情	総合情報処理センター新営電気工事	2.2	1.5	近世2面、中世（近世か？）1面、GL－1.7mで黒色土、近世溝	33
68	1994	20	BD20	農	焼却場	2.2	1.5	GL－1.9mで黒色土	33
76	1996	4	BC18	農・薬	動物実験棟新営に伴う造成土取り	2.2	1.9	黒色土層付近まで掘削	44
77	1996	5	BD16～19	農・薬	動物実験棟新営に伴うハンドホール設置工事	1.3	－	4ヶ所、造成土以下に5層確認	44
78	1996	12	AV02、AV03 AV04、AV99 AW02、AW04	サ	サテライトベンチャービジネスラボラトリー新営：外灯設置工事	1.0～1.5	0.76～1.1	6ヶ所、明治層2面・近世層2面・中世層？1面・弥生層？1面	44
79	1996	13	AV03～AW03	サ	サテライトベンチャービジネスラボラトリー新営：配管設置工事	2	0.95	弥生時代層まで掘削、古墳時代前期の遺構・遺物	44
80	1996	18	AW03	環	校舎新営予定地電柱移設工事	2	－	黒色土まで掘削	44
81	1996	25	AV13	図	附属図書館新営：雨水桝・外構工事	1.3	1.0	造成土以下に青灰色粘質土・黄褐色粘質土・灰褐色粘質土	44
82	1997	16	BB13～BH13	事	南北道路ガス管埋設工事	1.5	－	中世層まで掘削	50
83	1997	19	AW11～BA13	事	南北道路ガス管埋設工事	1.5	－	中世層	50
84	1997	24	BC12	事	福利厚生施設新営に伴う共同溝新設工事	2.0	0.8	GL－1.65mで黒色土、古代～近世の溝	50
94	1998	15	BA09	事	構内外灯設置工事	1.47	1.0	GL－1.42mで黒色土	53
95	1998	22	AZ09、BA09	理	コラボレーションセンター支障配管布設替工事	1.4	1.0	GL－1.4mで黒色土	53
96	1998	24	BB12、BC12	事	南福利街灯設置工事	1.4	0.95	中世層まで掘削	53
97	1998	31	AY06	環	校舎新営に伴うガス管埋設工事	1.2～1.4	0.65～0.95	中世層まで掘削、10ヶ所	53
98	1998	34	BC10	事	学生会館改修に伴うトラップ桝撤去工事	2.2	1.45	GL－1.7mまで灰褐色粘土層、GL－2.2mまで青灰色粘土層	53
99	1998	35	BA00	事	NTT電柱移設工事	1.5	0.9	造成土以下に褐色系粘質土	53
100	1998	41	AX03～AY07	環	実験排水管埋設工事	1.4	0.6～1.4	10ヶ所、5地点で中世層、2地点で古代層、1地点で古墳時代層まで掘削	53
101	1998	42	AU02	環	馬場移設に伴う樹木移植	2.2	1.1～1.3	GL－2.0mで弥生後期層、GL－2.2mで縄文基盤層	53
102	1998	44	AV03、AW03	環	校舎新営に伴う生活排水桝設置工事	1.97	1.4	古墳時代層まで掘削、須恵器・土師器	53
103	1998	48	AW03	環	校舎新営に伴うガス管埋設工事	1.45	1.0	中世層まで掘削	53
107	1999	8	AY00、AZ01・03	施	構内外灯設置工事	1.15～1.35	0.5～1.2	3ヶ所で黒色土（GL－0.85～1m）確認	56
108	1999	12	AZ08・09	理	コラボレーションセンター新営工事に伴うハンドホール	1.48～2.1	1.03～1.16	2ヶ所、1ヶ所で古墳時代層まで掘削	56
109	1999	13	AW02	環	校舎（Ⅱ期）新営に伴うスロープ設置工事	3.5	1.2	調査面積25㎡、黒色土下面まで調査、近代土坑・古代溝・縄文後期ピット	56
110	1999	42	AZ09	理	コラボレーションセンター新営に伴う排水桝	1.0～1.2	0.8～1.0	6ヶ所、1ヶ所で黒色土対応層まで掘削	56
116	2000	17	BA12	事	津島地区電柱工事	1.6	1.0	造成土下に灰色粘質土・暗茶褐色粘質土層	61
117	2000	23	AY09	理	校舎改修工事：理学部本館基礎補強工事	1.3	0.9	造成土下に暗青灰色粘質土・褐色粘質土・灰色粘質土	61
118	2000	28	AX10、AY10	理	校舎改修機械設備工事：電気	0.85～1.60	0.8～1.1	南側ハンドホールはGL－1.6mまで掘削、GL－1.52mで中世溝検出、南東から北西方向に向かって走行	61
119	2000	42	AW08、AX08	工	精密応用化学科棟都市ガス改修工事	1.6～2.05	1.45	GL－1.82mで明灰褐色粘土（中世？）	61
120	2000	44	BA16	大文	総合研究棟仮設電柱建柱工事	1.5～1.7	1.0	GL－1.4mで中世層？、軍庭園の築山、土塁を一部掘削	61
122	2001	4	AZ10	理	校舎改修電気設備工事	1.6	1.0～1.2	ハンドホール部分で中世溝	66
123	2001	11	BB～BC16	事	本部棟電柱設置工事	1.5～2.1	1.2～1.4	2ヶ所、GL－1.4mで灰色粘土、GL－2.1mまで谷部か？	66
124	2001	27	BB・BC13	事	本部棟車庫移設工事	0.5～1.6	1.0	2ヶ所、中世層まで掘削	66
125	2001	30	BB14	事	本部棟樹木移植	1.6	0.65～0.8	GL－1.4mに灰色粘質土層（古代）を確認	66

総号番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
126	2001	31	BB14	事	本部棟車庫移設工事に伴う旧変電室基礎解体工事	1.05	0.45～0.75	12ヶ所掘削、中世層まで掘削	66
130	2002	29	BE15	農	校舎改修電気設備工事	1.8	1.5	3ヶ所、古代・古墳層まで掘削	71
131	2002	34	BC13～15	事	本部棟新設工事：排水桝・管路	1.2～2.5	0.7～1.2	突帯文土器・石器がまとまって出土、近世溝・弥生溝	71
132	2002	51	BB13	事	本部棟新営その他工事：雨水排水桝・管路	1.57	0.8	中世層と古代・古墳層を確認	71
133	2002	54	BB13・BD14	事	本部棟新営その他工事：外灯	0.95～1.9	0.8	2ヶ所で中世層と古代層まで掘削、GL－1.3mで黒色土	71
134	2002	55	BC07・09	教養	一般教育棟B棟外灯設置工事	1.0～1.26	0.95	4ヶ所、中世層まで掘削	71
135	2002	57	BB～BC14～15	事	創立五十周年記念館新築工事：汚水排水	1.0～2.3	0.85～1.0	一部黒色土上面まで掘削	71

〈鹿田地区：鹿田遺跡〉

総号番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
3	1983	23	AO～AW22	医病	外来診療棟蒸気配管埋設	1.3	－	弥生時代後期土器・分銅形土製品、貝集積	1
7	1985	6	AW～BH23 BH・BI24	医病	外来診療棟関係屋外排水管埋設	1.3～1.7	0.7～1.3	中世・弥生の遺構・遺物	5
8	1985	12	AG31、AG24 AF23	医病	基幹環境整備緑化工事：電気配線ハンドホール掘削	1.2～1.7	0.9～1.3	3ヶ所、中世包含層・ピット	5
9	1986	9	BI～BN4	医病	記念館東側汚水管改修工事	0.8～1.3	0.8	中世包含層、土器出土	6
11	1986	24	CL～CR12、CR～CX13、CX～DA14	医短	護岸及び囲障工事	2	0.8～1.0	中世包含層	6
14	1987	8	BC37	医病	管理棟新営に伴う基礎杭確認	2.5		弥生時代包含層・遺構確認	8
15	1989	46	CE30・37・44 CJ・CK45 CL28・29	医病	旧管理棟跡地環境整備：外灯基礎	1.2～1.5	0.7～1.0	2ヶ所、中世層を確認	14
18	1992	29	BW71	ア	アイソトープセンターL形側溝・集水桝	1.4～1.5	0.9	中世溝1条	25
19	1992	41	CI73	医	テニスコート脇電柱埋設	1.2	1.0	古代土器1点	25
20	1994	5	DH60～62	医	護岸改修工事	1.5	0.8	近世層以下はすべて遺構埋土の可能性あり、溝3条・ピット9基	33
21	1995	11	BG・BI18	医病	鹿田地区基幹整備：附属病院連絡通路新設	1.5	1.0	造成土以下に茶褐色土・青灰色粘質土層、遺物なし	38
22	1995	14	CD07・08	医病	鹿田地区基幹整備：液酸タンク設置工事	2.3	1.0	中世2面確認、溝3条、溝内から中世・古代の土師器出土	38
23	1995	17	CD08～CC11	医病	鹿田地区基幹整備：附属病院液酸タンクU字溝埋設工事	1.23	0.85	包含層確認、中世土器細片、既設管・工事基礎などで区間全長の1／2程度は破壊	38
24	1995	23	DF56～67	医	防球ネット取設工事	3	0.8	径60cmを12ヶ所、その内4ヶ所で土器片・石器出土、調査区西寄りは、GL－2m以下は旧河道か。	38
30	1998	36	BV73、CN78	医	校舎新営に伴う仮設電柱工事	1.2	1.0	中世層まで掘削	53
33	1999	15	BV65～71	医	研究棟新営に伴う給排水桝・管路	1.2～1.4	0.9	中世層まで掘削	56
34	1999	18	BU65	医	研究棟新営に伴う検水槽	2.2	1.1	面積8.2㎡、近世溝、中世溝・ピット	56
35	1999	27	BY42・43 BI43・44	医病	基幹整備（電気設備）：地中配管	1.25～1.45	0.45～0.5	2ヶ所、中世層まで掘削、時期不明の遺構	56
36	1999	41	CF21～28 CF～CL28 CD～CF28～33	医病	病棟新営に伴う共同溝解体	1.7	－	面積18㎡、鹿田11次調査3区南側部分で中世ピット確認	56
37	1999	46	CN46～DE49	医病	病棟新営に伴う汚水桝・管路	2.3	1.2	古墳時代の井戸1基・土坑1基・中世溝等	56
38	1999	47	CM・CN・CP・CR・CT58 CV・DA・DC・DD・DF59	医	グラウンド防球ネットポール	2.0～2.3	－	11ヶ所、南側6ヶ所は河道、7～10ヶ所付近は微高地、最北端は河道	56
39	1999	48	BT51	医病	病棟新営に伴う汚水検水桝	2	1	造成土以下7層確認、古墳時代層まで掘削か。	56
41	2000	25	CD41～CN45	医病	病棟新営その他工事：管路・雨水桝	1.6～1.8	－	溝と思われる遺構など確認	61
42	2000	26	CN15・21・27 CO31・42 CS45、DV45	医	電柱及び外灯の埋設工事	1.6	－	7ヶ所、灰白色土層・淡褐色砂質土層・暗褐色砂質土層を確認、微高地部か。	61
43	2000	29	DI27	医	医学部ガス配管切り離し用バルブ取付工事	0.8～1.15	0.7	GL－0.85mで黄灰色粘質土	61
44	2000	47	DG～DJ28～67	医病	鹿田団地南側用水路境界擁壁改修	2.1～2.3	1.3～1.5	幅120mの壁面観察、古代の遺構・河道を確認	61
45	2001	37	BR～CA43、CA43～55、CA44～CL45、BR～CA55	医	総合教育研究棟埋蔵文化財発掘調査に伴う機械設置工事	1.65	0.7～0.9	中世層まで掘削、中世土器が多数出土した地点あり。	66
47	2002	10	CH11～CN22	医	鹿田団地ガス配管埋設工事	1.0～1.3	0.87	中世層まで掘削	71
48	2002	19	BT・BU11	医病	鹿田団地ガス配管埋設工事	0.5～1.8	－	2ヶ所、GL－1.22mまで掘削した地点で中世または古代層確認	71
49	2002	22	CQ41～42	医病	エネルギーセンター棟新営その他工事：共同溝排水管	1.5	－	1ヶ所、包含層まで掘削	71
50	2002	25	CG41、CO34 CF43、CO38	医病	エネルギーセンター棟新営その他工事：外灯	1.47～1.66	－	4ヶ所、中世層まで掘削	71

総号番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
51	2002	27	CV36～45	医病	エネルギーセンター棟新営その他工事：外溝	0.9～1.9	0.9	中世の井戸・柱穴・溝	71
52	2002	36	BI～BS45～53	大医歯	総合教育研究棟新営その他工事	1.85～2.0	0.8～1.0	5ヶ所、中世層まで掘削	71
53	2002	52	DC67	事	本部棟新営その他工事：植採移植	1.25	－	中世層	71
54	2002	56	BG18	医病	旧混合病棟グリーストラップ改修	1.68	－	底面で弥生～古墳層、土器小片	71

〈東山地区〉

総号番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
1	1983	13	－	教育	附属中学校新営	4.0～5.0	－	シルト層中	1
2	1997	29	－	教育	附属小・中学校他囲障改修工事	1.2	0.79	GL－1.1mで近世水田層、溝1条	50

〈三朝地区：福呂遺跡〉

総号番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
4	1997	18	－	固	実験研究棟新営に伴う電気埋設管路工事	1.0	－	GL－1.0mで中世包含層は東に向かい上昇	50

付表3　埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要（2003年度現在）

所属	種類	調査名・地区名	箱数（1箱：約30リットル）							備考（主要時期・特殊遺物）	文献
			総数	土器	石器	木器＊	種子＊	その他	サンプル＊		
医病	発掘	鹿田第1次調査（外来診療棟）	598	493	15.5	60	0.5	1	28	弥生中期～中・近世、木製短甲・人面線刻土器・ガラス滓等	7
〃	〃	鹿田第2次調査（NMR-CT室）	118.9	94	0.4	20	0.5		4	弥生後期～中世、田舟・木簡等	〃
医短	〃	鹿田第3次調査（校舎）	131.6	36	0.3	90	0.3		5	古代～中世、石帯	10
〃	〃	鹿田第4次調査（配管）	3.5	2	0.3		0.2		1	古代、鹿角製品	〃
医病	〃	鹿田第5次調査（管理棟）	130	87	2.5	20	1.5		19	弥生後期～中・近世	24
ア	〃	鹿田6次調査（アイソトープ総合センター）	62	59	0.5	1	1.5			中世、青銅製椀	40
医	〃	鹿田第7次調査（基礎医学棟）	81	66		10		1	4	弥生～近世、猿形木製品	53
医	〃	鹿田第8次調査（RI治療棟）	8	8						弥生～中世	53
医病	〃	鹿田第9次調査（病棟Ⅰ期）	120.1	96	0.1	13		9	2	弥生～近世、木簡3点	56
医病	〃	鹿田第10次調査（共同溝）	2	2						古代～近世	56
医病	〃	鹿田第11次調査（病棟Ⅰ期）	74	66		4		2	2	弥生～近世、木簡1点	56
医	〃	鹿田第12次調査（エネルギーセンター）	147	77	1	54			15	弥生～近世、櫛	61
医病	〃	鹿田第13次調査（総合教育研究棟）	254	211	5	10			28	弥生～近世	71
医病	〃	鹿田第14次調査（病棟Ⅱ期）	66	54		3			9	中世～近世	本紀要
医	〃	鹿田第15次調査（総合教育研究棟関連）	4	4						古墳初頭・中世	本紀要
全	〃	津島岡大第1次調査（NP－1）	5	0.5	0.5	4				弥生中期～古代	3
農	〃	津島岡大第2次調査（農学部合併処理槽・配管）	17.5	12	1.5				4	弥生早期～弥生前期	4
学生	〃	津島岡大第3次調査（男子学生寮）	67	49	1.5	2	4.5		10	縄文後期～古墳初頭、古代～近世石製指輪、鉈頭状土器片	19
〃	〃	津島岡大第4次調査（屋内運動場）	1	1						弥生早期～弥生前期〈試掘調査遺物を含む〉	6
大自	〃	津島岡大第5次調査（大学院自然科学研究科棟）	82	68	3	1	8		2	縄文後期～古墳、古代～近世、耳栓・木製猫（縄文）、堅果類	27
工	〃	津島岡大第6次調査（生物応用工学科棟）	49	33	1	9	6			縄文後期～近世、人形木器、アンペラ、人形土製品	35
工	〃	津島岡大第7次調査（情報工学科棟）	31.5	10	0.5	1			20	縄文後期～近世	35
全	〃	津島岡大第8次調査（遺伝子実験施設）	11.5	10	0.5				1	縄文後期～近世	32
工	〃	津島岡大第9次調査（生体機能応用工学科）	50.5	30	2.5	3			15	縄文後期～近世	47
全	〃	津島岡大第10次調査（保健管理センター）	87	78		7			2	弥生前期～近世	65
〃	〃	津島岡大第11次調査（総合情報処理センター）	5.5	3	0.5				2	縄文後期～近世	36
〃	〃	津島岡大第12次調査（図書館）	55	24	1	20			10	縄文後期～近世	65
〃	〃	津島岡大第13次調査（福利厚生施設　北）	12.5	12	0.5					縄文後期・古墳前期・中世	41
〃	〃	津島岡大第14次調査（福利厚生施設　南）	13	12					1	弥生～古墳	46
〃	〃	津島岡大第15次調査（サテライトベンチャービジネスラボラトリー）	68	14	10	20			24	縄文後期～中世、縄文後期・弥生早期遺物、アンペラ、堅果類	72

所属	種類	調査名・地区名	箱数（1箱：約30リットル）							備　考（主要時期・特殊遺物）	文献
			総数	土器	石器	木器＊	種子＊	その他	サンプル＊		
農薬	発掘	津島岡大第16次調査（動物実験棟）	0.3	0.3						縄文後期・弥生～中世	44
環	〃	津島岡大第17次調査（環境理工学部校舎Ⅰ期）	76	61	3				12	縄文後期～近世	44
全	〃	津島岡大第18次調査（南福利ポンプ槽）	1	1						縄文後期～近世	53
	〃	津島岡大第19次調査（コラボレーションセンター）	31	21	1	4		2	3	縄文後期～近世	64
環	〃	津島岡大第20次調査（環境理工学部ポンプ槽）	1	1						縄文後期～近世	53
工	〃	津島岡大第21次調査（工学部エレベーター）	7	5	2					縄文中期～近世	64
環	〃	津島岡大第22次調査（環境理工学部校舎Ⅱ期）	34	26	2	3			3	縄文後期～近世、古代堰部材、曲げ物	53
文法経	〃	津島岡大第23次調査（総合研究棟）	127	29	1	90	2		5	縄文後期～近世、石棒、杭	56
文法経	〃	津島岡大第24次調査（総合研究棟渡り廊下）	2.1	1	0.1	1				縄文後期～近世	61
農	〃	津島岡大第25次調査（農学部散水施設）	0.3	0.1		0.2				中・近世	61
事	〃	津島岡大遺跡第26次調査（事務局本部棟）	41	26		5			10	縄文後期～近世	61
事	〃	津島岡大遺跡第27次調査（創立五十周年記念館）	15	14	1					縄文中期～近世	68
工	〃	津島岡大遺跡第28次調査（自然科学系総合研究棟）	17	15	2					縄文後期～近世	71
農	〃	津島岡大遺跡第29次調査（農学部共同溝）	2.1	2	0.1					縄文後期～近世	71
固	〃	福呂遺跡第１次調査（実験研究棟）	9	8					1	縄文早期、弥生中期、中世	55
固	〃	福呂遺跡第２次調査（実験研究棟スロープ）	2.1	2				0.1		中世～近世	55
医病	試掘確認	鹿田（駐車場）	1	1						弥生～中世	5
学生	〃	津島北（男子学生寮）	1	0.7	0.3					縄文後期～弥生前期	〃
大自	〃	〃　（自然科学研究科棟）	1	1						縄文後期～弥生前期	6
事	〃	津島土生（外国人宿舎）	1	1						縄文～中世	8
理	〃	津島北（身障者用エレベーター）	0.3	0.3						中・近世	〃
教養	〃	津島南（　　〃　　）	0.7	0.7						縄文・中世	〃
工	〃	津島北（校舎）	1	1						縄文～近世	11
農薬	〃	津島南（動物・遺伝子実験施設）	0.7	0.7						縄文～弥生、中・近世	〃
事	〃	津島南（国際交流会館）	0.3	0.3						中世	〃
大自	〃	津島北（合併処理槽）	0.2	0.2						中・近世	14
学生	〃	津島南（学生合宿所）	0.4	0.2					0.2	中世	〃
教育	〃	津島北（身障者用エレベーター）	0.3	0.3						縄文	〃
図	〃	〃　（図書館）	0.8	0.8						古墳～中世	〃
学生	〃	津島南（学生合宿所ポンプ槽）	0.4	0.4						縄文～中世	18
資生	〃	倉　敷（資源生物科学研究所）	0.1	0.1						近世	〃
ア	〃	鹿　田（アイソトープ総合センター）	1	1						中世～近世	〃
事	〃	津島北（福利厚生施設）	0.5	0.5						弥生？～中世	〃
農	〃	津島南（動物実験施設）	0.1	0.1						縄文？～近世	33
環	〃	津島北（環境理工Ⅱ期）	0.1	0.1						－	53
工	〃	津島北（システム工学科棟）	0.1	0.1						－	53
全	立会	83年度	2	2						分銅形土製品	1
〃	〃	84年度	1	1						－	2
〃	〃	85年度	1	1						－	3
〃	〃	86年度	0.5	0.5						－	6
〃	〃	87年度	0.5	0.5						－	8
	分布	89年度　三朝・本島	0.3	0.3						－	14
全	立会	91年度　92年度	0.3	0.3						－	21・25
〃	〃	93年度～99年度	0.8	0.8						－	30・33・38・44・50・53・56
〃	〃	00年度	3	3						－	61
〃	〃	02年度	8.5	2.5	6					弥生早期土器、中世、礎石	71
〃	〃	03年度	2	2						－	本紀要
総　箱　数			2752.9	1948.3	67.1	455.2	25	15.1	242.2		

＊　木器・種子・サンプルの箱数は、資料整理が進むにつれて収容形態が変化するため、特に箱数の変動が大きい。
文献は付表４・５の番号に対応する。

付表４　埋蔵文化財調査室刊行物

番号	名　　称	発行年月日
1	岡山大学構内遺跡調査研究年報１　1983年度	1985年２月
2	岡山大学構内遺跡調査研究年報２　1984年度	1985年３月
3	岡山大学津島地区小橋法目黒遺跡（AW14区）の発掘調査　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第１集	1985年５月
4	岡山大学津島地区構内遺跡発掘調査報告Ⅱ（農学部構内 BH13区他）　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第２冊　（津島岡大遺跡第２次調査）	1986年３月
5	岡山大学構内遺跡調査研究年報３　1985年度	1987年３月
6	岡山大学構内遺跡調査研究年報４　1986年度	1987年10月

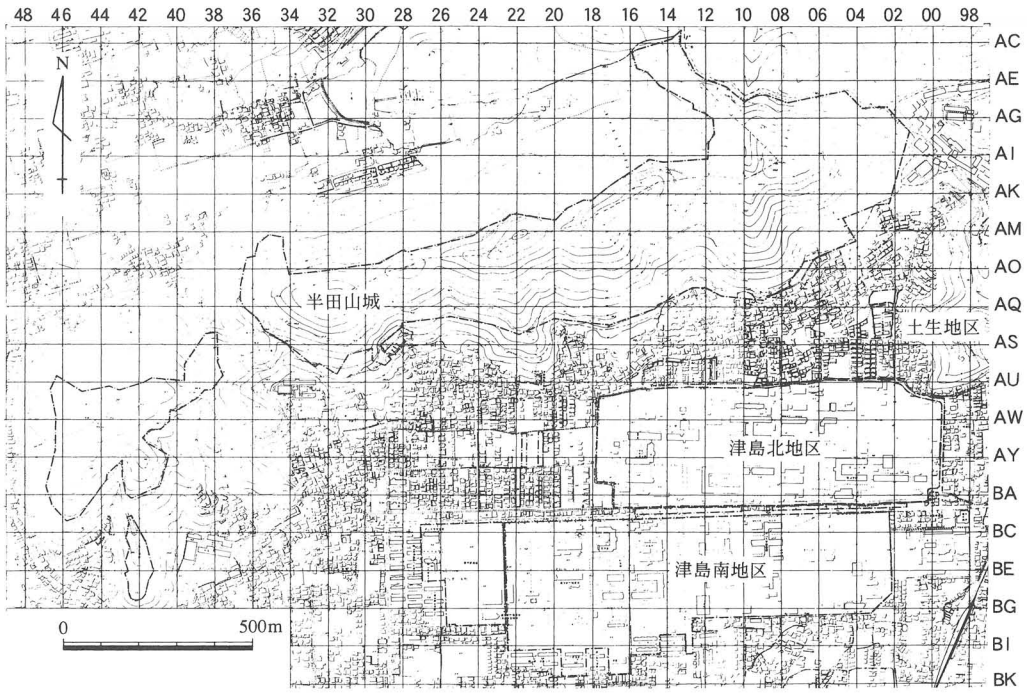
付表５　埋蔵文化財調査研究センター刊行物　（2004年３月まで）

番号	名　　称	発行年月日
7	鹿田遺跡Ⅰ　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第３冊　（鹿田遺跡第１・２次調査）	1988年３月
8	岡山大学構内遺跡調査研究年報５　1987年度	1988年10月
9	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第１号	1988年10月
10	鹿田遺跡Ⅱ　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第４冊　（鹿田遺跡第３・４次調査）	1990年３月
11	岡山大学構内遺跡調査研究年報６　1988年度	1989年10月
12	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第２号	1989年８月
13	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第３号	1990年２月
14	岡山大学構内遺跡調査研究年報７　1989年度	1990年11月
15	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第４号	1990年７月
16	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第５号	1991年３月
17	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第６号	1991年８月
18	岡山大学構内遺跡調査研究年報８　1990年度	1991年12月
19	津島岡大遺跡３　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第５冊　（津島岡大遺跡第３次調査）	1992年３月
20	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第７号	1992年３月
21	岡山大学構内遺跡調査研究年報９　1991年度	1992年12月
22	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第８号	1992年８月
23	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第９号	1993年３月
24	鹿田遺跡３　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第６冊　（鹿田遺跡第５次調査）	1993年３月
25	岡山大学構内遺跡調査研究年報　10　1992年度	1993年12月
26	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第10号	1993年11月
27	津島岡大遺跡４　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第７冊　（津島岡大遺跡第５次調査）	1994年３月
28	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第11号	1994年３月
29	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第12号	1994年10月
30	岡山人学構内遺跡調査研究年報　11　1993年度	1995年２月
31	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第13号	1995年３月
32	津島岡大遺跡５　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第８冊　（津島岡大遺跡第８次調査）	1995年３月
33	岡山大学構内遺跡調査研究年報　12　1994年度	1995年12月
34	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第14号	1995年10月
35	津島岡大遺跡６　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第９冊　（津島岡大遺跡第６・７次調査）	1995年12月
36	津島岡大遺跡７　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第10冊　（津島岡大遺跡第11次調査）	1996年２月
37	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第15号	1996年３月
38	岡山大学構内遺跡調査研究年報　13　1995年度	1996年10月
39	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第16号	1996年10月
40	鹿田遺跡４　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第11冊　（鹿田遺跡第６次調査）	1997年３月
41	津島岡大遺跡８　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第12冊　（津島岡大遺跡第13次調査）	1997年３月
42	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第17号	1997年３月
43	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第18号	1997年９月
44	岡山大学構内遺跡調査研究年報　14　1996年度	1997年11月
45	今、よみがえる古代　岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの10年	1997年11月
46	津島岡大遺跡９　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第13冊　（津島岡大遺跡第14次調査）	1997年12月
47	津島岡大遺跡10　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第14冊　（津島岡大遺跡第９次調査）	1998年３月
48	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第19号	1998年３月

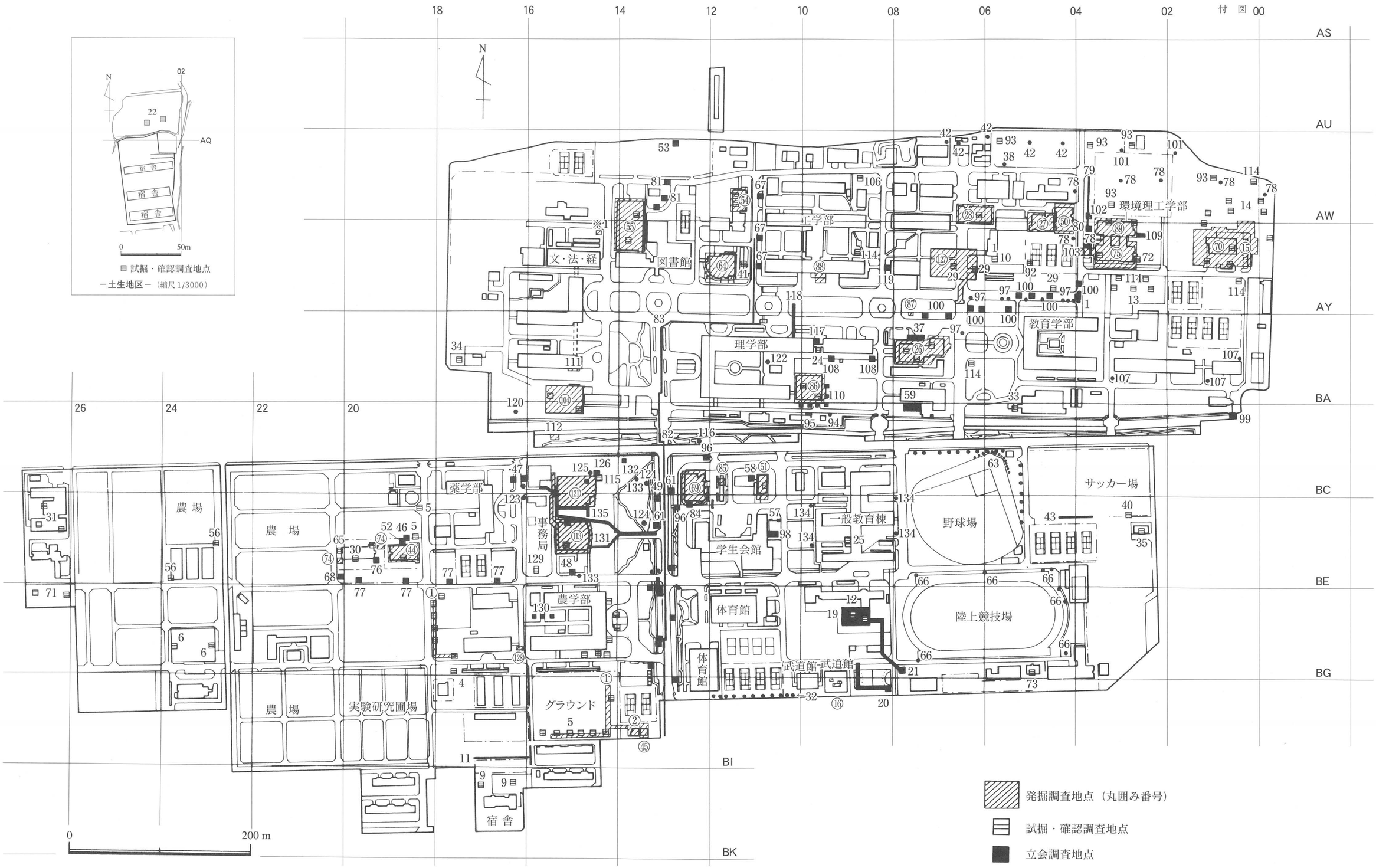
番号	名　　称	発行年月日
49	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第20号	1998年10月
50	岡山大学構内遺跡調査研究年報　15　1997年度	1999年１月
51	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第21号	1999年３月
52	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第22号	1999年９月
53	岡山大学構内遺跡調査研究年報　16　1998年度	2000年１月
54	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第23号	2000年３月
55	**福呂遺跡Ⅰ　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第15冊**　（福呂遺跡第１・２次調査）	2000年３月
56	岡山大学構内遺跡調査研究年報　17　1999年度	2000年８月
57	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第24号	2000年９月
58	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価・外部評価報告書	2000年12月
59	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第25号	2001年３月
60	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第26号	2001年８月
61	岡山大学構内遺跡調査研究年報　18　2000年度	2001年10月
62	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第27号	2002年３月
63	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第28号	2002年９月
64	**津島岡大遺跡11　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第16冊**　（津島岡大遺跡第10・12次調査）	2003年３月
65	**津島岡大遺跡12　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第17冊**　（津島岡大遺跡第19次調査）	2003年３月
66	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要　2001	2003年３月
67	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第29号	2003年３月
68	**津島岡大遺跡13　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第18冊**　（津島岡大遺跡第27次調査）	2003年５月
69	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第30号	2003年８月
70	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第31号	2004年２月
71	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要　2002	2004年３月
72	**津島岡大遺跡14　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第19冊**　（津島岡大遺跡第15次調査）	2004年３月

発掘調査報告書は太字

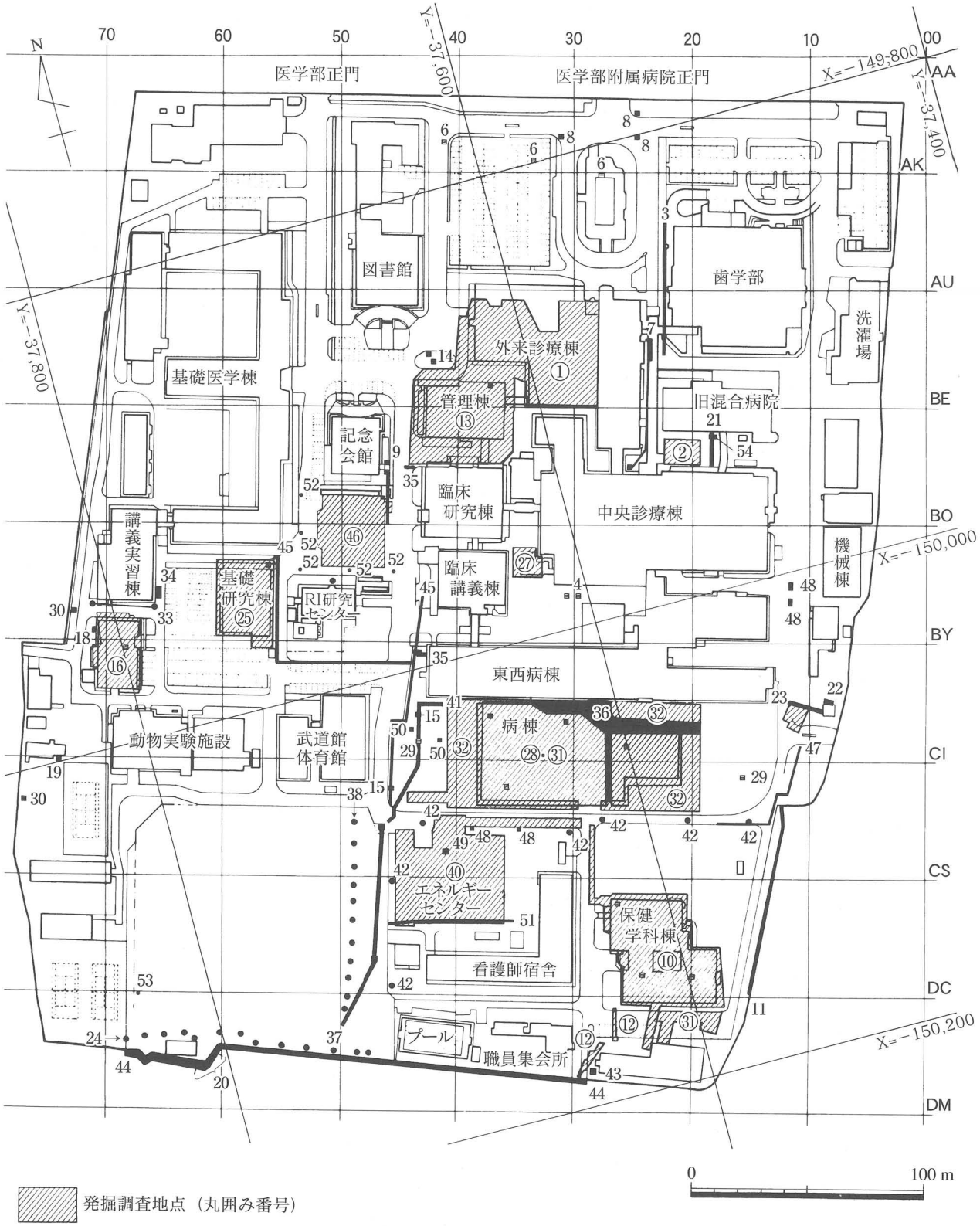
付　図



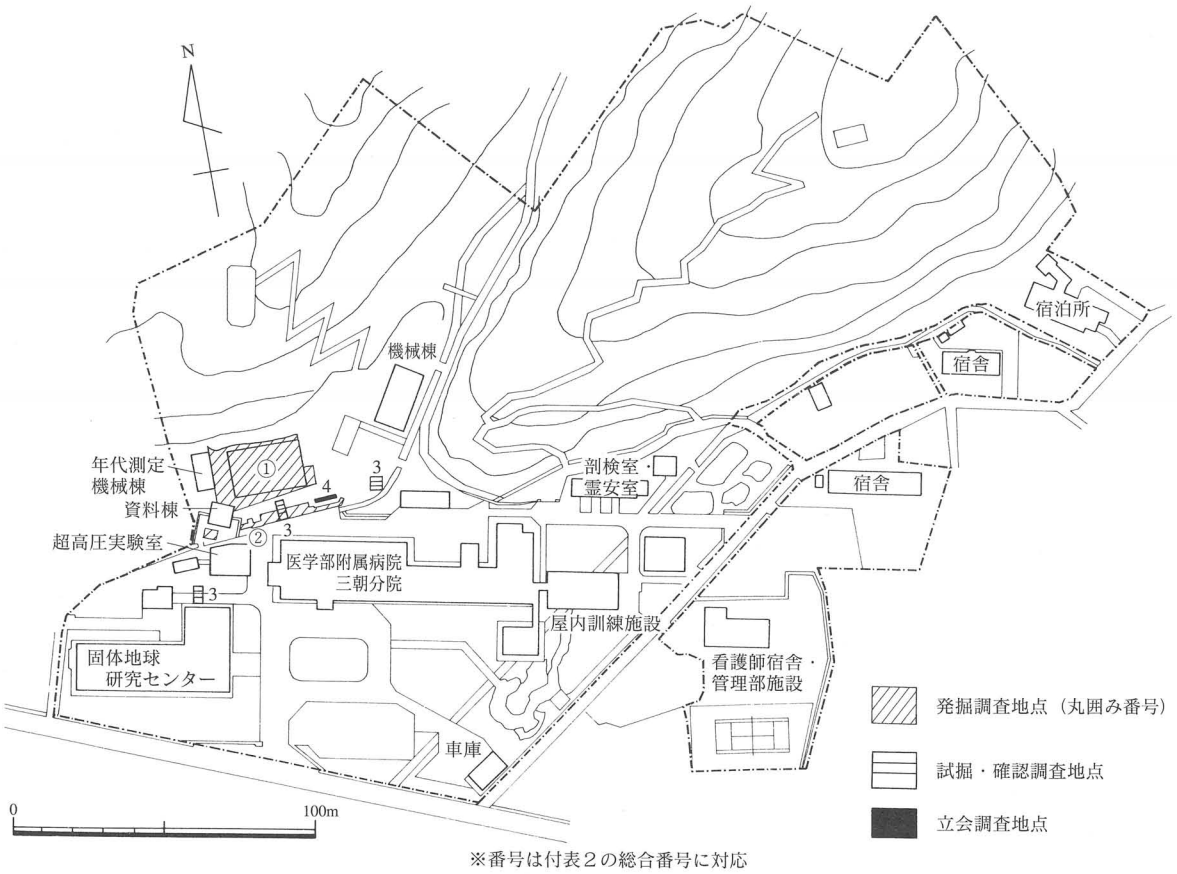
付図１　津島地区全体図（縮尺１/20,000）



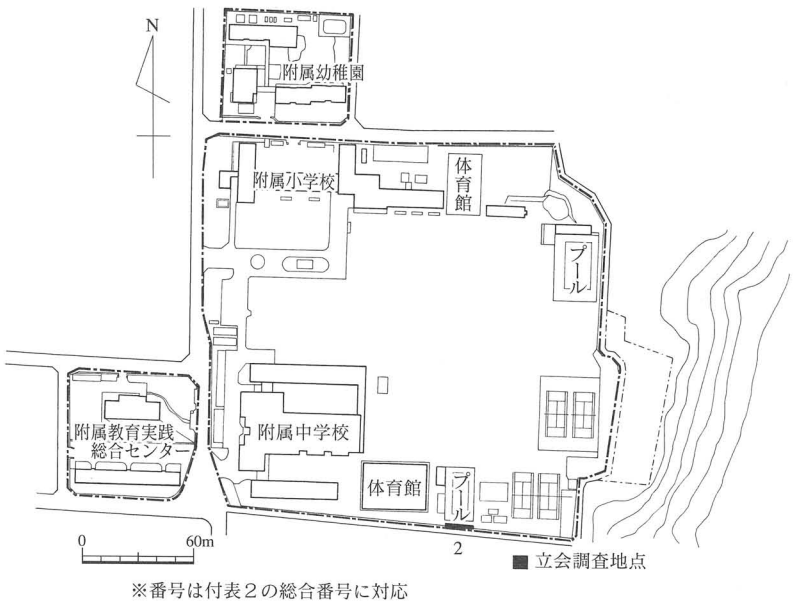
付図２　2002年度までの調査地点【１】－津島地区－（縮尺１/4000）



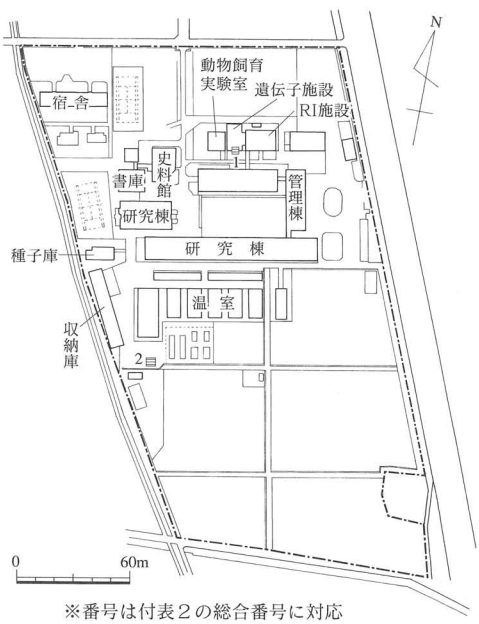
付図３　2002年度までの調査地点【２】－鹿田地区－（縮尺１/2500）



付図４　2002年度までの調査地点【３】－三朝地区－（縮尺１/2500）



付図５　2002年度までの調査地点【４】－東山地区－
（縮尺１/4000）



付図６　2002年度までの調査地点【５】
－倉敷地区－（縮尺１/4000）

Copyright©Archaeological Research Center, Okayama University
Printed in Okayama, Japan

2004年12月24日　印刷
2004年12月24日　発行

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要
2003

編集・発行　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
岡山市津島中三丁目１番１号
（086）251－7290
印刷　西日本法規出版株式会社

BULLETIN of Archaeological Research Center Okayama University 2003

Archaeological Research Center, Okayama University
3-1-1 Tsushima-Naka Okayama-city, 700-8530 Japan
http://www.okayama-u.ac.jp/user/arc/archome.html